

ISSN 0910-3090

國語問題協議會報

平成二十五年五月十日 發行

國語國字

第百九十九號

目次

第九十一回講演

十一月に思ふ―福田恆存氏をめぐつて
ドイツ語冠詞を國語に譯す試み

金子 光彦 1
桑原 草子 20

會員寄稿

正統國語教科書を作る

古典の日の制定に寄せて

縦書きの意識と感覺（その五）

〔資料〕 武部良明の送り假名論

日中英 言葉の雜學（六）

書體の變化は領主側から

和歌―嚴島と平清盛

假名の轉寫に就きて（アーネスト・サトウ著）
後書

前田 嘉則 41
市川 浩 46
若井 勳夫 49
上田 博和 52
高田 友 56
高崎 一郎 59
安東 路翠 60
上西 俊雄 62
谷田貝常夫 91

題字・插書 近藤祐康

第九十一回國語講演會 平成二十四年十一月十日 於日本俱樂部

十一月に思ふ―福田恆存氏をめぐつて

金子光彦

ただ今ご紹介に預りました金子です。本日は、福田恆存先生ゆかりの、「國語問題協議會」でお話する機會を與へて戴き、大變光榮に思つてをります。また、今年は、福田さんの生誕百年にあたりますが、さういふ節目に、福田さんについて話す事になつたのも、何かの縁と思つてゐます。私は物書きを専らとする者ではありません。それが何ゆゑ、このやうな所に立つて、福田さんについて話をするのかといふ疑問もあり得せうが、聲をかけて戴いたのは、一つは、私に十六年前に出した『福田恆存論』があることによる、と思つてをります。

この福田論はちやうど三十代の終りに出したもので、帯には、「誰も書かなかつた福田恆存論を書きたかつた」などと實に生意氣な事を書いてゐます。

また、もう一つの理由は、今から十年前になりますが、福田さんの生誕九十年の年に、「現代演劇協會」の協賛を得て、「福田恆存記念會」なるものを、三百人劇場で開催したこと

によるのだらう、と思ひます。これは、文藝評論家の富岡幸一郎氏、演劇評論家の土井義士氏と共に企劃したシンポジウムでありました。

その時は、福田先生の次男の福田逸さんにお願ひして、「父を語る」と題して講演をして頂きました。もしかしたら、この中にも當日、参加された方があつしやるかも知れません。

さうした経緯で、今日は福田さんについて話をさせて頂きますが、決して私が良き理解者だからといふのではなく、長年、福田さんの本を愛讀して來た者の一人として、ささやかな所感を述べてみたいと思ひます。

もう、秋もだんだんと深まり、銀杏も見事に色づき始めてゐます。本日の演題を「十一月に思ふ」としたのは、この十一月といふ月が、私には、ひと際「特別な月」に感じられてならないからであります。

ご承知の通り、昭和四十五年の十一月は、三島由紀夫さんが市ヶ谷で壯烈な自決を遂げられた月であり、平成六年の十一月は福田さんが長逝された月です。

今日は十一月十日ですが、昭和四十五年の今日は、「楯の會」の會員たちが市ヶ谷駐屯地へ下見に行つた日にあたり

ます。それから二週間後の二十五日、三島さんは劇的な自決を遂げられました。その時、福田さんは、劇團「雲」と芝居の稽古の眞つ最中でした。

その運命の日から二十四年の歳月が流れて、平成六年十一月、既に福田さんは自宅で病氣療養中でしたが、二十日、つひに歸らぬ人となりました。

師走の九日に青山で葬儀が行はれましたが、その日は小雨模様で、私も地面に散り敷いた銀杏の葉を踏みしめながら会場へ向つたのを覚えてゐます。

二人は、かつて、中村光夫や大岡昇平、吉田健一たちと「鉢木會」を作り、丸善から『聲』といふ空前絶後の同人誌を出したりしましたが、戦後日本に對する「アンチテーゼ」としての生涯を送つたといふ意味で、同じ宿命の下に生れた「星」のやうに思ひます。その巨星が、戦後日本に赫々たる光彩を放つて、二つながら、この十一月といふ月にその運命を全うしたのでした。

思へば、私が福田さんに出會つたのは、かれこれ三十數年も前の事になります。

若い頃は誰しも自分の生き方について悶々とするものですが、私も人並みに鬱々とした日々を暮らしてゐました。

かさんことを想ふ。(中略)

が、精神は自己主張に優越者の責務を課する。ところで實生活においてみじめにふみにじられた自我の、いつたいどこに優越者のおもかげを見いださうであらうか。薄暗い憂鬱と不満とは、所詮おなじ抑壓されたエゴイズムの表情ではあるまいか——と覺つた瞬間、僕たちはあへて自身を徹底的に否定しようとする。

*

この場所に創造はたして可能であらうか僕たちは沙漠のなかにゐるのか、それとも泉のほとりに立つてゐるのか。芥川龍之介の表現はここから始つてゐる。

(「芥川龍之介」)

福田さんが「芥川論」を初めて書いたのは、昭和十六年の事です。まだ批評家として世に出る前で、「形成」といふ雑誌の編輯者をやつてゐた頃です。その若き福田恆存が、全身全霊を傾けて書いたのがこの一連の「芥川龍之介」論でした。

私はこの一文を初めて讀んだ時、成熟した批評家・思想家「福田恆存」ではなく、私と同じやうに、人生の處し方・生き方について、大いに悩み、迷つてゐる「若き福田恆存」

その鬱を晴らす「答」がどこかに無いかと、いろんな本を讀み漁りましたが、ある時、『福田恆存評論集』一卷を手に入れて讀んだのが、福田さんとの出會ひでした。

本との出會ひは、思はぬ縁を結ぶもので、福田さんも若い頃、ロレンスの「アポカリプス論」を讀んで、「自分はこの一書によつて人間の觀方を一變させられた」と告白してをられますが、私にとつては、この中の「芥川龍之介」論がまさしく、私の人生を大きく變へたやうに思ひます。私は、その中の文章を、まるで福田さんが私に直接語りかけて來るかのやうに感じながら、繰り返し繰り返し讀んだのを覚えてをります。

その「芥川論」から、今でも忘れられない一文を讀んでみます。

僕たちが靜かに自分の生活を顧るとき、つぎのやうな虚脱のひとつときを経験することがないであらうか。一日を我の闘ぎあひのうちにすごし、ひとびとの輕蔑や嫉妬や排斥のために自己の欲望や情感を根こそぎ否定されて戻つて來た僕たち自身の姿を、薄暗い書齋のなかに見いだすことはなかつたであらうか。そんなとき僕たちは胸に恨みを秘めて、實生活において否定された自我をなんらかの方法で生の姿をまざまざと見る思ひが致しました。

「この場所に創造はたして可能であらうか、僕たちは沙漠のなかにゐるのか、それとも泉のほとりに立つてゐるのか。芥川龍之介の表現はここから始つてゐる」といふ言葉は、まさしく福田さん自身がそこから「表現」を始めたことを明かす、切實な告白として聞こえました。

私はその言葉と出會ひ、その迷ひの眞ん中にゐる人が、その後どんな風に人生を歩いて行つたのか、それをぜひとも見届けてみたいと思ひました。そして、それは、他ならぬ私自身の問題だと感じたのでした。

後年の事です、福田さん自身、この「芥川論」についてかう書いてゐます。

「芥川龍之介Ⅱ」は私には愛着がある。良かれ悪しかれ、私の本性がもつともあらはに出てゐるものであり、また私の仕事の最上のもので一つだとうぬぼれてゐる。(中略)とにかく、こゝにはその後いろいろに展開された私の主題のすべてがある。

(『福田恆存評論集』3「後記」)

こゝに福田さんは「私の主題」と言ひますが、ご承知の

通り、福田さんの仕事には文學あり、演劇あり、國語問題あり、平和論ありと、實に多岐に亘つてゐます。しかし、何よりも大切な事は、その領域の廣い仕事の根底に、福田さんのこの「主題」が常にあつた事を忘れないことだと思ひます。この「主題」とは、言つてみれば、人間の「自我の問題」であり、「人と人は、眞に愛し得るのか」、「われわれ人間は、どうすればこの『自我意識』から解放されて、結びつき合へるのか」といふ問題に他なりません。福田さんは、生涯、この「主題」と闘ひ續けた、と思ひます。

さういふ「主題」を背負つて、福田さんは批評家として歩み始めるわけですが、こゝに、近代日本における「批評」といふものゝあり方について、考へねばならない問題があるやうに思ひます。

ご承知の通り、日本の近代批評の創始者とも言ふべきは小林秀雄氏ですが、小林さんは色紙に揮毫を頼まれた時に、「批評トハ無私ヲ得ントスル道デアル」と書きました。私は、これは、日本の近代批評の性格を考へる上で、極めて象徴的な言葉のやうに思ひます。西洋の批評家ならば、決してそんなことは言はないでせう。「批評」を「無私」を得んとする「道」などとは決して考へないと思ひます。

るを得ませんでした。福田さんは「文藝批評」なるものを最初の十年くらゐで止めてしまひます。「文藝批評家失格」といふ文章にこんな一節があります。

戦前のやうに「文學の神様」が絶対視されるのも困る。が、今日のやうに神が無くなつてしまつたのも困る。いや、無いのはよい。それが實情なのだから、どうにも仕方はない。問題は、神の不在に氣づかなくなつてしまつたといふことにある。それで一向差支へなくなつてしまつたといふことにある。だが、實際はそれではすまない。人間にはやはり神が必要なので、無くてもいいつもりで過ごしてゐるうちに、やがて讀者の方がそれを文學に求めてくるだらう。(中略)

讀者ばかりではない。小説家にしても批評家にしても、神がゐなくて差支へないといふことは實際上ありえないので、誰もそれがあるやうな氣がしてゐるし、それぞれひそかに、それを求めてゐるのである。(「文藝批評家失格」)

なぜ日本の「現代文學」がつまらないか、なぜ自分は「文藝批評」から足を洗ふのか、福田さんはその理由をこゝにはつきりと書いてゐます。日本の「現代文學」には「神」の

しかし、近代日本においてはさうではない。「批評」といふものが、いはゞ一種の「宗教」の役割を引き受けて、人間のエゴイズムといふものを如何に克服して行くか、といふ問題を考へる「道」に結びついて行くわけです。

誤解を恐れずに言へば、小林さんにしろ、福田さんにしろ、彼らが求めた「批評」は、人間が宿命として背負つてゐる「自我意識」や「エゴイズム」を超えようとする知的努力に他ならず、その結果、必然的に一種の「神學」的性格を帯びざるを得なかつたのだと私は思ひます。

そして、彼らの辛さは、「宗教哲學者」や「宗教家」などと違つて、既成の哲學概念や宗教的價值に自らの「主題」の解決を預けるのではなく、自分の「批評精神」と「言葉」だけで、その問題と闘はざるを得なかつた所にあつたのではないでせうか。

言ひ換へれば、二人の凄さは、所謂「文士」として、「國語の傳統の力」だけで、その「主題」と闘ひ續けた所にあつたと、私は思ひます。また、それゆゑに、二人の「主題」が、身近な形で、私たち自身の問題としての普遍性を持ち得るのだと思ひます。

さういふ次第で、福田さんの「批評」も自づと變はらぎ

問題が無いからだ、と。その「神」の問題は、言ふまでもなく、福田さん自身の「主題」と直結してゐたものでした。福田さんは、自らの「主題」を見出し得ない「現代文學」に深い不信を懷いて、「文藝批評」にサッサと見切りをつけましたのです。

かくして「文藝批評」を止め、福田さんが取り組んだのは、もつと深く自らの「主題」を掘り下げる仕事でした。その代表的なものとして、『藝術とはなにか』や『人間・この劇的なもの』を書いてゐますが、それらは、人間の「自我の問題」をどこまでも掘り下げて行かうとする、徹底した本質論でした。

福田さんは『人間・この劇的なもの』の中でかう書いてゐます。

おそらく、私たちの自我といふ觀念そのもののうちに、なにか誤りがあるのであらう。私はかう思ふ。私たち日本人は、自我のうちに自分と他人といふ二つの要素しか見てゐない。他人を見る自分と、他人に見られる自分と。したがつて、自我意識といふものが、たんに心理的平面においてしかとらへられないのだ。それはあくまで相對主義的であ

る。(中略)

しかし、自我は自分と他人といふ相対的平面のほか、その兩者を含めて、自我を超えた絶対の世界とか、はりをもつてゐるのである。

こゝに「自分」と「他人」、「自我」と「他我」といふ相対的次元の他に、「絶対」といふ視點が出て参ります。この「絶対」といふ言葉は、「自我」といふ言葉と共に、福田さんの生涯における「キーワード」であつた、と私は思ひます。

福田さんはかうも書いてゐます。

『人間・この劇的なもの』は、私の、あるひは人間の、自我始末法であり、その意味では他の私の仕事と變りはない。(中略)自我の崩壊まで行きつかぬやうなかなる自我の確立をも私は信じない。

(『福田恆存評論集』2「後書」)

先ほど言つたやうに、小林さんや福田さんの「文學」が、一種の「神學」的性格をもつてゐるのは、彼らが「自我」といふものを徹底して懷疑し、「自我」の限界を認識し、そ

現實の世界です。この平面を離れた、そしてこの平面とは直接につながらぬはるか上空に、ひとつの點を想像してみます。それが絶対者です。幾何學的にいへば、前者の平面と後者の點と、兩者を含むことによつて三次元の立體的な世界ができあがります。この點と平面とを結びつける梯子があるかないかで、人間の生きかたは、ずいぶん變つてくるでせう。

*

點と平面との幾何學はかういふことを教へてくれます。上空の點を缺いた平面だけの世界では、あたかも、森に入つて森を見ざるごとく、遠見がききません。私たちにとつて、他人といふのは、すぐそばにゐる隣人といふことにすぎない。他人とつながるといへば、その隣人につながるといふことしか意味しません。隣人との縁が切れれば、その向うにゐる多數者である赤の他人とは、どうにもつながりやうがないのです。さうなれば、個人はそれぞれ孤立します。さびしくてたまらない。それに反して、もし上空の一點とのつながりを得さへすれば、各個人は、それぞれの隣人を飛び越えて、遠く廣く、他の多くの人間とつながることができるとです。

もちろん、その一點が萬人共有のもので、ひとりひとり

れを越えるための「絶対」といふ問題に直面してゐたからに他なりません。

言ひ換へれば、「絶対」といふ視點を導入することによつて、「自我の解體」と「自我の始末」を圖り、相対的な人間觀からの脱出を試みようとしたのが、まさしく福田さんの仕事の核心だつたやうに思ひます。

こゝで、福田さんの「人間觀」をもつともシンプルに表現した言葉を引いてみたいと思ひます。これは「日本および日本人」といふ論文からの引用ですが、昭和三十年に書かれたものです。昭和三十年と言へば、ちやうど戦後十年が経ち、竹山道雄さんの「昭和の精神史」に代表されるやうに、戦後初めて日本人自身が「日本とは何か」、「日本人とは何か」、を本格的に振り返り始めた時期でありました。まさしくさういふ時期に、福田さんはこの「日本および日本人」を書いたわけです。そして、言ふまでもなくその中心命題は、如何にしたら日本人は「エゴイズム」を超えて互ひに繋がり得るか、といふ「主題」の展開にありました。福田さんはかう書いてゐます。

ここにひとつの平面を假定してみます。それが相対的ながその點に結びつけられてゐるといふ前提のもとにおいてであります。さうすれば、めいめいの個人の間に直接の線が引けなくても、上空の一點を経て、どこにでもつながる可能性が出てきます。個人は平面上では孤立しても、間接には孤立してゐないといふことになります。個人主義が發生しうるわけであり、また個人主義にたへうるわけであります。(「日本および日本人」)

福田さんの人間觀の根柢には、人と人は、「互ひにつながりたい」「信じ合ひたい」といふ強い願望があるにも關はらず、自分と他人との間に「厚い自我の壁」が立ちはだかつて、どうしても直接に結びつくことが出来ないのだ、といふ辛い認識があります。

また、福田さんはこんなことも言ひます。もし、自分に小説家の才能があつたらトルストイの『復活』の續編を書きたい、と。その時は、きつと、己の非を悟つてキリスト教の信仰に目覺めた主人公が、再び下女を犯し、女を誘惑し、同じ誤ちを繰返すところを書くだらう、と。

福田さん流に「身も蓋もない」言ひ方をすれば、人間といふものは、所詮、自分自身が後生大事なのであつて、愛とか友情とか綺麗ごとを言ひながら、自分を正當化し、性慾

りもなく同じ誤ちを繰返す存在に他なりません。

人間は、さういふ存在でありながらも、共に生きて行かざるを得ないわけですが、人間が「エゴイズム」を超えて互ひに繋がり合へる一つの可能性といふものを、福田さんはこゝに提示してゐると思ひます。

それは、人間の「自我」をもつと高いところから俯瞰し、徹底してそれを相對化する「絕對者」の視點を設定することによつて、人間同士が間接的に繋がり得る可能性でした。しかし、これと全く同じことを、言つた人がゐます。近代日本のキリスト者を代表する内村鑑三です。内村が死の半年ほど前に書いた、「靈魂の父」と題した一文から引用してみます。

（人の肉體は）土より出て土に歸り、（靈魂は）神より出て神に還る。人は其意味に於て三元物であつて、肉と靈とは胎に於て合し、死に際して別かるゝのである。

そして亦、人の個性なるものは、全く茲に起因するのである。人は、一人一人神に特別に造られたる者であるからである。何人も神を靈魂の父として有つからである。

其意味に於て、兄弟は勿論のこと、親子までが他人であ

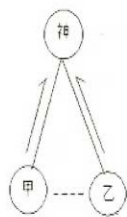
しく超える「絕對」といふ次元を設ければ、それによつてお互ひの「自我」を相對化し、許し合ひ、認め合へる、一つの可能性が示されるわけです。福田さんと内村鑑三は、人間救済の論理として、ほぼ同じ構造の「人間觀」を語つてゐた、と言へると思ひます。

しかし、「人間觀」などといふものは、所詮、「人間觀」に過ぎません。先ほど「神と人間の三角關係」などと言ひましたが、どんなに「言葉」や「概念」で理解した積りになつても、それですべて人生の解決がつくほど單純なものではありません。そこが、人間の難しいところ、だと思ひます。

福田さんは、極めて知性に富んだ方なので、つひその表面の論理ばかりに眼が行きがちですが、福田さんの「言葉」の後ろには、常に「福田恆存」といふ「生身の人間」があることを忘れてはなりません。福田さんは、先ほどの文章を書いてから、十年餘り後にこんな一文を書いてゐます。

今までの自分の仕事は一切まちがひであり、徒勞だつたのではあるまいか、といふ不安がつねに私にはあるのである。その不安が決定的になる時が、いつ來ぬとも限らぬで

る、各自異りたる靈魂の所有者であるからである。（中略）それ故に、人は直ちに人に繋がる事は出来ない。縱令親子と雖も然りである。人は、神を通してのみ、相互に繋がる事が出来る。左の圖式を以て、之を説明する事が出来る。甲と乙とは、如何に親しき身内なりと雖も、相互に一體たる事は出来ない。一體たらんと欲せば、甲乙、各自、先づ、靈魂の父なる神に繋り、神に在りて、一體たる事が出来る。



（昭和四年『聖書之研究』三五〇號・「靈魂の父」）

私はこの一文の存在を、新保祐司氏の『内村鑑三』論で知つたのですが、この内村の言葉を、先ほどの福田さんの言葉に重ね合はせてみると、驚くほど實にピッタリと重なります。福田さんが言つてゐるのも、まさしく内村が圖示したやうな、「神と人間の三角關係」に他なりません。

人と人は、直接に繋がらうすれば、必ず自我と自我がぶつかりあふ宿命にある。しかし、そこに、自我も他我も等

はないか。私ばかりではない。文學の仕事とはさういふものかもしれない。

（『福田恆存評論集』1「後書」）

私は、初めてこれを読んだ時、「福田さんにしてこの言葉があるか?」、と正直、思ひました。これを書いた時、福田さんは五十五歳です。既にそれまでに立派な仕事をいくつもして來てゐるんです。しかし、それにも關らず、福田さんは、自分の「不安」をなほも語らざるを得なかつた。

もちろん、こゝに言ふ「不安」とは、誰かの「力」や「言説」によつて、自分のこれまでの仕事が否定されてしまふといふやうな「不安」では決してないと思ひます。それは、言ふなれば、「神」や「絕對」の問題に對峙する人間だけが持つ「不安」、あるいは「畏れ」といふ感情に近いものではなかつたでせうか。

内村鑑三は、『ロマ書の研究』といふ本の中で、「人間には人間を救ふ力が與へられて居ない」と言ひます。福田さんは、日本の「現代文學」には「神」の問題がないと言ひましたが、福田さんが求めてゐた「文學」は、言つてみれば、「人間には人間を救ふ力が與へられて居ない」といふ痛感から始まる「文學」ではなかつたか、と思ひます。

それでは、人間は何によつて救はれるのか？ 人間を救ふのは「絶対者」か？ それなら、その「絶対者」とは一體何ものか？ …… 福田さんは、その本質的な問いに明確に答へ得ない「不安」を懷きながら、その場所に静止し続けたのではないでせうか。福田さんは、自分の正直な気持ちをかう明します。

絶対者とはなにか。私はそれを神學的に説明することはできません。また、その「必要」を實感として分かつて頂くやうにすることもできない。せいぜい出来ることは、平俗な言葉をもつて、それがいかに「便利」なものであり、「合理的」なものであるかを傳へるくらゐのものであります。絶対者を平俗な次元で語ることは無理ですが、今のところ、それはどうにも仕方ありません。（日本および日本人）

福田さんは、「絶対者」について、自分はそれを「神學的に説明すること」はできないと言ひます。あくまでも「合理的」であるとか、「便利」であるとか、さういふ風に言ふしかない、と言ひます。

思ふに、福田さんの中には、「文學」も所詮は「人間」の側の營爲であつて、「人間には人間を救ふ力が與へられて居なかつたか、と思ひます。私には、それが、「福田恆存」といふ「人」の魅力であり、急所だつたやうに思はれてなりません。

私は、こゝに、同じく、「不安」と「孤獨」に耐へながら「絶対」の問題と直面し續けた人として、「三島由紀夫」を附け加へたいと思ひます。

思へば、三島さんほど熱烈に「絶対」を渴望してゐた人はあませんでした。それは誰の目にも明らかほど、露骨に激しい「絶対願望」を懷いて生きてゐた人でした。

しかし、思ふに、三島さんには—その「絶対願望」の激しさゆゑに—自ら強引に「絶対」を創り上げたいといふ、非常に激しい欲求があつたやうに思ひます。

先ほどの「神と人間の三角關係」で言へば、三島さんは本来「神の座」であるべき「上空の一點」の空席に、自ら拵へた「絶対」を強引に据ゑようとした所に、その不幸があつたのかも知れません。

ご承知の通り、三島さんは、獨特の「天皇觀」を持つてゐて、自決の三年前に行はれた福田さんとの對談「文武兩道と死の哲學」でも、明瞭にかう語つてゐます。

ない」以上、どんなに「神」の問題を「文學」で追及しても、それは眞の「信仰」とは「似て非なるもの」だといふ自覺があつたのではないでせうか。福田さんの言ふ「不安」とは、その正直な告白ではなかつたでせうか。

しかし、そこが一番大切なところで、私が「福田恆存」といふ人を信賴するのは、まさしくその一點にあります。

福田さんの魅力は、その論理的な明晰性だけにあるものではありません。その論理そのものにも委ねきらない、一人の生きた人間が持つ「不安」や「孤獨」を、決して誤魔化さなかつた所にある、と私は思つてゐます。おそらく、福田さんの言論を自らの爲に利用しようとする人は別として、それは、福田さんに親身に付き合つた方々には自明の事だつたに違ひありません。

福田さんは自らが必要とする「絶対者」に對して、得々とそれを語つてみせるのではなく、その存在を信じつゝも、それが何ものであるかを明確に語り得ない人間の「不安」の中に、あくまでも静止し續けてみせたのでした。

言つてみれば、それが、福田さんの「絶対者」との對し方であり、「無知なるものが無知のままに」、自分を越えた何者かを信じて生きてゆく、「人間」そのものへの信賴では

僕の言つてゐる天皇制といふのは、幻の南朝に忠勤を勵んでゐるので、いまの北朝ぢやないと言つたんだ。戦争が終つたと同時に北朝になつちやつた。僕は幻の南朝に忠義を盡してゐるので、幻の南朝は何ぞやといふと、人に言はせれば、美的天皇制だ

昔から天皇家の南朝・北朝のいづれを正統とみなすかといふ、「南北朝正閏論」がありました。ここで三島さんが言ふ「幻の南朝」とは、その議論とは別の、自らが信ずる「美的天皇制」の象徴として語つたものと、解する必要があります。

三島さんにとつて、自分が信じる「美的天皇制」とは、「日本」を「日本」たらしめる唯一の「絶対的價值」であり、「日本」と「西洋」とを區別する決定的な「メルクマール」に他なりません。

しかし、福田さんは、さういふ三島さんの「絶対觀」に對して、どうにも危ないものを感じてゐました。福田さんは三島さんにかう言ひます。

あなたのは美學だよ。あなたの場合はさうであつても、傳染すればファナティズムになるでせう。さうなるとあな

た自身が天皇のつらさを味ははされなきやならない。

福田さんは、三島さんの「美的天皇制」は、個人的な觀念上の「美學」としては良くても、それを現實の世界における「絶對的價值」とするのは、非常に「まづい」、と指摘したのでした。

なぜなら、それは、所詮、相對的な次元のものに過ぎない「價值」を、「絶對的價值」として祭り上げてしまふことに他ならないからであります。福田さんは、そこに、實に危ないものを感じとつてゐました。

かつて、二人は、「鉢木會」といふ同人の良き仲間でしたが、いつしか同人たちの氣持が合はなくなり、三島さんが「鉢木會」から離れ、その後はほとんど疎遠になつてゐました。

しかし、同じ軌道から外れた「星」同士は、やがて衝突する運命にありました。三島さんの死の二年前、二人は、ある出版社が企劃した「日本人の再建」と題した座談會で激しく衝突しました。この時の二人のやりとりは、實にスリリングなものでした。

まづ、福田さんが口火を切り、「三島さんはやつぱり西洋と日本との差は絶對的なものだと思ふ」か、と聞きました。

んの刃を受け止めました。

もちろん、それでは三島さんも納得しません。「日本とヨーロッパの差は相對的である」と考へるのなら、「その二つを相對化するところの第三の絶對」といふものがある筈だ、その「第三の絶對といふのは何なんですか」、とたみかけます。

先に見た「神と人間の三角關係」で言へば、三島さんは、福田さんに、お前が三角形の頂點に置いてゐる「絶對」といふものを自分の言葉で言つてみる、と要求したのでした。思ふに、三島さんは福田さんに、どうしても「キリスト教」や「カトリック」の事を持ち出さなかつたのではないでせうか。福田さんは、常々、自分の人間觀や世界觀を「カトリシズム」の論理で語つてゐました。三島さんも當然そのことはよく知つてゐた筈です。もし、この時、福田さんが「キリスト教」や「カトリシズム」を持ち出してゐたら、三島さんは何と言つたでせうか。「福田さん、あなたは、やつぱり西洋に毒されてゐる」——とても言つたでせうか。

しかし、この時、福田さんは決して「キリスト教」や「カトリシズム」を持ち出しませんでした。たゞ、「本能」とか「自然」とか「生命力の根源みたいなもの」、と答へただけ

三島さんは、それに對し、「日本と西洋の差は絶對的なものだ」と答へます。

福田さんは三島さんに、「日本」や「美的天皇制」を絶對化するのは危険だ、といふことを、どうしても分かつて貰ひたかつたのです。しかし、三島さんは、「日本」は「絶對的」なものだと、譲ることはありませんでした。

福田さんは、さらに重ねて、「日本と歐米とさう差を立てて考へる必要はない」だらうと異を唱へます。さう言はれ、ば、三島さんは當然、引き下がるわけには行かず、かう切り返します。

つまり福田さん、歐米と日本との差が相對的であるためには、もう一つその上に絶對的なものがなければ相對性といふものは生じないのだから、さうしたら、福田さんがそれを相對的だとおつしやるときには、すでにその兩方を相對化するところの絶對性といふものをあなたは考へていらつしやるわけだ。それは何といふわけですか。

今度は、三島さんの方から、福田さんに斬りかかつて行つたのです。しかし、福田さんは、これには、ただ一言、……「ぼくのは本能的なものだな」、とだけ答へて、三島さんです。

三島さんはこれに對して、「ぼくはさうは思はない」、「それは絶對的價值かどうか」疑問だ、とムキになつて反論を繰り返しました。

さういふ三島さんを見て、福田さんは、何かを諦めたやうに、ポツリと言ひます。……「非常に閉ざされたものだね。日本といふものを絶對化し、それしか信じないといふのは、ちよつとをかしいんだよ」、と。

この言葉に、三島さんは何を思つたのでせうか、「さうだね。しかし、それは……」と、言葉を詰まらせてしまつたのです。二人は、もうそこから先は、議論の問題ではないことに氣づいてゐたのかも知れません。

右のやりとりの後、三島さんはかう言ひます。

お前はそんなことを信ずるなら、日本人とはどんな嫌なやつでも話が通ずるが、西洋人との間には絶對のサクを置くのかといふ質問があるでせう。さうすると、ぼくは日本人との間にも正直にいつて通じないよね。さうすると、自分の考へてゐる價值といふものがどんどんどんどん求心的になつていくわね、あなた（福田恆存）が遠心的になるのとは反對に。求心的なものと自分を同一化してしまへば、

どんなにラディカルになるかわからないわね。

この言葉をみると、三島さんは、既に、死を豫感させるほど「ラディカル」な方向へ自らを追ひ込んでゐたやうに感じます。

福田さんは三島さんの「絶対観」に對し、「非常に閉ざされたものだね」……と言ひましたが、閉じた圖は、次第に圖の中心點に向つて、さらに閉ぢて行くしかなかつたのでせう。三島さんの精神に宿つた「美的觀念」としての「絶対」は、もはや「文學」の一線を超えて、現實の「行動」によつて自らを具象化することを、三島さん自身に求めてゐたのかも知れません。

これは三島さんの死の一年前のことです。三島さんは村上一郎氏との對談でかう言ひました。

「あした首相官邸を占領する」と言つたら、その言葉は文學の言葉と本質的に同じ重さを持つべきだ。

*

ぼくら小説を書くときはさういふ言葉を書くつもりで書いてゐるのだから、さうしたらやらなければならない。そりや死んでやらなければならない。だから「十一月死ぬぞ」

が、晩年の三島さんは、かつて石原氏に向つて言つた、この「政治」と「文學」の一線を、自ら大きく踏み越えてしまつたのでせうか。

三島さんの頭には、「文學」の、つまり「精神」の「政治」に對する勝利は、「行動」にまで行き着いて初めて完成するといふ、所謂「陽明學」の理論があつたかも知れません。

しかし、思ふに、三島さんの一見「政治的に見える最期」は、「文學」といふ「美しい夕やけ」を捨て、「政治」を選んだといふことではなく、自らの死を代償として「美しい夕やけ」、すなはち、自らの信じる「美的價值」を「絶対」の座につけようとしたのではないでせうか。

話を、福田さんに戻します。三島さんに、「お前の考へる絶対とは何だ」と問ひ詰められて、福田さんはそれを「本能」であり「生命力の根源」であると答へましたが、それは決して「はぐらかし」などではなく、福田さん自身、やはり、さう言ふかは無かつたのだと思ひます。福田さんは、かう言ひます。

私が歸依すべき「全體」が何か、それが解れば、私はこんな本（『人間・この劇的なもの』）を書きはしなかつた

といつたら絶対死ななければならない。政治の言葉が文學の言葉と拮抗するのは、その一點を描いてないのですよ。（尚武の心と憤怒の抒情）

自分の「文學の言葉」を「政治の言葉」と「拮抗」させるために、「行動」といふ手段を必要とする……三島さんはさう考へます。……しかし、これは、もはや「小説家」の言葉ではありません。三島さんは、「文學」を捨ててしまつたのでせうか。

かつて、石原慎太郎氏が初めて参議院選に立候補した時の、三島さんの言葉が思ひ合はされます。今は亡き江藤淳氏が、石原氏にかう言ひます。

いつか三島さんが君にいつたろう。「夕やけを見てきれいだと思つたら、政治家になれないぞ」……この言葉は、いかにも三島さんらしい文學的表現です

（昭和四十三年『季刊藝術』十月號 江藤淳・石原慎太郎對談）

「夕やけを見てきれいだと思つたら、政治家になれない」……この言葉は、いかにも三島さんらしい文學的表現ですらう。いや、私は第六章の終りのほうに、はつきり書いてゐるのである、「全體」がなんであるかを自分の眼の前に規定してはならぬ、と。さう規定しうるやうなものは眞の「全體」ではないといつてゐるのだ。

そんなふう「全體」を規定してもらひたがる精神は、おそらく獨裁者か奴隸か、そのどちらかに適して生れついでゐるのであらう。

さういふ人たちは、さらに、私を「主體性のない」懷疑家だといふ。何を持ち出してきても、それに猜疑の眼を向け、それを神として受けとることを卻ける男だといふ。自分を超えるものについて語りながら、私がそれを信じてゐないといふのである。それにたいして、私はくどくどしく答へる必要を認めない。

私は信じてゐる、たゞそれだけいつておく。

（『福田恆存評論集』2「後書」）

「絶対」や「全體」を一切規定することなく、「私は信じてゐる、たゞそれだけいつておく」と福田さんは言ひ切ります。「言葉」による表現や認識が全く届き得ないもの、それが「絶対」であり「全體」であるといふ認識が、福田さんには明確にありました。

今から三十年ほど前のことです。私は、ある講演で、福田さんから直接聞いた言葉を思ひ出します。福田さんは私たちにかう語りかけました。

何かわれわれのうかがひ知れないものがある。さつき、個人的自我と言ひましたが、われわれは、自分を押し出してゐる背後の自然の目的といふものを理解することはできないのです。

それを、生意氣にも、さういふものが分かつと思つたら大間違ひです。その何ものかの存在といふのは、神と言はうと、天と言はうと、どういふ言葉を使つてもいいけれども、さういふものは人間には分からないし、何のために自分を生ぜしめて、動かしてゐるのかといふことも分からない。

だから、何でも分かつと思ふのが間違ひです。長い間つきあつてゐるたつた一人の人間、たとへば自分の女房の氣持でさへ、私などにはまだ分かりはしないのです。けれども分からないながら、いや、分からないものを相手が持つてゐるからこそ、信ずるに値すると思つて附合つてゐるわけです。

つて、死んでしまへばみんな同じ。そして、自然はさういふ時を待つてゐるんぢやないかと思ふ。

その死とは自然に随ふといふことで、別に大したことぢやない。死を考へて怖くなるなんて、私にはわかんない。そりや、いざとなれば泣き言もいふだらうし、七轉八倒することもあるだらうが、生きものである以上それは當然でせう。

さういふ時に感じる死は、本當の私を感じてゐるのではなく、病氣の私を感じてゐるだけのこと。健全な私には死は何ともないんです。

(昭和六十三年・朝日新聞社刊『餘白を語る』)

福田さんは、「病氣の私」は決して本當の自分ではなく、「健全な私」といふものが「生と死」を超えて存在するのだ、と言ひます。幕末の佐藤一齋ではありませんが、大いなる海から腕で一掬ひされた水がこの世の「生」だとすれば、「死」とは、その水が再び大いなる海に歸ることかも知れません。

その「大いなるもの」が信じられてゐれば、「絶對」があるとか無いとか、それが「何だ」とか言ふことは、所詮「生きてゐるうちだけの話」に過ぎず、どうでもよいのかも知れません。

一番いけないのは、自分の小さな理解力で理解できるやうに、相手なり、神なりを、その枠内に閉ぢ込めてしまふことです。考へてもごらんさない。簡単に分かつてしまひ、説明し、分析してしまへるものは、まづつまらないものに決つてゐるではありませんか。

(講演「人間の生き方・物の考へ方」)

この言葉通り、福田さんは最後まで自分の信じる「絶對」といふものを目の前に規定することはありませんでした。生前、よく冗談で、自分は「カトリックの無免許運轉」だとか言つてをられました。福田さんは終生、「キリスト教」には歸依しませんでしたし、「再臨信仰」などといふものに近づいた形跡もありません。

福田さんは「絶對」といふことについて、決してそれを規定することはありませんでしたが、自らの「死生觀」についてはこんな風に語つてをられます。

人間、いくら頑張つても、大自然の一部でせう。國家とか個人とか、あくせくいつてるけれど、それは生きてゐるうちだけの話。死ねばそれつきりです。個性なんていつたませんか。そんな議論があつても無くても、人間はやはり何ものか、「大いなるもの」のうちに歸つて行かざるを得ないのだと思ひます。

それでは、福田さんはどこへ歸つて行つたのか……。そんなことが私に分かる筈がありません。分かりませんが、最後に、福田さんが晩年にある人に宛てた手紙の一節をご紹介して、終りにしたいと思ひます。

福田さんはかう書いてゐます。

たゞ、私は私を知つてゐる者を通じて生きるだけ、その方が死ねば、その時に私も死ぬものと存じ、魂がさういふ具體的な住處を持つてゐる間だけは、不滅のものと考へてをります。その方が死ねば私も死ぬだけのこと、觀念してをります。それにて少しも不自由はありません。何かの形で、人の世の記憶に留まつてゐれば、私も生きてゐると申せませう。

(平成七年四月「荒魂之會」刊行『あらたま』所収・中尾昭人氏「先生の靈魂觀」より)

福田さんは、「魂」が人の心に「具體的な住處」を持ち、

「何かの形で、人の世の記憶に留まつてゐれば、私も生きてゐる」と言ひます。その「具體的な住處」、「何かの形」とは一體何でせうか？ 人の姿かたち、その人の精神の存在を、心に留めるもの——私は、それは、「國語」の傳統の力だと思ひます。

「國語」は、私たちにとつて、歴史そのものであり、精神的紐帶であり、感受性の母體であり、考へる力そのものであります。「人間」は「言葉」で出来てゐるのであつて、この「國語」の傳統といふものが無ければ、私たちは「人間」として、眞に生きることも死ぬことも出来ないのだと思ひます。

また、「神」とか「絶對」だとかについても、私たちはその「國語」の傳統の力によつて考へる以外に道はありません。この「國語」に育てられた感受性と思考力、そして宗教的情操がなければ、たとへば、私たちは『聖書』の中のたゞの一語も解し得ない筈です。宗教による救ひの道も、「國語」の傳統に據らねば始まらないのです。

かういふ事は、普段、私たちの意識になかなか上らないのですが、「福田恆存」における「絶對」とは何か、などと不毛な抽象論を重ねるよりも、福田さんが心から大切にしたい「國語」の本質を考へた方が、どれだけ有益か分かりません。

安心立命に達することが出来たのではないでせうか。私にはさう思はれてなりません。

もう時間となりました。福田さんについて、なんだか分つたやうな話を致しましたが、「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」と申します。私の小さな「穴」に福田さんを閉ぢ込めてしまつて、申し譯なかつた思ひます。ご静聽を有難うございました。

終

(かねこみつひこ 評論家)

(中尾昭人氏の「先生の靈魂觀」からの引用については、同氏より掲載のお許しを得てをります。厚く御禮申し上げます)

せん。

福田さんは、自らの「死生觀」について、

生とは形の變つた死であり、死とは形を變へた生である、しかし一度存在したものは、死んでも永遠に滅びない、未だにそれだけは固く信じてゐる。

(昭和五十七年「反核運動の欺瞞——私の死生觀」)

と書いてをられます。

内村鑑三は、人間の「肉體」は「土より出て土に歸る」と言ひ、「靈魂」は「神より出て神に還る」と言ひました。福田さんも、「肉體」としての自分は「自然」に歸るものと考へてをられたでせうが、「魂」は「國語」の傳統の力によつて、「人の世の記憶に留まつて」生き續ける——と、さう信じてをられたのではないでせうか。

福田さんは、最後の『全集』刊行を締め括るにあたり、「後はハムレットもどきに『The rest is silence』と氣取つておかうか」と書いて筆を擱きました。

自分の精神が、「國語」の傳統の力によつて生死を超えて生き續けると信じられれば、「The rest is silence」——もう何も言はぬ、もう何も言はなくてもいいといふ、おほらかな

水

ドイツ語冠詞を國語に譯す試み

桑原草子

＊はじめに＊

みなさま、こんにちは。只今御紹介にあづかりました桑原です。はじめに今日ここでかうしてお話をさせていただくことになりましたいきさつに簡単に觸れさせていただきます。昨年の暮に谷田貝さんから、講演依頼の御手紙と共に國語問題協議會の冊子「國語國字」を二冊送っていただきました。早速拜讀したのですが、冊子を開いて程なく私の感じましたことは、私がお話できることはどうもなささうだといふことでした。その思ひは讀みすすむにつれて強まりこそすれ消えることはありませんでした。二冊を最後まで拜讀して大變たくさんのお話を学ばせていただいたのですが、「國語國字」の問題についてなにかお話をするといいのは私は力不足で無理だと思ひました。そこで本來なら、すぐに御辭退申上げるべきところでしたし、大體私は無理と判斷したら、あつさりすぐに御返事する方だと思ひますが、實はそのときに限り、日一日御返事を延してしまひ

中國語、日本語がべらべらの方で、或は私などより漢字の知識も豊富にお持ちなのではないでせうか、日本語の普通の漢字を使へないといふやうな方ではなく、自由に使える方なんです。そして私の説明も分つてはくださるのですが、ところがどうもなかなか直していただけない。それで私は連日氣分が悪くて鬱鬱としてをりました。そんなところへ谷田貝さんから『國語國字』の冊子と御手紙を頂いたものですから、なにか不思議な巡りあはせを感じた譯です。

それから二三日して私はユーチューブで皆様もご存じかと思ひますが、チャンネル櫻といふところの番組を見てをりました。チャンネル櫻の若者向プログラム「さくらじ」といふ番組で、ご存じの方も多しと思ひますが村田春樹さんが出演して御話をされてゐました。それを私は臺所仕事をしながら途中から聞いたのですが、日韓間の氣の重くなるやうなお話があつた後で、番組の最後のところで村田さんが、最後は氣持の霽れる御話、日本が世界に誇れるもののお話をしませう、といふことで、日本が世界に誇れるもののひとつは、日本語は漢字と假名を混せて書くといふこと、二種類の文字を使つて書くといふことだと力を籠めて仰つたのです。

谷田貝さんからの御手紙といひ、それに續く村田さんの

ました。といふのは、ちやうどその頃「これはなにかの巡りあはせかなあ」と思へる様なことがあつて、それでなんとなくぐずぐずしたのです。今日お話をさせて頂くことも關係があるので、このあたりの事情を少し述べさせて頂きます。谷田貝さんから講演依頼の御手紙を頂いたちやうどその頃、私は或方から頼まれてその人の論文の原稿を讀むといふ作業をしてをりました。その方は私より大分年下の方で、文科系の論文ではあるが私の専門とは違ふ分野の論文であり、専門的なことについては分らなくてよいので、文章や脈絡などについて氣づいた事があれば指摘して欲しいといふことで、拜讀したのです。さうしましたら、どうも普通の感覺ではこれは漢字で書くのではないかな、ひらがなでは小學生の作文みたいな感じではないかなと思ふやうなところが、一カ所二カ所ではなく、何ヶ所もあるんです。そこでその方にお話したんです。例へば、私は歸るといふのを、いつでも漢字で書かなきゃいけないといふことはない。けれど、文脈によつては、「私はかえる」とあると一瞬、「え？あなたは蛙ですか、ケロケロ」と思つてしまひます、といふやうな冗談まじりの話に始まつて、ひとつひとつ「此は何故漢字の方がよいか、漢字でなければならぬか」といふことを私なりに説明したのです。實はその方は、モンゴル語、

＊またぞろ「漢字廢止論」＊

漢字が自由に使へるのに敢て假名表記にされる例の方とは、時には喧嘩腰にもなつたのですが、やり取りを重ねる内にだんだん事情が分つて來ました。私から見れば不自然に感じられる假名表記に固執してゐるのは實はその方自身が望んでのことではなく、その方が専門分野で指導を受けてゐる指導教授のお教へだといふのです。この先生が漢字廢止、假名表記それどころかローマ字表記推進の御考へで、まず手始めに訓讀み漢字は全て假名書の方針だといふのです。それで、せつかく私の許で漢字に直したところが、その先生の所でまた假名に直される、といふやうなことを繰返してゐた譯です。

事情が分つたとき、その方が「この本を讀んでみて下さい、先生の考へが分るから」と言つて先生の著書を一冊薦めて

くれました。それは大昔の本ではなく、つい去年、平成二十三年、東日本大震災より後に出了本です。私は読んでみました。外國語や言語學の知識をふんだんに使つて、假名表記更にはローマ字表記が漢字假名交り表記より優れてゐる所以があれこれ書いてある。漢字はことばではない、文字であるとも書いてある。私は著者の外國語と言語學に關する廣い知識に感心しながら、時に確にさうだなと思つたり、時にそれはをかしいと首を傾げたりしながらとにかく終りまで讀みました。いろんなことが書いてあるのですが、特にですね、この先生は外國人の學生を指導されることが多いさうで、その経験から、漢字がなければ、もつと多くの外國人がもつと容易に日本語を學べるのに、漢字が障壁となつて外國人は日本語をなかなか學べない、漢字を廢止しなければならぬと繰返し述べてをられる。

私はまあ、半信半疑で讀了したのですが、幾つか氣になる論點もありましたので、國語表記についてよく勉強して私なりに考へを纏めてみようと思ひまして、後ればせながら勉強してみました。日本語の表記法に關して行はれて來た議論を一通りおさひして見たのです。その結果私の得た認識は、結論から言ひますと、この問題は疾うに片が着いてゐるといふことでした。皆様方を前にして正に釋迦にとに由々しきことと感じてゐる次第です。

ところで、なにか考へてみます、と御依頼をお引受し、少し勉強してはみたものの、私の勉強した限りでは、國語表記の問題については理論的には殆ど解決済のやうですし、この問題に正面から取組んで私が何か付加へることは無ささうだと思ひました。それでは、何をお話させて頂いたらよいかといろいろ考へまして試行錯誤の末、いささか唐突にお感じになると思ひますが、今日はドイツ語の冠詞についてお話させて頂かうと思ひます。

ご承知のやうに、日本語には冠詞といふ品詞はありません。冠詞を持つてゐるドイツ語は、冠詞を持たない日本語とはかなり違ふ言葉の仕組を持つてゐるわけですが、ここで冠詞について考へてみることで、ドイツ語の仕組がいくらかでも明らかに出来ればよいと思ひます。冠詞を通してドイツ語の仕組が少し分つてきたら、次にそのドイツ語を文字で書き表したらどう見えるかを確かめてみたいと思ひます。そして最後に、普段ドイツ語の文字表記に親しんでゐるドイツ人が、假に日本語を學ぶことになつた場合、漢字を廢止して假名表記或いはローマ字表記にした日本語は、漢字假名交り表記の日本語より果して學びやすくなるのであらうか、といふ問ひについて考へてみようと思ひます。

説法といふことになりましたが、我が國語の合理的な表記法は歴史的假名遣による漢字假名交り表記であるといふことは、理論的にはすでに十分明らかにされてゐる。それにも拘らず、またぞろ漢字廢止論が言はれてゐる譯です。先にも言ひましたように、この本は大昔の本ではない、つい昨年出た本なのですから。

理論的には決着が着いてゐるにもかかわらず、それでもまた漢字廢止論が出て來てゐるといふのは、どういふことか。これはもう政治的な理由によるものといふことでせう。昨今のいはゆる國際化、グローバル化推進の政治的動きを背景にしてゐるのだらうと思ひます。例へばTPPですね。もしTPPが決つたら、漢字は眞つ先に非關稅障壁として訴へられるだらうと言はれてゐますし、私もさう思ひます。

例へばまた、皆様の御記憶にも新しいと思ひますが、インドネシアから來た看護師研修生の件があります。この人達がせつかく研修を終へても、むづかしい漢字のせいで國家試験をパスできない。これは困つたことだ、なんとかしなければならぬと、ここでも漢字が槍玉に擧げられてをります。大學でもグローバル、地域社會でもどうかするとグローバル、グローバルと連呼されてゐる政治的動きと結びついてまたぞろ漢字廢止論が出て來たと言ふことで、まこ

かういふ順番で、なんとか最初の國語國字のテーマに繋ぎたいといふ心積りでです。

といふわけで、これから暫し「ミニドイツ語講座」の趣を呈すかと思ひますが、皆様宜しくお付合くださいませ。

●ドイツ語定冠詞概論

ご存じのやうに冠詞にはまづ定冠詞と不定冠詞があります。實は、名詞になにも付けない無冠詞といふのも冠詞の用法と言ふと變ですが、冠詞の用法を論ずる際の大事な一領域なのです。が、本日は時間の關係で残念ながら無冠詞論にまでは及びません。

まづ定冠詞ですが、ドイツ語の定冠詞は der で、これが英語の the にあたります。尤も der は、 das とか die とか des とか dem とか den とか、いろいろに形を變へるのですけれど、いづれにしても n に始まる三文字、一音節の言葉です。いろいろな變化形のある言葉は、代表となる形、それを舉形といふのですが、舉形を決めておかなければなりません。定冠詞は、 der を以て舉形とする。ドイツ語の定冠詞は何かと問はれたら、 der であると應へればよろしいのです。

「どれ」を定める定冠詞

さて定冠詞の働きは何かといふ事を一言で言ひますと、「どれ」といふ事を定めるといふ事です。この「定める」と言ふのが定冠詞の定の意味です。私がいま皆様の前でお話をしてゐる演壇のこの机と言へば、それはどの机か定まりますから定冠詞を被せて *der Tisch (the desk)* です。この部屋の中の机のひとつにあなたの似顔繪書いとききましたから後で探してみて下さいと言はれたら、どの机か分らないので私はこの部屋の中の机を端から見て行かなくてはならない、此場合はどれだか定まらない或る机といふことで、*ein Tisch (a desk)* と不定冠詞を被せる事になるわけですね。簡単に整理しますと、「どの○○か」を一致確認 (*identifizieren, identity*) できると想定される場合には定冠詞を付けるといふ事です。例へば名詞の前や後に言葉ではつきり述べてあるとか、或はどこにも言葉では述べてないが何か別の情報から分るとか、とにかくそれを聞いてゐる人が「どの○○か」といふ事が分る、一致確認できるといふ場合ですね。言換へれば、明示的にしろ、非明示的にしろ、どこかに「どの、どれ」を定める規定、これを具體化規定と呼んでゐますが、どこかに具體化規定がある場合には名詞に定冠詞を付けるのです。

それではこれから具體化規定の様々な例を見てみませう。

す直接的な規定がある場合もあります。例へばショーウィンドウの中を指して

「私は其處の(その)ケーキが欲しい」

Ich möchte den Kuchen da.

(*I want the cake there.*)

と言へば、「其處の *da*」といふ副詞が名詞の後にくつついて「どれ」といふことを表してゐる。具體化規定が名詞の後に明示されてゐる例です。名詞の後から、それを規定する修飾語が掛つてゐるなどといふ言ひ方もします。

ところで、副詞といふものは元來動詞に掛かるものから、直接名詞に掛かるといふのは、をかした話ですね。

この *da* や *there* のやうに名詞の後にピタッと付いて名詞を規定する副詞のことを後置副詞と呼びますが、これは本來は文章が縮まつたものださうです。つまり、この *da* や *there* は「其處にある(其處なる)」といふ文章が縮まつたものなのです。縮めないで本來の文章で表せば、それは關係文といふものになります。

私の言ひたいことはもうお分りでせう。名詞の後に付いてゐる具體化規定は關係文であることもよくあるといふことです。例へば

「きのう私が買ったケーキはおいしかった」

ドイツ語冠詞を國語に譯す試み

ちなみに、ドイツ語に並べて英語を示しておきましたが、これはドイツ文の理解の補助になればと思ひ、逐語譯も敢て避けずに示しましたので、必ずしもこのまま實用に供せるものではないといふことで御参考までにご覽下さい。

△既出概念と一致確認する場合▽

例へば

「きのう私は一箇のケーキを買つた。そのケーキはおいしかった」

Gestern habe ich einen Kuchen gekauft. Der Kuchen

war gut.

(Yesterday I have bought a cake. The cake was good.)

と言へば、そのケーキとは、その前に述べてある「私がきのう買ったケーキ」だと分ります。そのケーキ *der Kuchen* の *der* は「私がきのう買ったケーキ」という既出概念と一致確認する定冠詞といふことになります。これは、名詞の前の方の文に明示的な具體化規定があるといふ例です。

△同じ文中にある直接的規定▽

名詞があるのと同じ文章の中に「どれ」といふことを表

Der Kuchen, den ich gestern gekauft habe, war gut.

(The cake which I bought yesterday was good.)

と言へば、どのケーキかを具體的に示してゐるのが「昨日私が買った」といふ後續の關係文です。日本語には關係代名詞といふものがありませんので、具體化規定にあたる文章をそっくり名詞の頭にのせるのですが、ドイツ語は事情が違ひます。先行詞 *Der Kuchen* に被せてある定冠詞 *Der* が、此のケーキには「どれ」といふことの分る情報がありますよ、といふことをまづ示し、後に續く關係文が「どれ」といふことをじつくり具體的に教へてくれるといふ順序です。

△同じ文中にある間接的規定▽

「これこれの語句が或は此の文章が後から掛つて規定してゐる」といふやうなことは言へない、さういふ形式的なこととはなかなか言ひにくいが文章を読めば明らかに「どれ」といふことが分る、明らかに具體化規定が存在するといふ場合もあります。文中に間接的に規定されてゐる場合です。例へば、

「彼は私に手を差出す」

Er gibt mir die Hand.

(He gives me the hand.)

と言へば、「どの手」かを具體的に規定している語句をコレと指す事はむづかしいが、文章を読めば、彼は誰か別人の手を引つ張つて突出したのではない、自分の手を差出したのだと分る。文中に間接的に「どの手」かが規定されてゐるわけです。従つて、定冠詞をつけて *die Hand* (the hand) とします。もちろん所有冠詞をつけて *seine Hand* (his hand) として悪いわけではないが、感じが大いに異なる。此の場合、所有冠詞より定冠詞の方が軽いさりげない感じになるやうです。

△文脈の中にある間接的規定▽

いま見たやうな間接的規定が、名詞と同じ文中にはなく、文脈のなかにあるといふのが、次の例です。

「小さな女の子が通りで泣いてゐる。私は問ふ『母さんはどこへ行つたの?』」

Ein kleines Mädchen weint auf der Straße. Ich frage:

"Wo ist die Mutter?"

(A little girl cries on the street. I ask, "Where is the mother?")

「どのお母さん」かを直接的に表してゐる語句をコレと指すことはむづかしいが、前後を読めば「この女の子のお母さ

ん」だと分ります。文脈の中に間接的に具體化規定があつて「どれ」といふことが分りますので、わざわざ所有冠詞を用ゐて「君の母さん」*deine Mutter* (your mother) とするまでもなく、定冠詞をつければよいわけです。

△状況の中にある間接的規定▽

次は、文中とか文脈の中にある直接的或は間接的規定ではなく、状況の中にある間接的規定の例です。これまでのやうな言葉によつて綴られたテキストではなく、まあテレビドラマの一場面のやうなものを想像して下さい。例へば道に迷つた一臺の車。峻しい山道を走つてゐる。運轉してゐる男と助手席の女。二人とも黙りこくつて前を見つめてゐる。さういふ場面を想像して下さい。そこへ女が不安さうに口を開く。

「この道はどこに通じてゐるのかしら?」

Wohin führt der Weg?

(Where does the way lead to?)

この場合、言葉としてあるのは女の科白だけで、この科白の中に「どの道」かを示す規定はない。けれども現に今、石ころだらけの悪路を、不安を抱きながら走つてゐるのですから、そこへ女が「この道 *der Weg* (the way)」と口にす

詰めて、それをあたふた肩に背負ひながら飛出して來られたのですから、「かばん *die Tasche* が開いてる」と言はれれば、どのかばんのことかはピンとくる。一致確認できる。

かういふ状況ですから、私は迷はず定冠詞を付けて言ひました。先生は「おお、ダンケ! ダンケ!」と言つてバッグを閉じて一目散に歸つて行かれました。

以上、少々回りくどいかと思ひましたが、「どれ」といふことを定める具體化規定の例を一通り見ておきました。大體石のどれかにあたるやうな具體化規定があれば、名詞には定冠詞を付すと考へれば良いわけです。

定冠詞には指示性はない

これまでの例文でお分りのやうに、「どれ」を定める定冠詞は、日本語で「この○○」「その○○」「あの○○」と譯せることも多いです。特に、例へば「昨日私はケーキを買つた。そのケーキは・・・」といふやうに、名詞の前の方に具體化規定があるときがさうですね。序ながら、「去年のお誕生日に大きなケーキを頂いた」なら、「あのケーキは忘れられない」となる。定冠詞の譯は「その・・・」だと一つ覺えてゐる方がよくあるのですが、譯は對象の遠近に應じて「この・・・」でも「その・・・」でも「あの・・・」でもどれで

れば、それはいま車が走つてゐるこの道、二人が黙つてフロントガラスの前に見つめてゐるその道に決つてゐる。つまり、状況の中に「どれ」といふことを決める間接的規定が有るといふわけです。従つて、定冠詞をつけます。「この」といふ日本語譯から、ややもすると定冠詞ではなくむしろ指示冠詞「この *dieser* (this)」を思ひ浮べる方が多いのではないかと思ひますが、ここではわざわざ「この *dieser* (this)」と指示しなくても、定冠詞をつけて「この道」を「目の前の道」と一致確認できればそれでいいのです。

もうひとつ、状況の中に間接的規定があるといふ例を舉げておきます。實はこれは、もう二十年以上も前になるでせうか、私がドイツで實際に経験した例です。

あるドイツ人の先生の講演を聴いての歸り道、講演を終へられた教授先生が私の前をとて急いで歸つて行かれた。見ると肩に掛けた大きなショルダーバッグの口がぱつくり開いてゐる。そこで大聲で教へてあげました。

「先生、かばんが開いてますよ!」

Herr Professor! Die Tasche ist offen!

(Professor! The bag is open!)

ここでも、どのバッグかを具體的に明示する言葉などはないが、教授先生はいましも講演に使つた資料類を急いで

もいい。ただ、ちよつと注意しておかなければならないのは、ドイツ語の定冠詞には「この○○」「その○○」「あの○○」といふ強い指示性はないといふことです。明確な指示性のあるのは *dieser (this), jener (that)* などの指示冠詞です。定冠詞 *der* は「その・・・」と指すのではなく、むしろ或る特定のものを受けて、それと一致確認、同定する機能を有すと言つたら良いでせうか。 *dieser* や *jener* は二音節で、それぞれ第一音節にアクセントもあり、それなりに存在感のある言葉ですが、定冠詞 *der* は一音節の短い言葉で、しかも名詞に軽く被せるだけ、アクセントは次の名詞の大體第一音節に來ます。謂はば軽い帽子ですから、「その・・・」と強く指示する力はなく、「どこかに具體化規定がありますよ」とさり氣なく示すだけです。もつとも定冠詞も元を辿れば指示性を持つてゐたと思はれてゐます。現在でも「それ」の意の指示代名詞、および「その・・・」といふ指示冠詞としての用法があり、その場合はデアと強く長く發音し、定冠詞と區別して書く時は *der* と隔字體で書きます。以上に、「どれ」といふことを定める定冠詞といふことで御説明しましたが、これがまず一番分り易い定冠詞の用法だらうと思ひます。

(The dog is an animal.)

まさか「その犬は動物だ」とは言はないでせう。「それじゃあの犬は植物か」なんてことになつちやいますから。もつとも、言葉に關しては「さういふことは絶対言はない」とは決して言つてはいけな、と私はドイツ語の先生から厳しく戒められました。確かに例へば、SF小説かなにかの非現實世界の中なら「その犬は動物だ」「あの犬は植物だ」といつた状況もあり得る。だから絶対言はないとは申しませんが、まあ私たちの日常生活の中ではまづ言はない。従つてここでの定冠詞は「一致確認」ではなく「通念」の定冠詞と了解されて「犬(といふもの)」は動物だ」の意となります。

* 形式的定冠詞 *

ところで實際に定冠詞にあたつて、これは一致確認の定冠詞かな、通念の定冠詞かなと一生懸命考へても分らないといふのが實はたくさんあるのです。本來は、一致確認か通念かなんらかの働きに繋がつてゐたのでせうが、それが失はれたものらしく、今日の語感では「一致確認」「通念」いづれの意味も感じられない定冠詞です。かういふ定冠詞を形式的定冠詞と呼んでをります。

* 「通念」を受ける定冠詞 *

定冠詞には、具體的な「どれか」と一致確認するのではなく、そもそもその名詞が表してゐる内容、「念」「通念」を確認するといふ働きもあります。大ざつぱに、「どれ」といふのは具體的個物との一致確認、「そもそも」といふのは本質の確認と考へてもよいかと思ひます。冠詞の説明をするときは、「どれ」と一致確認するのを「一致確認の定冠詞」、「そもそも・・・」にあたるのを「通念の定冠詞」と簡単に呼んで區別してゐます。

例へばあるお宅を訪問して玄関の犬にひどく吠えられて「この犬はよく吠えるなあ」

Der Hund bellt.

(The dog barks.)

と言つたなら、Der Hund の *der* は一致確認の定冠詞です。ね。

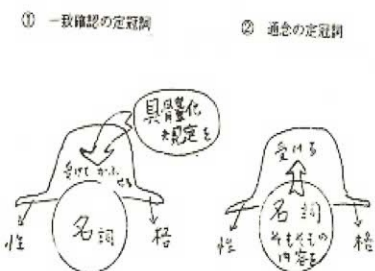
見た目は全く同じ文章 (Der Hund bellt. The dog barks.) でも、

「犬(といふもの)」は吠えるとしたもんだ」

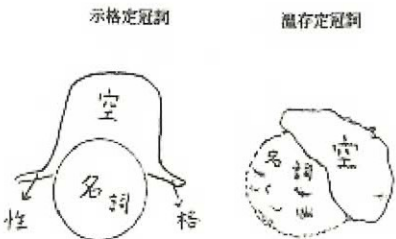
といふ意味で言つたなら「通念」の定冠詞です。では次の文はどうでせう。

Der Hund ist ein Tier.

形式的定冠詞の説明に入る前に、ここでちよつと圖をご覧下さい。拙い繪ですが、名詞と冠詞の關係を丸い顔とそれに被せた帽子で表してみました。一致確認の定冠詞は、どこかにある具體化規定を受取つてそつと名詞に被せてをります。通念の定冠詞は、そもそも名詞の中にある「念」を吸上げて改めて名詞に被せてをります。形式的定冠詞は「一致確認」「通念」いづれの働きもないので、帽子の中は空つぽです。次に帽子の鏢に御注目下さい。この鏢が大事なのです。日本語では、名詞の格は「が、の、に、を」といつた格助詞を名詞の後に付けて表しますが、ドイツ語では、



③ 形式的定冠詞



冠詞を格變化させて表します。所謂、膠着語と屈折語の違いです。デアスデムデン *der, des, dem, den* という格變化を御記憶の方も多いでせう。

この圖で言ひますと、帽子の鰐の部分が格變化の部分です。帽子の被り方によつて、鰐の角度を例へば右上り、左上り、前上り、後上りといふ風に變へることで、「が、の、に」を表すといふわけです。では、これから、中が空つぽの帽子すなはち形式的定冠詞のお話に移ります。

・單に格を表す機能のみ持つ示格定冠詞

きませうといふ帽子、習慣上被つてゐる帽子です。これを溫存定冠詞と呼んでをりますが、形式的定冠詞のなかでは最も多いもので、特に成句となつた前置詞句に多く見られます。

in der Tat, (in the fact, en effect) (佛)

「まことに(事實において)」

これはひとかたまりの成句で、意味するところは殆ど副詞 *tatsächlich* 一語と變りません。といふことは名詞 *Tat* はその輪廓がぼやけて名詞性を失ひつつあるといふことです。従つて、冠詞も危くなりつつある。この帽子は、ぐにやぐにやに溶けかけた顔にからうじて載つてあるといふ風情で、いつ摺り落ちてもおかしくないわけです。

Ich stehe mit ihm im/in dem Briefwechsel.

「私は彼と文通してゐる。(彼と文通状態の中にある。)」

in dem が一體となつたのが *im* といふ形ですが、溫存定冠詞 *dem* が *n* だけになつて、いよいよ影が薄くなりましたね。完全に帽子が摺り落ちてしまへば *in Briefwechsel* となりますが、最早それでもかまひません。實際、現在 *im/in dem* *Briefwechsel* も *in Briefwechsel* もどちらも用ゐられてゐるやうです。以上、ドイツ語定冠詞概論でした。時間

「しばしばストライキがあつたが、生産の混亂は生じなかつた」

Man streikte mehrmals; eine Störung der Produktion trat aber nicht ein.

右の例文中の

eine Störung der Produktion (an interruption of the product) は

Produktionsstörung (products interruption)

と言替へることができます。つまり、*der Produktion* の *der* は、「の」といふ格を表す一字 *s* に置き換へることができる。といふことは、この定冠詞は、「一致確認」「通念」いづれの働きもなく、單に格を示してゐるのみだといふことです。このような形式的定冠詞を特に示格定冠詞と呼びます。中は空つぽだが鰐はちゃんとある帽子がそれにあたります。

・多いのは溫存定冠詞

中が空つぽで鰐も取れてしまつた帽子もあります。ベレー帽ですね。「一致確認」「通念」いづれの働きもなく、格も示さない定冠詞です。何の働きもしないのですから、無くてよいやうなものです。まあこれまでずつと被つてゐたことでもあるし、急に無くすと寒いので、被つてお

もありませんので、不定冠詞はさつと簡單に見ておくことにいたしませう。

●ドイツ語不定冠詞概論

* 「どの○○、どれ」を定めない不定冠詞*

不定冠詞とは読んで字の如く「どれ」を定めない冠詞です。特定のどれかではなく、多くある中の「ひとつの○○/或る○○」を表す冠詞で、舉形は *ein*、英語の *an, a* にあたります。今日の冠詞のお話の最初の處で申上げた「この部屋の或る机に似顔繪を描いた」といふ時の *ein Tisch* 「或る机」がさうですね。

* 不定冠詞の「質の含み」*

ところで例へば *Ich habe eine Frau kennengelernt* 「私は或る御婦人と知り合つた」と言はれれば、「いつ、Was für eine Frau? 「どんな人?」と訊きたくなります。また例へば兩手を後に隠して *Ich habe ein Geschenk für Dich. (I have a present for you.)* 「君に或るプレゼントを用意したんだ」と言はれれば「えつ、なに、なに?」と訊かずにゐられないでせう。「どれ」といふことを言はないで、「或る・・」とだけ言ふ不定冠詞は、當然「どんな? (Was

für ein~)」といふ問ひを喚起するのです。「どんな~? (was für ein~)」を思はせる不定冠詞の作用を不定冠詞の「質の含み」などと稱してをります。「一言で平たく言へば、不定冠詞は思はせ振りな冠詞といふことです。」

「或る・・・」と言へば「どんな・・・」といふ問ひが喚起されますので、不定冠詞は「どんな○○」といふ形容を伴ふことが自然の勢ひになります。「Eine elegante Frau! 上品な人!」とか「Ein wunderbares Geschenk! 素敵な贈りもの!」とか、「Eine gute Idee! A good ideal!」そりゃ、いい考へだ!」とか幾らでも考へつきますね。

この「どんな・・・」といふ規定を特殊化規定と呼んで、定冠詞の「どれ」を定める具體化規定と區別するのですが、少々固い言ひ方をすれば、不定冠詞「或る」はその本性からして特殊化規定を要求するといふことになります。

「質の含み」を活かす

さて、これからが不定冠詞の本領發揮と言へるかもしれませんが。先程、不定冠詞「或る」は特殊化規定を要求すると言ひましたが、實は特殊化規定(形容)を明示的には行はないことで、かへつて自らの有する質の含みを最大限活かすことも出来るのです。つまり、何も言はないことで最

大限、思はせ振りを利かせるわけです。

「だつて男の子でせう!」

Du bist doch ein Mann!

You are a man!

これは、この前學生と一緒に「のぼら」といふウイーン少年合唱團主演の昔のヴァイデオ映畫を見てをりましたら、そのなかに出て來ました。主人公のトニーといふ少年が合唱團に入團することになつて、全寮性なので養父と別れねばならない、それで心が搖れて泣いてゐた。そこへシスターのマリアがやつてきて慰めます「泣いたりしたら駄目でしょ、だつて男の子でせう」と。このein一語には、ここで男らしさといふものについて考へ得るあらゆる形容が含まれてゐるわけで、下手に二つ、三つの形容詞を並べるより遙に表現力を發揮するといふことになります。

「お父さん、あれはほんとに酷い一日だつたね!」

Vati, das war ein Tag!

(Papa, that was a day!)

これはもう二十年も前のことですが、私が訪問した或るドイツの家庭で耳にした言葉です。その家の主人が、昔、まだ小さかつた四人の子供たちを連れて遠足に出かけたお話をなされた。朝、暗い内から張り切つて出發したのに、

雨は降るは、風は吹くは、お腹は空くは、たうとう道に迷つて・・・やつと家にたどり着いたのは夜中であつたといふ遠い日の思ひ出話。それを聞いてゐた今は今もう成人した末つ子の娘さんが感極まつたやうにお父さんに應へた言葉です。

ein一語に、遠い昔の忘れられない一日を形容する娘さんの萬感が籠められてゐるのが感じられます。

「そのとき彼女は實に何とも言へない妙ききりんな顔をした!」

Sie machte dabei ein Gesicht!

(She made a face!)

例文には、一應英語譯を並記してをりますが、英語の不定冠詞にどの程度「質のふくみ」を持たせられるものかは、正直の所私には分りません。英語の不定冠詞は、母音の前ではanですが、それ以外はaがとれてaといふ短かい弱音ですので、これにたつぷり「質のふくみ」を持たせて發音することは極めてむづかしいのではないかと思ひますがどうでせうか。

ともあれ、ドイツ語の不定冠詞einは、複母音+oです。で、少なくとも英語と比べればそれなりに存在感があります。しかもoとかyとか、語尾が付けば二音節になりますので存在感十分です。従つて工夫次第で、思はせ振りに

たつぷり「質の含み」を持たせて發音することが出来るといふことです。右の例文ですと、例へば實際、顰めつ面でもして見せながらein Gesichtのeinをアーインとすこし勿體ぶつて發音すればいいと思ひます。

「彼も人の(父)親だ!」

Er ist ein Vater!

(He is a father!)

このeinには、父親らしさといふことで考へ得る性質のどんなものでも含ませることができるわけですので、右の譯に限らず、發言の状況に應じていろいろな譯ができるでせう。

「あいつはなかなかの詩人だよ!」

Er ist ein Poet!

(He is a poet!)

例へば隣の小父さん、腕のいい職人さんで、黙々と仕事一筋と見受けてゐたが、いやあ俳句でも詠ませたら一廉の者だよ、といったやうな場合ですね。

以上、大急ぎで不定冠詞概論でした。最後にまとめ兼ねて定冠詞と不定冠詞の分りやすい對比の例をお示しします。

●まづ、紹介導入の不定冠詞（未知のものにつける）と既出のものを受ける定冠詞（既知のものにつける）の對比です。「むかしむかし、或るところに爺さまと婆さまがありました。」

Es war einmal ein alter Mann und eine alte Frau.

(It was once an old man and an old woman.)

「爺さまは山へ（柴刈に）、婆さまは川へ（洗濯に）行きました。」

Der Mann ging zum Hügel und die Frau zum Bach.

(The man went to the hill and the woman to the stream.)

これは皆様よくご存じと思ひます。物語を始めるときの定式ですね。聞き手の前に初めてでてくる「爺さま、婆さま」は、「或る一人の爺と或る一人の婆」として、不定冠詞をつけて登場する。未知のものを紹介導入する不定冠詞です。一度紹介したら既に既知ですから、次からは「その・」と定冠詞をつけるわけです。因みに今日の英語では「There was once-----」/「There were once-----」ですが、中世英語ではドイツ語同様 It was once-----と言つたやうです。

●次に、一致確認する定冠詞と質を示唆する不定冠詞を對

詞はどうしませうか。

假に定冠詞をつけて

Ich bin der Japaner.

(I am the Japanese.)

と言つた場合、相手はどう受取るでせうか。

「一致確認」の定冠詞として受取れば「私が例のあの日本人です」という意味になりますので、「ええとどちらの日本人で・ええと、どこかでお目にかかりましたか？」と聞き返すといふ展開になるでせう。思ひ當ることもないし、これはどうも噛合はないと感ぜると、次は「通念」の定冠詞として理解するしかありません。すると「私がそもそも日本人」「世間が日本人とはかういふ者と考へてゐるその日本人」といふことになります。状況に應じて譯は様々可能です。「私が日本人です」「私がそもそも日本人といふものです」「我こそは日本男兒なり」など。

例へば明治の頃、まだドイツに日本人の姿の珍しかった頃、ドイツにいらつしやつた日本人が Ich bin der Japaner. と自己紹介されたとすれば、ドイツ人は當時彼らが通念として持つてゐた日本人像を重ねて理解したでせうから、まだ侍姿の大和魂の日本男兒を想起したかもしれない。「やあやあ我こそは日本男兒のかくあるべしと思はれたるな

比してみます。

「あいつが父親だ。（父親の特定）」

Er ist der Vater.

(He is the father.)

ちよつと品が悪いですが、例へば父親の分らないお子さんがゐて、その父親を探索してあるといふ場合なら、見つかつた男性を子供の父親と一致確認 (identity) して定冠詞をつけることになりますね。

「あいつは父親だ。（父親らしさの形容）」

Er ist ein Vater.

(He is a father.)

先にも出てきた例文です。状況に應じて例へば「あいつにも子供の苦勞や生活の苦勞があるんだよ」などと譯せま

●付録として『三二實用編』を付けておきます。自己紹介の場面で、國籍を尋ねられたときの言ひ方です。

「お國はどちらですか？」

Woher kommen Sie?

(Where are you from?)

と尋ねられて、「私は日本人です」と言ひたいのですが、冠

り・・・」といふ勇ましい自己紹介をお聞きになつたかもしれません。

では不定冠詞をつけて

Ich bin ein Japaner.

(I suis un Japonais. [佛])

と言つたらどうでせうか。

今度は、不定冠詞の質の含みが利いて、「日本人らしさ」が焦點になります。「かう見えても」私も日本男兒ですよ」とか「私も一人前の日本人です」といふ感じですが、日本人らしさが問題なのですから、日本人でなくてもよいのです。たとへば武道も茶道も嗜み日本にほれ込んだドイツ人男性が言へば「私はもう立派な日本人です」となりますね。因みに、私が女性形を使つて Ich bin eine Japanerin. と言へば「かう見えても」私も大和撫子です」といふわけです。

さういふ次第ですから、端的に國籍だけを言ひたいときは無冠詞とします。

「私は日本人です。」

Ich bin Japaner.

(I suis Japonais. [佛])

なぜ、無冠詞かといふことは、本日は無冠詞論は割愛さ

せて頂きましたので、ここでは御説明しませんが、今日持参させて頂いたゲーテ「ファウスト」についての拙論抜刷の一つが大體、無冠詞論となつてをりますので、宜しかつたらお持ち下さいませ。

ドイツ語表記と日本語表記

さて、では最後に、本日のお話の冒頭の主題に戻ります。私が薦められて讀んだ本に、漢字がなければもつと多くの外國人がもつと容易く日本語を學べる、と主張されてゐたわけですが、果してさうだらうか、例へばドイツ人が日本語を學ぶ際、漢字を無くした方が、漢字がある場合より學び易くなるだらうかといふことを考へてみたいと思ひます。今日の冠詞論のおさらいですが、ドイツ語は名詞の頭に、 D で始まる三文字の冠詞、謂はば帽子を軽く被せて「どこかに具體化規定がありますよ」と示し、實際の具體化規定は別の所に示します。日本語には冠詞がありませんので、名詞を修飾する語句や文章は全部名詞の頭に載つけます。「きのふ私がお友達と銀座で見た古い映画・・」といった具合です。この事情を踏へて、特に名詞を中心としてドイツ語の文字表記と日本語の文字表記を比較してみませう。

目で見るドイツ語

私は學生にもよく言ふのです、名詞は大文字で書いてあるからすぐ分る、その前に a とか an とかがあったら、これは名詞に付加した形容の言葉或いは被せた帽子です。それで、名詞の塊、即ち名詞句はほぼ見て取れるでせう、と。

次にドイツ文を二例表記してみますので、名詞とそれに掛かる語句の大ざつばな特徴を目で確認してみして下さい。

「この大きな家には、私の裕福な友人の両親が住んでゐる。」

A: In diesem großen Haus wohnen die Eltern meines reichen Freundes.

(In this big house live the parents of my rich friend.)
「その老いた男は、彼の息子が贈つた此の白い御屋敷に住んでゐる。」

B: Der alte Mann wohnt in dieser weißen Villa, die sein Sohn ihm geschenkt hat.
(The old man live in this white villa which his son has presented him.)

國語表記の例

それでは次に、右のA文とB文を日本語でそれぞれ三種

ドイツ語表記に於て、まず特徴的なのは近代以降ドイツ語名詞は頭文字を大書するといふことです。これは大變便利なこと、目で見ればすぐに名詞と分ります。ここに一音節、二音節、三音節の名詞をそれぞれ思ひつくまゝに擧げてみます。

〔一音節〕Tag (day), Weg (way), Fuß (foot), Jahr (year), Buch (book), Tisch (机) ˆ Zahn (齒) ˆ Nacht (night), Berg (山) Hand (hand), Mund (mouth), Fahrt (乗物の旅) ˆ Fluss (川) ˆ Pflicht (義務) ˆ Herbst (秋)

〔二音節〕Garten (garden), Bruder (brother),

〔三音節〕Aufgabe (課題) ˆ Erfahrung (経験)

名詞の前に冠置あるいは付加され得るのは冠詞類、形容詞ないし形用詞句、分詞ないし分詞句ですが、それらは次の様な綴で終ります。冠詞類は unser Δ , euer Δ , ihr Δ , ein Δ .

---(ie, --er, --estas), --em, --en, で終り、付加語形容詞および分詞は --e, --er, --es, --em, --en で終ります。 Δ は、語幹のみで變化語尾がないといふ印です。語尾のないものもありはするが、それを除けば大體、 a か an にもう一字付いたのが、名詞にかかる言葉の最後の綴だと思へばいい。

類の表記法で示してみます。尤も私は日本語が母國語であるといふだけで、國語文法を専門的に研究したことはなく、今回必要に迫られてにはか勉強をしたものの、もしかしたら間違つてゐるところがあるかもしれませんので、その點はお許しをお願いします。

(一) 最初は、ごく普通の漢字假名交り表記です。

A①この大きな家には、私の裕福な友人の両親が住んでゐる。

(二) 次は、助詞と助動詞だけはくつつけて、他は品詞別の分かち書きです。

A②この おおきな いえには わたしの ゆうふくな ゆうじんの りようしんが すんで いる。

(三) 三番目は、品詞別の分かち書きです。尤も、そもそも膠着語である日本語を分かち書きになると、なかなか難儀で、例へば現代かなづかひの促音などどこで分つべきか悩みましたが、とりあへず暫定的に分けてみました。

A③この (この) おおきな いえ には わたしの ゆうふくな ゆうじんの りようしんが すんで いる。

B ①その老いた男は、彼の息子が贈つた此の白い御屋敷に住んでゐる。

B ②その おいた おとこは かれの むすこが おくつた この しろい おやしきに すんで いる。

B ③その (その) おいた おとこは かれの むすこが おくつ た この (この) しろい おやしき (お やしき) に すん で いる。

右の②と③が、假名表記ですが、名詞にかかる語句の最後の字に傍線を付しておきました。文法的には、名詞に掛かる語句の最後の字とは、動詞、形容詞、形容動詞、助動詞の連體形の終りの字です。文法の本を開いて算へてみましたら「う、く、ぐ、す、つ、ぬ、ぶ、む、る、い、な、ん、た(だ)」の十三種類ありました。それに、その、あの、等の格助詞「の」が加はりますので、十四種類になります。数だけ観ても、ドイツ語の名詞に掛かる言葉の最後の綴の種類が多い。これらの假名一字は實際 A ② A ③ B ② B ③ の表記に於て、名詞に掛かる言葉だと視覚的に訴へる力があるでせうか。そんな力は殆ど感じられない。少なくとも、ドイツ語の名詞付加語の最終綴が視覚に訴へる力には及ばないと思ひますが如何でせう。

どこで分けても言葉の最後の字は *o* 以外は全て *a, i, u, e, o* です。どこもかしこも *a, i, u, e, o* なのですから、名詞に掛かる語の最終字の *a, i, u, o* にだけ、特別に視覚に訴へる力を要求するのは無理な話といふものです。

大書されたドイツ語名詞と漢字

ドイツ語の表記の説明の冒頭で、大書されたドイツ語名詞を幾つか挙げておきましたが、ここでもう一度ご覧下さい。

一音節の名詞の例の最後に *Herbst* (*herbst*) といふのがあります。私は *Herbst* といふ子音の連續をなかなかうまく發音できなくて何度も直されたので忘れられない單語です。

日本人ですから、どうしても *rubus* という風に間に母音が入つてしまふ。ドイツ人は、*Herbst* にしつかりアクセントを置いて、後は力を抜いて *Herbst* と一氣に發音するんです。あらためてよく見れば、この語はローマ字六文字からなつてゐるが、一音節の單語です。つまり音節文字といふこと可言へば、この單語 *Herbst* は一文字なのです。Fahrt も Pflicht も音節文字としては一文字なのです。私は惟ふに、これらの單語はドイツ人の目には一字として、ひとかたまりで見えてゐるのではないだらうか。

(4) 次にローマ字表記です。

A ② Kono ookina ieniwa watashino yuufukuna yujjimo ryousinga sundeiru.

A ③ Kono ookina ie ni wa watashi no yuufukuna yujjin no ryousin ga sun de iru.

B ② Sono oita otokowa karen musukoga okuta kono siroi oyasikini sundeiru.

B ③ Sono oi ta otoko wa kare no musuko ga okut ta kono siroi oyasiki ni sun de iru.

先に見た連體形および格助詞の最後の字の十四種をローマ字書きにすると *u, ku, gu, su, tu, nu, bu, mu, ru, i, na, n, ta, no* です。最後の字は *u, i, a, o, n* の五種類で、母音でここに無いのは *e* のみです。右の文中で傍線を付してあるのが、名詞に掛かる言葉の最後の字です。さて先程と同じ問を發します。傍線を付したローマ字に果して、名詞に掛かる言葉だと視覚的に訴へる力があるでせうか。無いと言はざるを得ないです。ご承知のやうに、日本語の音韻の特性から、假名は「ん」を除いて全て音節文字です。ローマ字書きすれば「ん」以外の假名は全て *a, i, u, e, o* のどれかで終ります。従つて日本語をローマ字で分かち書きすれば、

二音節 Vater (父親) なら二文字、三音節 Aufgabe なら三文字といふことです。

ちなみに、これは鈴木孝夫といふ方の本で讀んだ受賣りなのですが、英語で最も複雑な綴の音節文字は *strengths* だそうです。英語に音節文字が幾つあるかは分らないのだからですが、ドイツ語の音節文字はドウデン第一巻正書法辭典の分綴法に従つて單語を全部綴に分解して重複分を除いて算へれば分るのではないでせうか。

話を元にもどしますが、*Herbst* の邦譯は「秋」です。これを假名表記すれば「あき」、ローマ字表記では *aki* といづれも音節文字二文字です。*Herbst* がドイツ人の目にひとかたまりに見えてゐるとすればその點では假名表記よりも、またローマ字表記よりもむしろ漢字に近いのではないでせうか。尤も「あき、aki」くらいなら、なんとか纏めて捉へることも出来るかもしれないが、これが例へば「おとうさん、ちちおや、otousan、titioya」など、音節文字四文字ともなるとなかなか纏まつては見えにくい。一字一字が一音節である假名による表記、子音と母音がほぼ交互に表れるローマ字表記では、日本語の單語は、單語としてひとかたまりで目に映るといふことはまず望めません。

他方、「父、父親」などの漢字表記なら、ひとかたまりで

目に飛込んでくる。すべての名詞を漢字表記する必要などないし、そんなことをしたら別の弊害が生じませうが、例へば漢語は原則として漢字表記とするなど、或程度、漢字を混せて書くことにすれば、助詞や活用語の活用部分を表す假名が、一面の假名の海の中に埋もれて見えなくなるというふことも無くなるでせう。ドイツ語では、一音節文字か二音節文字、長くてもせいぜい三音節文字程度の名詞が大書されてまとまつて目に飛込む。そして、屈折語の屈折部分も、それなりに視覚に訴へる綴を持つてゐる。これを要するに、表記されたドイツ語は、視覚に映る印象といふ點では、假名表記あるいはローマ字表記より、むしろ漢字假名交り表記の方に似てゐるといふことになりませんか。もう一度、先に挙げた表記の例を眺め、比べてお確かめ下さい。

私は、なにか私の知らない格別の工夫が他にあるならいざ知らず、例へば、子音と母音がほぼ交互に現はれるローマ字表記といふものは目がまはつてとても讀めたものぢやないと思ふのですが……。老眼のせゐばかりではないと思ふ。普段ドイツ語の表記に慣れてゐるドイツ人もやはり目がまはるんぢやないでせうか。そんな次第で、ドイツ人が日本語を學ぶ際、漢字がない方が漢字があるより、容易く學べ

正統國語教科書を作る

前田嘉則

歴史や公民など社會科教科書の改善策は、これまでも保守的な立場から提案がされて來てゐた。ところが、政治的な文脈にからめ取られたり、編輯者同士の諍ひがあつたりしてあまり廣がりを見せてゐない。もちろん、人人に從來の教科書が内包してゐた偏向性に氣附かせたことは一定の成果と言へる。しかしながら、そもそも「社會」科といふ不思議な名稱の教科の有り様も含めて、ますますの議論の深まりが求められよう。

そして、その動きと連動して、國語の教科書についても正統な形ものを提案する時期だらう。この國語問題協議會こそ國語の教科書作成の旗振り役になつてよいのではないか。なぜならば、國語や國字の復活は、良き文章の復興によつてのみなされるものだからである。

今年の大學入試センター試験の現代國語の問題が評論は小林秀雄の「鐔」から、小説は牧野信一の「地球儀」からであつた。現代青年の生活や心理からすればずいぶんとかけ離れたかうした文章が、センター試験で課されたことはこれまでにはなかつた。かうした近代古典を全國の青年五

るとは必ずしも言へない。むしろ、まず最少限の漢字を覚えて漢字假名交り表記で學ぶ方が違和感が少ないだらう、といふのが私の感想です。この感想をもつて本日のお話の結びとさせていただきます。御清聴ありがたうございました。

(くははらかやこ 昭和女子大學教授)

(参考文献：關口存男著『冠詞』Ⅰ、Ⅱ、『文法シリーズ冠詞』幾つかの例文も借用しました。付記した英語は飽くまで参考までに挙げた逐語譯です。實用的でないものもあります。)

十萬人に一齊に讀ませるといふ保守反動の一大事件がこの冬に起きた譯だが、ここには大いに見習ふべきものがある。それは、日本語で書かれた名文をどんどん讀ませるやうな機會を作れといふことである(ただし、センター試験のいけなないところは、假名遣ひを「現代かなづかい」に改惡してしまつてゐるところ。これでは意味がない)。

そこで、作られるべき教科書の一つに入れたいののは、かつては高校教科書にも輯録されてゐた、北村透谷の「漫罵」である。内容見本を書くつもりで以下に記してみる。本文をまづは引いてみよう。

一 夕友と與に歩して銀街を過ぎ、木挽町に入らんとす、第二橋邊に至れば都城の繁熱漸く薄らぎ、家々の燭影水に落ちて、はじめて詩興生ず。われ橋上に立つて友を顧りみ、同に岸上の建家を品す。或は白壁を塗するあり、或は赤瓦を積むもあり、洋風あり、國風あり、或は半洋、或は局部に於て洋、或は全く洋風にして而して局部のみ國風を存するあり。更に路上の人を觀るに、或は和服、或は洋服、フロックあり、背廣あり、紋付あり、前垂あり、更にその持つものを見るに、ステッキあり、洋傘あり、風呂敷あり、カバンあり。爰に於て、われ慨然として歎ず、

今の時代に沈最高調なる詩歌なきは之を以てにあらずや。今の時代は物質的の革命によりて、その精神を奪はれつゝあるなり。その革命は内部に於て相容れざる分子の衝突より來りしにあらず。外部の刺激に動かされて來りしものなり。革命にあらず、移動なり。人心自ら持重するところある能はず、知らず識らずこの移動の激浪に投じて、自から殺るさざるもの稀なり。その本來の道義は薄弱にして、以て彼等を縛するに足らず、その新來の道義は根帯を生ずるに至らず、以て彼等を制するに堪へず。その事業その社交、その會話その言語、悉く移動の時代を證せざるものなし。斯の如くにして國民の精神は能くその發露者なる詩人を通じて、文字の上にあらはれ出でんや。

國としての誇負、いづくにかある。人種としての尊大、何くにかある。民としての榮譽、何くにかある。適大聲疾呼して、國を誇り民を負むものあれど、彼等は耳を閉ぢて之を聞かざるなり。彼等の中に一國としての共通の感情あらず。彼等の中に一民としての共有の花園あらず。彼等の中に一人種としての共同の意志あらず。晏逸は彼等の寶なり、遊惰は彼等の糧なり。思想の如き、彼等は今日に於て渴望する所にあらざるなり。

は十分ではなからうから、本文の後には、次のやうな「要約」を載せてもよい。以下のやうな文章ではどうだらうか。

【要約】

今の時代は物質的な革命によつて、その精神が失はれつつある時代である。明治維新以来の革命は、日本の國內において矛盾する要素の衝突によつて起こつたのではない。國外の刺激に動かされて起こつたものである。現代の革命は、じつは革命ではなく單なる移動に過ぎない。國民の心は、この外部の刺激に影響され、その結果重々しく慎重な態度をとることができず、自分でそれと氣附かぬまま、この移動の激しい波の中に巻き込まれ、自身を見失つてしまつてゐる。自分を見失はない者は、ごく少ない。日本の傳統的な道徳は、現代の日本人の行動を規制するだけの力がなく、さうかと言つて新しく外國から來た道徳は、まだ今の日本に根を下ろすといふところまで行つてゐない。したがつて現代の日本人を支配することができてゐない状況である。現代の日本人のごと、交際の仕方、言葉などは、すべて現代が眞の意味において變革の時代ではなく、單なる移動の時代に過ぎないことを證明してゐる。こんなやうな状態では、日本獨

今の時代に創造的思想の缺乏せるは、思想家の罪にあらず、時代の罪なり。物質的の革命に急なるの時、曷ぞ高尚なる思辨に耳を傾くるの暇あらんや。曷ぞ幽美なる想像に耽るの暇あらんや。彼等は哲學を以て懶眠の具となせり、彼等は詩歌を以て消閑の器となせり。彼等が眼は舞臺の華美にあざれば奪ふこと能はず。彼等が耳は卑猥なる音樂にあざれば娛樂せしむること能はず。彼等が腦髓は奇異を旨とする探偵小説にあざれば以て慰藉を與ふることなし。然らざれば大言壯語して、以て彼等の膽を破らざる可からず。然らざれば平凡なる眞理と普通なる道義を繰返して、彼等の心を飽かしめざるべからず。彼等は詩歌なきの民なり。文字を求むれども、詩歌を求めざるなり。作詩家を求むれども、詩人を求めざるなり。

(明治二十六年十月)

さて、どうだらう。これを「現代かなづかい」や現代語譯の文章にしてしまへば臺無しである。若干二十五歳の青年の文章であるが、明治の人の文章にはあの時代の切迫した空氣を感じさせるものがある。その息吹はどうしたつて文語でなくてはならない。これをそのまま讀ませてみたい。記されてゐることは、今の時代にも通じる。逐語的な理解

特の國民の心が——國民の精神を實現するのが詩人だが——詩人を通して、文字の上に表現されることなどあり得ない。現代の日本人には日本人として共有すべき誇りもなく、それを作らうともしない。さういふものを求めようともしない。ただ、遊び樂しんでゐるばかりである。もちろん、これは時代のせいである。物質的な革命を追求するあまりに、高尚な思想を知る必要も感じてゐない。それだから、現代の日本人は、くだらない芝居や小説や音樂を求めてしまふ。それでも、それらの無意味さを知らしめる本當の詩や、それらを表現する本物の詩人が必要なのだが、現實には求められてはゐないのだ。

さうして、解説の文章を教師用指導書に記してもよいだらう。きつと現代の教師には、讀み取れないからである。

第一段落は、銀座を歩いてゐる時に見た景色である。詩人北村透谷が詩興を求めて東京の大都會を散策してゐる。ただ眺めてゐるだけでは單なる感想を漏すだけだが、景色の詳細を吟味しながら見てみれば、いろいろなことに氣づいてしまふ。西洋文化と日本文化との衝突がその場に繰り廣げられてゐることを發見した。そして、「沈嚴

高調なる詩歌なきは之を以てにあらずや」と感じてしまふことになつた。その理由は、第一段落からはうかがへない。ただ、ごちやごちやした日本の大都會の中からは、歌が生まれてゐないといふ事實に透谷は直觀的に思ひ至つたのである。

第二段落は、明治といふ時代がどういふ時代であるのかを捉へたもの。透谷の慧眼が冴えてゐる。

熟成する内部の變化が時が満ちるにしたがつて外部に表出してくるといふのがあるべき姿である。卵から雛がかへるやうに、あるいは木の實が緑色から黄色く赤く變化していくやうにである。しかし、我が國の近代化の過程にあつたのは、さうした自然な變化ではなく、外壓によつて成し遂げられた人工的なものであつた。もちろん、江戸時代の文化、經濟の基盤なくして近代化は果たせなかつた。さういふ側面もないわけではない。だが、産業革命を成し遂げた列強諸國の市場擴大を求めた東アジア進出といふ歴史的なうねりがなければ、明治維新があれほどスムーズに果たせたかどうかは疑問である。やはり、外部から開國を迫られて日本の近代化は緒に就いたと考へるのが至當である。

さういふ状況を北村透谷は「移動」と名附けた。のち

の外的な模倣である。つまりは、殖産興業によつて富國強兵を實現することであつた。見事にかうした外面的な成功を収めた明治の時代人は、それゆゑに日本近代の虚妄を見ずに済んでゐる。透谷はそのことを指弾したので。

第三段落第四段落で、その指摘は更に激しさを益す。

國としての誇りを失つた國民、詩歌を求めず、詩人を求めない國民と言つて痛罵する。もちろん、非難だけで透谷は終はらない。この文章にはあと二段落文章が続いてゐるのだが、その最後は、「吁、汝、詩論をなすものよ、汝、詩歌に勞するものよ、歸れ、歸りて汝が店頭に出でよ」となつてゐる。文學（詩歌）に思想と宗教との役割を擔ふことを求め、自らその體現者として、詩人となるべき義務を強ひたのである。そのあまりに大きすぎる課題を自らに與へたために、この文章を書いた二ヶ月後に透谷は自殺を圖ることになつた。もちろんその課題は二十代の一人の青年に背負へるものではない。今の私たちはあつさりとさう言つてしまはう。しかし、たとへさうであつても、それから百二十年が経つて、その課題は解決したかと言へば、絶句せざるを得ないのである。さうであれば、その課題を背負つて死んだ一青年の聲には、もつと耳を傾けて良いのではないかと思ふ。

に夏目漱石が「現代日本の開化」といふ講演で「外發的」と名附けたが、それより大分以前にそれと同じことを海外經驗を経ずして透谷が説明してゐる。「外部の刺戟に動かされて來りしものなり。革命にあらず、移動なり」とは明治の風俗の弱點を貫通してゐる。

では、この外發的な變化＝移動のいつたい何が問題なのか。アジアではじめて近代化した國として素晴らしいではないかといふ疑問にどう答へるべきかといふことである。それを一言で言へば、日本近代の虚を誤魔化してしまつたといふことである。近代でないのに近代であるかのやうに、個人の誕生も果してゐないのに個人が誕生したかのやうに、社會など存在してゐないのに社會があるかのやうに思ひ込んでしまつた、近代日本のあらゆる虚を直視しないでゐられるやうにしてしまつた罪は果てしなく大きい。本來は、神なしに個人もないし、個人なしに社會は存在しない。近代は神への服従にしろ離反にしろ西洋が中世を経て作り上げた時代である。それは必然的に求められた。ところが、さういふ過程を私たちは持たない。あるのは、神のやうなもの、個人のやうなものの、社會のやうなものである。さうした根本的な事柄の不在を直視せずに済むことを可能にする唯一の方法は、西洋

（まへだよしのり 海陽學園教諭）



古典の日の制定に寄せて

市川 浩

昨年、十一月一日を古典の日とすることが法制化されました。國民の祝日にはなりませんでしたが、衆參兩院の議決を経て實現したものです。紫式部日記の寛弘五年（一〇〇八）十一月一日の條に、藤原公任の言葉として「若紫やさぶらふ」とあり、源氏物語が初めて歴史的文献に登場した日とされてゐます。

古典の「古」は「十」と「口」との合はさつた形で、口承によつて代々語り傳へたものの内、十代以上を歴てゐるものを「古」といひ、「典」は「ふみ」の意味ですから私達の祖先が大切に傳へて來た書物が古典といふことになります。我が國語は今から約三千五百年くらゐ前、縄文時代の後半に成立したとされてゐますが、その最初の約二千年間は文字のない時代が續きました。しかしこの間、言語による水田稻作の普及といふ大きな恩恵を齎しましたから、言靈の幸はふ國、助くる國として語り繼ぎ、言ひ繼いできた民族の口承文化が、その後傳來した漢字を用ゐて書き記され、現存する日本最古の書物古事記を始め、多くの書物が今日傳はつ

り繼ぎ言ひ繼いで學習させて行くことにあります。その意味では専門家による古典の研究は精緻を極めてゐるとはいへ、學校教育での古典學習は激減してをり、私達の世代そのものが既に古典との紐帶を殆ど失つてゐるのが現状です。

このやうな状況の下で、先づ私達自身が古典に興味を持ち、そこから得られる古典への親しみを次世代の方達に傳へて行かねばなりません。古典に親しむ第一は何と言つても古典の文章を誦誦すること、これは江戸時代の寺子屋で盛んに行はれ、明治以降も受け繼がれてきました。戦前の教育を受けた世代の方々が、共通する有名な古典文を互に誦誦し合ふ姿をよく見掛けたものです。その世代も退場の時期が迫り、晩蒔きながら古典を誦誦する文化の再興を図ることから始めねばなりません。

私は古典と不可分の關係にある文語の復興運動に参加して、地域で行はれる生涯學習などの一環として文語に關する講師を勤めることがあるのですが、その際必ず聴講の方々と御一所に古典の名文を音讀することにしてをります。「小學生でもあるまいし」と最初は乗り氣でなかつた方々も文章のリズムが心地よく、終には皆さんに満足して頂いてをります。

てゐることは、我が國にとつて大きな幸ひと言へませう。その古事記の撰錄者太安萬侶の序文の日附け、和銅五年（七一二）正月二十八日から昨年は恰度一千三百年後に當りましたことも記憶に新しいところです。

今日印刷は勿論、複寫といふことが簡単に出来るやうになりましたが、それでも絶版本の覆刻などは簡單ではありません。印刷が普及するまでは専ら書物を寫し取る「寫本」が重要な作業でした。特に大部の書物の寫本は膨大な事業でありましたし、一方で寫本には、寫し間違ひをしたり、また後人が無斷で書加へたりする可能性が常にあり、眞の原本との比較が問題となります。幸ひにも我が國では、藤原定家や三條西實隆など、當代一流の文化人達が寫本の校勘に盡力した御蔭で、質の高い寫本が残ることになりました。これらの寫本の御蔭で私達は原本が散佚してしまつたものでも今日讀むことができます。

これら先人達が苦心して傳へてきた、古典の原本或いは寫本を貴重な文化財として保全することは勿論ですが、私達が古典を文化として受繼ぎ、次世代に傳へることがより重要であり、古典の日の意義もここにあると思はれます。ここで重要なのは文化の傳承とは、協同體の成員全てがその文化を學習により共有し、さうしてそれを次世代者に語

小學生で思ひ出しますのは、平成二十一年東京世田谷區立船橋小學校で教育特區「日本語」の授業を參觀したことです。小學二年生が孟浩然の漢詩「春曉」を漢字の儘で音讀、約四十五分で全員が誦誦できるやうになりました。漢詩の訓讀文がリズムよく、小學生にも楽しく傳はつたからだと思います。このことは古典音讀の習慣が殆ど失はれた状態でも、直ぐに復活できることを意味してゐます。御子さんや御孫さんに古典音讀の楽しさを傳へる方々が増えることを期待したいと思ひます。

一方私共印刷の分野が協力できることとして、古典に親しむための適切なテキストの提供といふことがあります。古典文は漢字、假名遣が通常の「常用漢字」、「現代假名遣い」と異なるだけでなく、ルビも多用する等、一見すると何だか同じ日本語のテキストと思へず、「親しみ」が持てないなどと言はれさうです。しかし、だからといって、古典文語の漢字の字形や假名遣、更には文法までも現代風に革めるといつた手段を安易に採るべきではありません。むしろ判型やフォントの選擇、文字のサイズや文字・行間の設定等私共が培つてきた組版技術を駆使して、讀み易く印刷することが「古典の日」への効果的な援護射撃となるでせう。その觀點から特に重要なのが明治・大正時代の文學作品

の名著です。御承知のやうに明治維新で、それまで長く続いてきた文語文だけでは、西洋の概念を含む文章の組立てが巧く行かないといふことから、新しい文體が摸索され、「言文一致體」等を経て最終的には、森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介等の努力により、文語體とも整合性をもつ書き言葉としての「口語體」が大正末期に完成するのですが、さうした運動の中でこの時代には文語文、口語文ともに多數の名著が生れ、私達にとつて身近な古典となつてをります。これらは今日文庫本等で現代風の印刷で讀むことができますが、「古典に親しむ」といふ立場からは古典としての印刷によるテキストが求められます。

最近では印刷用の版下制作は印刷業界の専門といふ常識が崩れ、寧ろ著作者側から電子データを「元全版下」として受取る方式が一般的になりつゝありますが、古典の場合、漢字の字形等、通常のワープロ機能では對應できず、十分な字種、字形を備へた専門の印刷所に頼らざるを得ないこととなります。またルビにしても、古典の場合は歴史的假名遣で振る必要があります、これを校正する能力を備へた印刷所も必要となります。明治・大正期には總ルビ印刷が精力的に行はれ、印刷側の文選能力ぶんせんがこれを支へたのです。このやうに見てきますと、古典の日を契機に、校正、組版

の分野でも印刷業の出番復活が始まるのではないかといふ期待も感ぜられます。

顧みますと戦後六十六年に互り、私達は當に「脱文語」、「卒古典」で過し、現在特段の不自由を感じてゐません。一つあるとすれば、海外の新しい思想や概念の日本語への翻譯語が明治期に比べて明らかに弱體化してゐることです。これは文語や古典からの養分補給が乏しいのが原因ではないでせうか。人體で言へば、血管が細くなり血液の供給不足で、臓器の機能が低下するやうなものです。而もかうした現象は、事態が決定的となるまで自覺症狀が現れないと言ひます。私達が文語や古典から遠ざかつて、別に困ることがないと思ふのも「自覺症狀」が無いだけなのかも知れません。古典の日の制定は私達にそんな警告も發してゐると言へませう。

(いちかはひろし ㈱申開代表)

本稿は社團法人東京グラフィックサービス工業會機關誌「東京グラフィックス」平成二十五年一月號に寄稿したものである。

縦書きの意識と感覺 (その五)

若井 勳夫

縦書きの網走驛標札

北海道の網走驛は大正元年にできたが、昭和七年に貨物驛となり、新驛が現在地に移轉した。木造白壁の華麗な建物であつたが、同五十二年に鐵筋コンクリートの洋風の驛舎に改築され、現在に至る。この驛入口に古い木製で筆太の達筆で縦書きに記された「網走驛」の標札が掲げられてゐる。この驛標が初代驛からのものか二代目驛からのものか不明であるが、その由來として「網走刑務所から出所してくる受刑者が二度と横道にそれないように、という願いが込められている」と添へ書きが揭示されてゐる。當驛標は網走番外地として有名になつてから、盜まれるやうになり、同じく縦書き一枚板の市役所や刑務所の看板も盜難に遭つた。しかし、右の添へ書きをしたところ盜まれなくなつたといふ(同市教委)。このことについて、推理小説作家の西村京太郎は「オホーツク殺人ルート」(昭和五十九年)で、次のやうに言つてゐる。

「網走の駅は網走刑務所を意識しているのか、赤レンガのところ、タテに『網走駅』と書かれている。横書きでな

い理由は、網走刑務所を出所した人間が、この驛から乗つて社会に出ていくので『まっすぐ生きて欲しい』という願ひがあるせいだといふ。

この話は旧國鐵(JR)で古い資料を捜しても記録にはなく、今となつては眞偽は不明である。しかし、觀光パスのガイドはこの逸話を紹介し、地元では新しい都市傳説の一つになつてゐるやうである。ここでは本當かどうかといふ問題ではなく、縦書きが、身を正して眞直ぐに生きていく指標として機能してゐることが大切である。横書きでは直進するのではなく、横道にそれ、はづれていく。清岡卓行は『アカシヤの大連』(昭和四十四年)で「個人の生という縦軸は上昇への意欲によつて貫かれ」と述べる。縦軸や縦線は今の地點から前方へ伸長して、上昇していく意欲的なものである。縦書き・横書きの問題は單に表記にとどまらず、日本人の意識と感覺の深い根底をなしてゐる。

縦系圖に見る永達思想

系圖には縦系圖・横系圖といはれるものがあり、前者は「用紙を縦につないで氏族の血統の展開發展を、時間の経過に治い、書き足し記し繼いでゆく」形式で、「親から子、子から孫へと縦につらなる血統の流れをたどるのに、最も自

然な」ものである（森田康之助『上代の日本人』昭和四十年）。縦系圖は生の「流れの一点に身を置いて、この時間の推移を表わそうとするときは、過去を上として、上からしだいに下に推移するものとして時の流れを把握したことを示す」。横系圖は繪巻物と同じく、右から左へと時が進む。一行の下にきた人名はそこから線を上方へ伸ばし、同じやうに下に降りていく。この右横書きは左横書きと異なり、一行一字の書と同じく縦書きの一種である。

このやうに日本人は時の流れの捉へ方として、過去を上方として、視線を降ろして現在に至ると考へるか、過去を右として視線が左に動くのに合はせて現在に至ると考へるか、どちらかである。前者は上から下への重みとして現在を受止め、未來へと展望する。後者は上から下への重みが右から左へと進むことにより未來が開かれてくる。その重みは自己の責任感と自覺に一體化し、將來への發展につながる。縦書きは左に進む方向が白紙に開かれ、全體の展開が把みやすい。しかし、左横書きでは過去が見えても、未來は手に隠れて、展望がきかない。單に手が汚れるかどうかは問題ではない。「系図」を、まず縦の形式においてとらえ、縦の形式に表わしたわが上代人の心でもある。用紙を縦に縦にとつなぎあわせ、これに家々代々の祖先以來の足

跡を縦の線で結びつける系図の形式は、その意識の底には、無限の永遠の發展に対する信頼と期待とがひそんでいる」のである。

宗祖の繪傳の展開

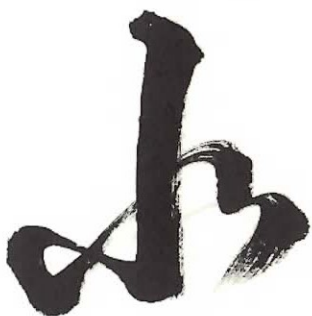
「法然上人繪傳」二幅（三重西尊寺、山梨縣立博物館）は、第一幅目は下から上へ進み、第二幅目はその上から下に進む蛇行式の進み方である。また、「親鸞上人繪傳」（萬福寺）は右の掛軸から下より上へ順に展開してゐる。一段ごとはもとより右から左に進み、二段目はそこから右上に移り、同じく左へと移り、上に展開する。これがどのやうな發想かは不明であるが、「金剛界曼荼羅」では、眞中から下に降り、次いで左へ、そこから時計回りに上昇し、突き當つて右へ、そして下に降りて完結する。このやうな密教の眞理への近づき方が繪傳に影響したのであらうか。縦系圖とは違った時間の展開もあつたのである。

縦書きの読みやすさ

河合榮治郎編『學生と讀書』（昭和十三年）で、醫師の杉田直樹が「讀書の生理」において書物の縦書き横書きについて、次のやうに述べる。「私自身は：一字一字拾つて読む

よりも全體のカンで読んで行くことの方が多い所から、明朝活字縦組平仮名が一番速く読める。：沈思黙読又熟読を要する學術書、哲學書などは必ず漢字縦書、字間アキ、大型活字であつて欲しい。：精神修養的内容の書物は尚一層尊嚴な印刷面にしなければ、効果は挙がらない」。ここ数年、電子書籍で縦組みが急増し、一般に受入れられ、販賣部数が伸びてゐる。あるソフト開發會社は「縦書き日本語にこだわり」、ドットブックを作成した。また、次世代のネットレイアウトで縦書きを國際標準化しようと總務省が民間企業と検討を進めてゐる。情報時代に、縦書きの良さが徐々に認められつつある。

（わかぬ いさを 京都産業大學教授）



〔資料〕 武部良明の送假名論

上田博和

武部良明^{たけべよしみ}〔1920-1994〕は学習者の陥りやすい「送假名を伴ふ漢字の訓と讀みに關する誤り」を指摘し、送假名の本質を説いた。大變參考になると思はれるので、以下に列舉引用する。

1

漢字で書かれる語の中には、「降る・重い・後ろ・必ず」などのように、平仮名を添えるものがある。こういう場合の「る・い・ろ・ず」などが送り仮名である。

すなわち、この場合の考え方であるが、問題になるのが、送り仮名を除いた漢字の部分をそれぞれの場合に何と読むかということである。というのは、こういう場合の「降・重・後・必」の読み方に関し、「ふ・おも・うし・かなら」であると考えがちだからである。しかし、このような考え方は、漢字を訓読する場合の原則に反している。この場合は、「ふる・おもい・うしろ・かならず」という読み方そのものが、それぞれの漢字の字訓である。それは、漢字の字訓としての読み方というのが、その漢字の意味に当たる日本語だからである。

い。字訓というのはその漢字の中国語としての意味に当たる日本語であるから、「休」の字訓は「ヤスム・ヤスメル」である。(91-92頁)

武部「漢字の覚え方について」講座 日本語教育 19『1983.7 早稲田大学語学教育研究所。

4

送り仮名というのは、語を漢字で書き表すときに、漢字の訓読を確定するために添える仮名です。その場合、訓読の終わりの部分を取り出して漢字に加えます。例えば、「持」という漢字をモツと読むとき、「持つ」とします。これによつて「持たナイ・持ちマス・持つ・持つトキ・持てバ・持て・持とウ」のうちのどの形かを明らかにすることができず。(752頁)

武部編『現代国語表記辞典』第一版 1985 第二版 1992 三省堂。

5

漢字を用いて語を書き表す場合に、語形を確定するために漢字の後に添える仮名が、「送り仮名」である(81頁) 送り仮名をつけることを「送る」という。「送る」という語の本来の意味は、「他のところに移す」ことである。「送り仮名」というのも、本来は読み仮名のような形で存在するその

らである。つまり、「雨」という漢字を字訓として「あめ」と読むのと同じ理由で、「降」という漢字を「ふる」と読む。そうして、その場合にその読みの一部を漢字の外に送り出し、これを平仮名で添えるのが送り仮名である。(72-73頁)

武部著『日本語表記法の課題』「表記に見られる法則性」1981.6 三省堂。初出は武部「表記に見られる法則性について」講座 日本語教育 10『1974.7 早稲田大学語学教育研究所 (16-17頁)。一部の字句が訂正されてゐる。

2

「行う」「取り扱い」の指導に当たり、「行・おこな」「取・と」「扱・あつか」のような分析をすることは好ましくない。この場合の漢字の部分の指導に当たっては、それぞれの意味として「行・おこなう」「取・とる」「扱・あつかう」である。その意味をそのまま読み方とすると、読み方の一部を送り仮名としたにすぎないからである。

武部「送り仮名の問題点」講座 日本語教育 17『1981.7 早稲田大学語学教育研究所。一部の字句を訂正して、武部著『文字表記と日本語教育』1991.3 凡人社 (248頁) に収録。

3

「休」の部分を「ヤス」と読むのだと覚えるのは好ましくない

漢字の字訓(仮名書き)の終わりの部分を、その漢字の後に移す、という考え方である。送り仮名が読み仮名の一部だということも、送り仮名の多いほうが読みやすいということも、「送る」という考え方から導き出せるわけである。(82-83頁)

武部編『国語表記事典』1987.10 角川書店。

6

漢字の字訓というのは、その漢字の意味に当たる日本語です。から、「川」という漢字を「かわ」と読むのが字訓です。同じようにして、「並」の字訓は「ならぶ・ならべる」です。しかし、実際に書くときには、「並ぶ・並べる」のように書きます。このときの「ぶ・べる」が「送り仮名」です。

「送る」という語の表す意味は、「あるところにあるものを他のところに移す」ということです。送り仮名の場合には、どこにあったものをどこに移したのか、ということが問題になります。そのときの考え方は、本来はその漢字の振り仮名(読み仮名)であったものの終わりの部分を、その漢字のあとに移したと考えるのがよいでしょう。その点から、送り仮名というのは、読み仮名の一部であるという考えが成り立ちます。読み仮名は、その漢字の読み方を最もよく表すことのできる手段ですから、送り仮名は、その読み方

のヒントを与えることになります。「並ぶ」と書いてあれば、「並」という漢字の読み方として、最後に「ぶ」のつく形ということになるからです。(43ペ)

漢字の字訓というのは、その漢字の中国語としての意味に当たる日本語ですから、翻訳語がそのまま読み方になったものです。・・・多くの字訓が示された漢字もあります。しかし、このことは、字訓が翻訳語であるという点から説明できます。例えば、英和辞典を見ると、一つの英単語にいろいろの日本語が当てられています。このような訳語がすべて字訓になりうるわけですから、字訓が多くなるのも当然です。・・・送り仮名をつけて書き表すときも、送り仮名のついた形全体が訓です。「休」を「やすむ」と読むときに「休む」と書き、「休」の部分に「やす」という振り仮名をつけますが、「休」の字訓は「やすむ」であって、「やす」ではありません。(89-90ペ)

武部編『日本語の文字表記』1987.12アルク
(NAFL Institute 日本語教師養成通信講座内)。

7

送り仮名がついてもつかなくても、字訓で読む場合の漢字の読み方に異同はないのである。したがって、例えば「歩」の字訓は何かといえば、それは「あるく」である。単独の

動詞として用いるときにこれを「歩く」と書くために、「歩」の読みを「ある」と覚える学習者がいるが、好ましくない。「歩」の字訓は「あるく」であり、「歩道」は「あるく・みち」である。送り仮名をつけて「歩く」と書くのは、読み仮名としての「あるく」の終わりの部分を漢字のあとに添えたにすぎないのである。送り仮名が読み仮名の一部であるからこそ、送り仮名が多ければ読みやすいという考え方も成り立つのである。(12ペ)

武部「文字・表記の範囲」『講座 日本語と日本語教育8 日本語の文字表記(上)』1989.7 明治書院。

8

漢字の字訓というのは、それぞれの漢字に固有のものであり、送り仮名の多少や有無とは関係がない。「申し込み・申込み・申込」は、いずれも「もうしこみ」と読む。単独の「もうす」を「申す」と書くとしても、「申」の字訓は「もう」ではなく「もうす」である。そのように扱うことにより、「申込」といふ漢字熟語が「もうし・つげる」と理解できるわけである。(288ペ)

武部「送り仮名」日本語教育学会編『日本語教育ハンドブック』1990.3 大修館書店。

9

その字訓の終わりの部分を、漢字のあとに、仮名の形で書き加えたものである。本来は「登」の読み仮名としての「のぼる」のうち、「る」だけを「登」のあとに持っていく。持っていくことを日本語で「送る」というから、持っていく仮名の「る」が、「送り仮名」と呼ばれている。したがって、送り仮名というのは読み仮名の一部である。「登る」と書いても、「登」という漢字を「のぼ」と読むわけではない。「登」の字訓読みを「のぼる」と覚えることによって、「登山」という語を「やまに・のぼる」と理解できるわけである。(87ペ)

武部著『なるほど現代表記法』「漢字と仮名で「登る」」1991.8 日本評論社。

(うへだひろかず 元都立高校教諭)

10

武部著『文字表記と日本語教育』「入門課程の漢字指導」1991.3 凡人社。

「登」のほうは、日本語で「のぼら・のぼり・のぼる・のぼれ」のいずれであるかを明らかにする必要がある。・・・送り仮名というのは、語を漢字の字訓で書き表すに当たって、その字訓を確定するために添えるものである。そのときに、

日中英 言葉の雑学 (六)

高田友

高田…前回は馬鹿話に終つてしまつたが、今日は前々回の続きで、日本語と中國語の共通點の話をしよう。

英語では、一つの文が成立するためには、必ず一つ、動詞が含まれてゐなければならない。

健太… I love you. なんかさうですね。でも、 I want to hit the teacher. なんていふ場合は、動詞が二つありますね。

高田…なんて例文だ。しかし、 want と hit は動詞としての性質が違ふぢやないか。

健太…あ、さうか。 want は現在だけど、 hit は原形なんだ。

高田…文の構成としては、どつちが大事だらう。

健太…そりやあ、 want でせう。述語動詞なんだから。

高田…さうだね。ところで、動詞には五つの形があるのが解るかね。

健太…原形、現在、過去、動名詞、分詞。

高田…まあ、正解だが、僕は、「現在、過去、原形、ing 形、過去分詞」と分類してゐるんだ。

健太…順序なんかどうでもいいかも知れませんが、現在を原形より前に持つて來たのは、何か意味があるんですか。

動詞も動詞に分類されるんですか。

高田…あたりまへだよ。一番近いものを搜せば、動詞しか考へられないだらう。

一方、冠詞は名詞を修飾するんだから、……。

健太…さうか！ 冠詞は形容詞の一種なんだ。なるほど、一つ賢くなつた。

それはさておき、この文では、will が定動詞なんですか。

高田…さうだよ。ぢやあ、will は動詞の五つの形のうちのどれだね。

健太…未來。あれ、未來なんて、動詞の五つの形に入つてゐないや。え。まさか。will は現在だとか……。

高田…will は現在なんだ。文の時制には、現在完了とか未來進行形とか、いろいろなタイプがあるが、動詞の時制としては、現在と過去しか存在しないんだよ。原形・ing 形・過去分詞は時制には關係がないんだから。

健太…うん、うん。閃いた。will は現在から見た未來で、would は過去から見た未來なんだ。だから、大きく分ける「will は現在で、would は過去だ」といふことになるんですね。

高田…そこまで言へるとは感心した。ぢやあ、日本語の場合はどうだらう。そもそも、文には必ず動詞がなければい

高田…一つの文(節)が成立するためには、現在または過去の動詞がなければいけないんだよ。

健太…なるほど。現在と過去が偉い形で、原形以下は從屬的にしか使はれないといふわけだ。その偉い形が「述語動詞」なんですね

高田… I have been loved by her. なんていふときは、have been loved 全體を「述語」とか「述部動詞」とか言ふ。それと區別するために、現在または過去の動詞一つだけを指して、「定動詞」といふことがある。この文ではどれが定動詞だね。

健太… been も loved も過去分詞で、have だけが現在ですから、have が定動詞ですね。

高田… I will go to the park. の場合は、定動詞はどれだ。

健太… go でせう。いや、待てよ。go は現在でなくて原形だから、定動詞にはなれない。will は動詞でなくて、助動詞だし……。

高田…八品詞は全部言へるかね。

健太…名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・前置詞・接續詞・間投詞。

高田…ぢやあ、will は八品詞のうちのどれだね。

健太…あれ、八品詞に助動詞が入つてゐない。ぢやあ、助

けないんだらうか。

健太…「彼女は美しい」なんてときは、形容詞だけしかないですね。……さうか。日本語は形容詞があれば、

動詞がなくても文が成立するんだ。だから、「用言」と言ふんですね。

高田…さうなんだよ。日本語では、動詞でなくても文や節を作れるから、「定動詞」といふわけには行かない。假に「用言」と言つたらどうだらう。

ところで、「彼女は綺麗だ」と言ひ換へた場合はどうだらう。

健太…「綺麗だ」は形容動詞ですね。ぢやあ、形容動詞も定用言になれるのかな。ややこしくなりますね。もつとすつきりした定義をしたい所です。

高田…「綺麗」が抽象名詞で、「だ」が助動詞だと考へてみないかね。

健太…でも、形容動詞の語尾の「だ」は助動詞ぢやない、と習ひましたよ。……あ、さうか。さういふ常識に疑問を抱かなくやいけない、といふのが先生の信念なんです

ね。「だ」は助動詞。そして、……うん。うん。また閃いた。助動詞は動詞の一種だから、「彼女は綺麗だ」と言ふときは、「だ」が定動詞、または定用言になつてゐるわけ

か。

高田…さうなんだよ。日本語では、動詞か形容詞が定用言になつて、文を作るんだ。もつとも、英語とは違つて、現在過去といふ形は存在しないがね。その代り、原則として終止形が定用言になる。これについては、また、いづれ説明しよう。

健太…中国語の場合はどうですか。

高田…英語では形容詞は述語(定用言) になれないから、be動詞を挟んで、You are beautiful. と言はなければならぬ。日本語では、謂はば、You beautiful. の形が出来る。

實は中国語は、その點については、日本語と同じなんだ。

健太…ちやあ、be動詞なしで、You beautiful. みたいな言ひ方が出来るんですか。

でも、中国語では、「是」がbe動詞の役割をすると聞いたことがありますよ。

高田…名詞は述語になれないから、文を作るためには、外にbe動詞が要る。しかし、形容詞は述語になれるから、それが要らないんだ。

「私は學生です」は「我是學生」(ウオーシーシュエシヨん)だが、「彼女は美しい」の場合は、……。

健太…僕に言はせてください。「美しい」つて、何て言ふん

書體の變化は領主側から

高崎一郎

「土地の言葉を全く聞取れないのに、なぜ自分は古文書が讀めるのだらう」中世史を専門とする網野善彦氏はある日、調査先の九州でふと疑問に感じたといふ。『日本の歴史をよみなおす』(平成三年、筑摩書房)は冒頭からなかなか面白い。

日本人の識字率が極めて高く、また古文書がどの國よりも多い事はこれまでからよく知られてゐた。律令國家から現代に至るまで、日本の行政は厳格な文書主義で貫かれてきた事を網野氏はまづ指摘してゐる。しかもそれがいはゆる愚民政策の故ではなく、常に下の方からも自發的に文字にかかはらうとし續けた、「おそらく世界でも非常に特異な國家」と評してゐる。

古文書の研究者にとつて、年號を隠した文書を年代別に分類する事などさほど困難ではないらしい。日本全國どんな寒村でも時代ごと一齊に、しかも均質な變化をするためである。例へば明治四年の前後二三年間で、それまでの御家流が明治風の書體へとすつかり入れ替つた。網野氏は「伊藤博文の手紙などは私にとつて非常に讀みにくい」と斷言

ですか。

高田…漂亮(ピャオリヤん)。

健太…She beautiful. の形にすればいいんだから、「是」は要らない。つまり、「她漂亮」(ターピャオリヤん)でいいんだ。

高田…うん。そのとおり。

健太…ところで、「我是學生」ですが、「是」は「これ」ですね。漢文で、「我是是、學生なり」といふのとどういふ關係があるんですか。

高田…古い中国語には、「是」に「これ」の意味があつたんだ。そこで、「我是學生」の場合も、日本語で訓讀するとき「は」「我は學生なり」でいいんだが、「是」を讀みたくなつて、「これ」を入れたんだね。現代中国語では、「これ」だとは思はない方がいい。

(たかだいう 元塾講師)

してゐる。語彙や文脈も含めて、斷絶は大きかったのである。

また國立歴史民俗博物館の塚本學教授の調査によると、江戸時代の農村で「書體の變化は明らかに領主側から」だったらしい。つまり下の者が積極的に上の書き方を眞似するのである。更にこれが必ずしも隷屬を意味しない事にも注意すべきであらう。日本の「村」はかなり自治的で、領主の介入を拒む面があるといふ。近世や現代につながる村は、多く南北朝から室町時代を起源とし、また同じところから古文書が激増する。文字の知識が自立を助けてゐるのである。もしこれらの指摘が正しいとすれば、戦後の國語改革は何度も起つた變化の一齣であり、文字修得に自發的な「進取の氣性」によつて新字新かなは普及したことになる。

古文獻をよく讀込み、自己の文章表現に活すのは素晴らしいことである。しかし經驗を重ねないと修得できない暗黙知によるのでは、社會的規範として失格であらう。一般的に歴史研究は「過去をどう讀むか」を取扱ふ。そして國語運動はそれを現代にどう活かすか、つまり過去の習慣の何を捨て何を拾つて「これからどう書くか」を問題にするのである。

嚴島と平清盛

安東路翠詠

嚴島と清盛

忠盛の大き御心つばらかに瀬戸内の海渡り廣がる
清盛の幼き學び四書五經兵法御手に法華經を諭す

(高野山で高僧の幻有りて嚴島神社造營をすめられる)

現つたる八葉臺の高僧の示顯に神社の造營はあり

(人柱の代りに石に經を書き海に沈める)

經石の慈悲傳はりて有終の音戸の關を武將は飾る
經典に慈悲を學びし武將なり稱へしものは善と笑顔と

(國寶平家納經は、嚴島を飾る世界遺産)

經納め青葉に心洗へれば潮はひとひそけく應ふ
願文に告り賜ひたる心ぬち島の緑の常に清しも

平安神殿造りの海上宮

(高倉院 後鳥羽院の 御幸ありて、女御への御奉納地、重要文化財多く残る)

鳴きしきる宮島の鳶高らけく天界飾る笙笛なるや
新築の白絲灌の灌の宮院の歌声雅びを展ふ

瀧本の御幸岩の詠み臺に雅歌をひろひし夕宵の宴

青松の氣高き韻を風に聞き唐織の御衣女御に贈れり

新春の梅の静けき芯の彩中宮の御衣授けくる神

管絃祭

蘭陵王右手翳しぬ潮騒と春の朧の高樓の舞

(嚴島神社の外宮、地御前神社へ還管絃の舟はゆく)

管絃の祭りを繼ぎし舟人の釣りし提灯満月に融けゆく

潮待ちの神のみ舟のかがり火を水面に搖らす笙の閑搔
地御前に管絃の音と御座船を船は曳きゆく潮もかなひて
ゆるやかに時は致りぬ大祭の笛と太鼓は終ひを告り爲ぬ

經綯無常

戰亂を生きし定めは人の世の會ひなりけり源平の將
御文の教へに添ひて學び來し血潮は威將のほまれ
執拗に襲ひ來る敵清盛の寫經に寄せし佛心は冴ゆ
戰に紛れし時も耐へゆきぬいづくの人も同胞なるに

(源平の將軍はそれぞれ紅白の色に分かれ戦ふ)

興亡は一場の夢御飾れる源平將の紅白の絲
紅白のふたもとの梅開き初み吹雪の時も越えて静けき
嚴島の龍の氣配止めるらん千人僧の誦高らかに
もの思へば定めは虚し炎晝の深き満緑いくさを超えて

清盛の稱へし嚴島其自然

嚴島大寒の朝海の面に幾百の鶴の一行に竝む

大岩太古の息吹傳へ來る遠き御祖のかの日の神事

(お正月 嚴島神社御奉納の絹織物は豊富な山繭絲のありてこそ)

山繭の淺葱は冴ゆる山境ふ觀音山の櫛の山繭

椶枝の梢に實のごと押し付きし美しき緑の蛸山繭

嚴島神社の外宮の自然

(己の神・大歳の神)

地御前の賽の神坐す金剛寺黃櫨に纏はる黃薦の蛇塊

(觀音山山頂の礫層の間に斑岩(六十センチ)が列り出土)

礫の間を石英斑岩ころげ出づ古く辿れぬ歴史を持して

岩木山と鎮まるのがの巨石群戎面樹なる神に会はむかも

比婆山へ高き嶺なる大虚の底ひに蠢く古人の郷

嚴島の松嶺

島に坐す弘法大師の青松の高き氣配や朝風の景

(流された二位の局の御供養碑には後世人の盃狀穴が穿たれてゐる)

嚴島と平清盛

添へ哥

潮干きし波のさざめる音絶えて白絲川の魚影は清し
満ち潮に遊び來たりし白き海鰯魚櫛水の川を這ひて乗り往く
緩やかに經小屋山に入る夕陽茜とゞけむ女神の島へ
聲も高き蓬萊郷を築きしや雅び舞ひし清盛の夢
聖崎の沖の小島の蓬萊郷神仰せられしか蜃氣樓浮く

(あんどろろすい 日本畫家・歌人)

假名の轉寫に就きて

アーネスト・サトウ

日本人が初めて表意文字に出會つて直ちに其をナツマリ name と呼んだことは形而上學的にみて未開社會の理解力の鋭さを示す驚嘆すべき事例だと思はれる。ジェイムズ・ミルは名づけといふことに一章を當てて、その最後で此の問題を適切に要約して「音聲言語は觀念の直接的符號を用ゐるが書記言語は觀念の二次的符號を用ゐる」と述べてゐる。しかしながら、聾啞者族の場合、もしさういふものが在るとしてであるが、書記言語が彼らにとつて唯一可能なものであるので一次的符號を成すことになるだらうし、その要素たる記號類は觀念の名といふことになるだらうことは明らかだ。事實、それらが適應されるところの本質的目的に關する限り、話される語と書かれる文字（一個一個獨立した表意文字であらうと表音文字を連ねたものであらうと）とは等しく名であり、その知覺が爲されるのが、一つは聽覺で、もう一つは視覺であるといふに過ぎない。しかし、もし、古代日本人が此の問題についての哲學的思考

に導かれて表意文字を一種の名と呼ぶに至つたと考へるなら、一連の推論を積み重ねるといふ能力が彼らにあつたとするわけで、それは實際の能力を高くみすぎることになるのかもしれない。初めて漢字を知るには、彼らは疑ひもなく畫數と筆順、音、そして日本語でどういふかを學んだ。多分、我々が實詞、いや名詞といふべきか、彼らが最初に覺えたのは、さういふものを表す文字が最初で、そして、當然のこととして、ナといふ語をあてるやうになり、ついで性質、行爲、關係を指し示すやうな他の文字をもさう呼ぶやうになつたのだと考へてまづ間違ひはあるまい。この想定の際證として辭書作成の現存する最初の試み即ち有名な源順（911-983）によつて編まれた和名抄がある。これは漢字を集めて意味を定義し日本語譯を附したものであるが、實詞すなはち名詞ばかりなのだ。云ふまでもないが、本書は言語學にとつて最大の價值を有するものであり、古典を研究する者の無しで済ますことのできぬものだ。

漢字が齎されたのが何時であつたかを確實にいふことは出来ない。西暦二百八十五年朝鮮からの渡來人が傳へたといふ説があるが、知られてゐる最初の歴史的記録の四半世紀も前の、せいぜい半歴史的とみるべき時代に屬する。通行の年代記を一瞥すれば當時治めたまひし帝は百十一歳、

れたはずはない。しかし、この本が當時もしくはそれ以後に日本人の知るところとなつた眞に最初の書籍の一つであるといふ事が事實であるならば、その事實そのことは、單なる時期以上に極めて精確に傳へられてきたであらうし、その渡來の精確な時期はもはやわからずとも七百十一年の記録に此の書名があることに驚くことはない。かくして、論語と千字文の渡來が、云はれるごとく同時であり、漢籍渡來の最初であつたならば、六世紀中葉以前の出來事ではありえない。此の説と異なるのは、日本紀（西暦七百二十年）に、四百三年といふ三世紀以上も前に、始めて諸國に

次の帝に至つては百二十二歳の齡を持ち給うたことになる。もちろん、舊約聖書でヘブライの族長の齡を事實と受入れながら、それほどでもない長壽が日本の古代記にあるからといつて本當であつたらうかなどと我々が云へたものではないけれど、この前提は眞劍な人間なら重要視するものではないだらう。思ふに、漢字が何時もたらされたかについての歴史はその一般的性格からして、記録にあるいくつかの出來事が實際に起つたのは記録された時期をかなり遠く遡る時期であつたとしても、精確に何時であつたと確信をもつて云へるやうなものではない。古事記（西暦七百十一年）は朝鮮人と遼が初めてもたらした書籍には孔子語録の論語とともに千字文¹があつたと明確に述べてゐるが、我々の確實に知つてゐるところでは梁の武帝（五百二年乃至五百五十年）以前には千字文が現在の形では存在してゐないのだから、朝鮮を通じて六世紀前半以前に日本にもたらさ

國史を置くことと、もしそれが正確であるなら、朝廷にはそれ以前に書記官がゐたことになる。數年前、純粹神道の復活といふ題で論文（會報第三卷に掲載）を書いたとき、この記述をそのまま引用した。あたかも歴史的事實と受取つたかのやうであり、また今以て、その正確さ否

¹ 本居宣長は古事記傳第三十三卷（二十七頁）で支那の或る千字文注釋本の註を引いてゐるが、それによれば千字文の起源は次のやうであつた。「晉武帝承魏後始在路州城大夫鐘繇造得此文上天子帝愛不離其手晉殷宋文帝遂移向丹陽避難其千字文在車中路逢雨車漏濕千字文行至丹陽藏書篋中晉治天下得十五帝共共一百五十年宋文皇帝劉裕承位治天下開晉帝書庫中見此千字文雨亂損失其次第使右將軍王羲之次韻不得宋帝治天下凡六十年齊承位治丹陽亦無人次第得齊武帝治三十年梁武帝承位乃命周興嗣次韻得千字文二雨によつて失はれた次第が語の水準であるのか句の水準であつたかは不明であるが、宋の文帝が王羲之の韻を次はせようとしたといふのが間違ひなのはつきりしてゐる。王羲之の死は文帝の即位に先立つこと四十四年であるからだ。南史、文學傳（Wang（中國名偉烈亞力）の Note on Chinese Literature p.17 參照）にある話の方がもっともらしい。梁の武帝の所有に有名な書家王羲之の手になる千字文があり、周興嗣に命じて韻を次はせたのはこの王羲之の書いた千字文であつたといふことだ。（Mayer 氏の Hsiao Art 68 參照。メイヤー氏は王羲之は梁の武帝のために千字文を書いたといふ。だとすれば二人は同時代人といふことになるが、前者は三百七十九年に没し、後者は百七十年後の五百四十九年没だ。）

定する用意もないのであるが、しかし、以前ほど信じきつてゐるわけではない。日本紀および古事記について特別な研究が爲されなければ歴史的記録と半歴史的なものとの間に線を引くことはできない。もっともありさうなことは漢籍と書記術を日本人に傳へたのは、たとへ最初でなかったとしても主として支那の僧侶であつたといふことで、初期の詩文や當時の發音に呉音が多いのも其のためだ。呉音は當時も、それから今日に至るまで僧侶の教へ且つ用ゐるところのもので、古典的な漢音の到來は後の時代に屬する。

漢籍が此の國にもたらされると日本人は直ちに讀むこと譯すことをし始めた。佛典は漢字で書かれてゐてもサンスクリットもしくはパーリ語の轉寫を大量に含んでゐて、それらは意味よりもそのまま唱へることが重要であつた。今でも寺院で行はれてゐる棒讀みといふ、漢字を順番通りに字音で讀む方法がならはしとなつた。孔子やその弟子の著作を學ぶものは音より意味に重きを置いたので、文字通りに譯す習慣に陥り、日本語に對當語が無いかすぐに思ひ浮かばないときは漢語をそのまま用ゐた。このやうにして無數の漢字熟語や句が日本語に輸入されて、日本語の性質に著しい影響を與へてをり、詳しくその後を辿ることは裨益するところ大であらう。二つの言語を比較して、表現の似

たもので即ち萬葉假名だ。勿論、古事記日本紀の假字が日本人が漢字を表音記號として用ゐた最初の例であり、つづいて來るのが萬葉集の歌である。

ヲコト點は様々な種類が漢學の各派により又寺院における無數の佛家により用ゐられて來たやうだ。その大半は、少くとも最後代の形は、カタカナの發明以降であり、カタカナを大量に使用してゐるのも類を見ない。堀保己一の群書類從の第四百九十五卷には見本が幾つかあり、和字大觀鈔にも一つある。これらを手稿本にある二種類の見本集と比べてみると最もすつきりしてゐるのは朝廷につながる漢學の菅家及び清家のものだ。兩家とも古典を讀む際に用ゐるものと、史書及び一般的用途に用ゐるものと二種類の點があつたやうだ。假名の使用によつて點の使用が廢れはじめてからながく、また他家へは堅く祕匿されてきたので、その働には相當の違ひが生じてゐる。例として、兩家のヲコト點と、清家方式で點をつけた孝經の一部をフアクシミリで示す。後者にあるカタカナは近代になって加筆されたもので、ここに示すのはその手稿本のコピー。

漢字で日本語を表記するといふ考へは明らかに漢譯佛典の研究から起つたことで、そこには多數のサンスクリットまたはパーリ語（原語がいづれであつたかについてはまだ

假名の轉寫に就きて

てゐる場合に、それが漢籍による支那語の影響のためなのか、或は單なる偶然の結果なのかを區別しようとしたものはない。

原書を日本語に譯すときに頁を指で上下になぞつてみて、助辭や動詞の終りの箇所印をつけると記憶しやすくなること、また字音で讀むところか譯すべきところかを示す印があると便利なことに氣がついた。學習者用の近代の版にはこれらの目的は捨假名といふものによつて果たされてゐるが、假名が發明されるまでは、點や圈點を漢字の占めるべき四角の中に位置を變へて打つことが行はれた。かくして、四角の中央であればノ (e)、右上であればヲ (目的格)、右側やや下部であればコト (thing)、左上側なら助辭ニ、等々。これらの點や圈點は四角の中の最初の二つの點の意味からヲコト點と呼ばれる。このやうな方法で印をつけた手書きの書が残つてゐるが三代格も孝經もあるから假名が發明されて大分経つてからもまだこの方法が行はれてゐたことがわかる。普通にいふ假名で書かれた最初の散文が西暦九百二十二年の古今集であるといふことを此處で述べておいてもよいだらう。それ以前のもので現存する假字の使用例は古事記、日本紀、萬葉集、古語拾遺、それから恐らく延喜式であるが、それらは殆どあらゆる漢字を用ゐ

決着がついてゐないはずだ)の語が單に表音記號として用ゐたところの漢字によつて表記されてゐた。これらのうち今日の日本語にまで傳はつてゐる語も少くはなく、當然のことながら佛教各宗派の經文にははるかに多く傳はつてゐる。この問題について考へたことのある者なら、單音文字にせよ音節文字にせよ、その最も簡單かつ且も完全な形のもの如何に發明の才能に恵まれてゐたとしても或る一人の人間の頭腦から生まれでたなどと想像することはできない。そしていろいろの學者が調査して解つたことは我々全てに關係する或る一つの例、すなはち羅馬文字に於て、埃及の繪文字からの發展の過程がきはめて緩やかであつて、一つの段階から次の段階に移るまでに長い時間を経てゐるのであるが、それも連續した一人種によつてなされるのではなく、世界の異なる地を占める繼起する幾つもの人種を経て今日の形になつたといふことで、それも、音聲を記録する手段としては、きはめて不完全なものだとしか云ひやうがない。これが、漢字の到來以前に日本には文字が、音節文字一日本語の物理的構造に適ふのはこちらなのであるが一般に、最も科學的な原則に基づき、長短の線を、變化の一般則に應じて縱横につかつて構成された單音文字であつたとする説に對する強力な反證の一つである。これが平田

篤胤杯が云ふ神代文字もしくは神代字であるが、これは明らかにハングルを修正して借用したものだ。ハングルを調べたことのある者なら、それがアルファベット式表記體系の基づくべき規則を理解した一人乃至數人の手によつて案出されたものだといふだけでなく、サンスクリットのアルファベットに基づくものだといふことをただちに取らう。サンスクリットのアルファベットは間接的にあるが、假名の成立と、その配列の順序に影響してゐる。もし漢字の到來以前に文字があつたのであれば、ヲコト點を工夫するには及ばなかつたらうし、支那で聲調を記すに用ゐた圈點を利用することもなかつたらう。

日本人が自分の言語を假字で即ち漢字を單に音聲記號として用ゐて書くやうになつたのは何も突然の發見によるものではない。漢文を知りそめて後の最初の衝動はその様式で書くことであつたらう。日本紀は、日本人が手本に習ふことによつてどれほどのことができるかを示したものだ。といふのも、彼らの書く文は漢籍の原典に基づく句でほとんど埋め盡くされてゐるので主題は日本の傳承であり歴史であるのであるが借用文のモザイクなのだ。詩や傳承の内容だけでなく形式をも保存せんとした場合は、譯すことの

2 古事記傳第一卷二十九頁裏より四十四頁。

歌を假字で書くといふことが一度に普及したわけではなく、表音文字といふことが日本人の心に親しいものでなく、直ちに採用されたわけではないといふことを示すためだ。

二つの假名、我々が今有してゐるところのかたちでの片假名と平假名は實際は吉備眞備（六百九十五年誕生七百七十六年没）と弘法大師（七百七十四年誕生八百三十五年没）といふ二人のひとの工夫したものだといふことである人が多數であらう。といふのも、それがはるか昔からの傳承であり、また日本人教師の權威にもとづいてさう教はつてきた。歐洲の代々の學者によつてもさう繰り返されてきたからだ。四十七の平假名（平易な假名もしくは平たい假名のどちらの意味であるかは問題ではない）を選び、それを大盤若經の經文のある部分と同じ意味になるやうに並べたのが名前を擧げた後者であり、また當時つかはれてゐた片假名（部分的假名）について同じことをしたのが前者だといふことは十分あり得る。さうでなかつたとする證據はなく、口承によつてもさうなのだ。しかし、漢字を借りるといふ意味での假字つまり漢字を表音的に用ゐるといふことが二人の發明ではないことに疑ひはない。漢字のこの用法は佛教の

できるものは漢文で書き、對當語を思ひつかない場合には漢字を表音記號として用ゐて原語の音を表記した支那の僧侶に習つて、一つ一つの音節を同音の漢字を用ゐるか、もしくは同音の單音節日本語で其の義を表すことができる場合は、其の漢字（音假字 *on kana* と訓假字 *kun kana*）で表記したし、又、意味が異なる漢字の譯が同じ音の二音節の日本語であるときに、漢字一字で二音節を表すことも、ときには漢字一字の音で二音節を表すこと（二合の假字）²も行はれた。これは、はじめはやむを得ずして行はれたのであるが、やがて歌はもつぱら假名で書かれるやうになつた。一度發見がなされると必要があれば他の場合にも應用される。かくして古事記や日本紀の歌の表記は假字でのみなされてゐるが、歌は神々も詠んだのであるから、言葉遣を正確に傳へることが絶對的に重要だとされてゐたのだ。萬葉集では主として八世紀中葉以降の表記がさうであるが、それ以前のものは半分漢文であるから譯し戻す困難がある。山上憶良は七百三十年頃であるが同時代の人がもつぱら漢字を表意文字として使つてゐるのに主として假字で書いたといふ例もある。柿本人麻呂は七世紀後半まで生きてゐたがほとんどすべて表意文字だ。以上のことを述べたのは、

經典を漢譯した僧侶の發明したもので、それが佛教の布教僧によつて漢譯佛典とともに傳はつてきたのだ。古事記³日本紀、萬葉集⁴のやうな現存する最古の書物、延喜式の祝詞、日本紀の後を受けた累代の國史には日本人の音韻の一つ一つを表すために無數の漢字が用ゐられてゐる。氣をつけねばならないことは、これらの漢字はすべてとはいはないまでもおほくは草體で書かれたといふことで、古代の歌書や史書の記念碑的なものは丁寧に楷書で書き寫されて來たと考へるならば大間違で、シェークスピアの近代の版と第一フォリオとの綴りが同一だと信じるやうなものだ。實際、萬葉集の意味不明な箇所には寫字の際に生じたあやまりによるものが多く、原本の崩し字が楷書で書かれてゐたならありえないほどに崩してゐる。これらの假字はだんだんともとの複雑な形を失ひ、もとの字形を復元しようとするところが代々なされるやうにならなかつたら元の字と似たところはまったく失せてしまふところだった。なんの助けもななく「む」に「武」を認め、「あ」に「安」を、「み」に「美」を、「る」に「留」を認めることなど不可能だらう。數が大きくなつたので子供に教へるためにもつとも簡易なものを

3 漢字については古事記傳第一卷三十頁參照。
4 萬葉用字格は假名を網羅してゐる。

選ぶことが必要になり、かくして選ばれた一組のものが伊呂波假名と呼ばれるのであるが、これは通常、呼稱においても実際においても平假名と混同される。

同様に言備眞備が片假名を作ったといふことも信じがたい。初期には通常の四十七のほかにも多數の字があり、今でも古物収集家のあいだでは限られた用法がらみることができ。四十七は多數の中から選ばれたのだ。筆者がこれまでみたもの⁵を表にしてみた。

上段が變つた形の片假名　中段が普通の形、下段が上段の假名の元になったと思はれる漢字である。平假名の成立より片假名の成立が早かつたかどうかは解らない。またそれがいつかは解明されるといふ問題ではないといふのが近年の日本人學者の一致した見方だ。しかし、それぞれの假名の人工性の度合から論ずれば、片假名の發明者は平假名の發明者の誕生時には没してゐたわけであるが、片假名の方が後だったと思はれてならない。さう考へるのは歐州の人間があんなにも度々驚きを持つて氣付いてゐる次のやうなことがあるからである。それは片假名の方が我々にとつて易しく、また明らかに原則が單純であるにも拘らず、教育あるものや國語辭書利用者をのぞけば近年になるまで知

5 延喜式出羽本及び好古日録三十九参照

竝べたものだ。これが書物に現れたのは、假名の成立よりかなり後の、千百八十五年の管絃音義が最初だ。和名抄十卷本は最古の寫本が千五百四十六年であるが、これには別の配列が出てゐる。これを四十七の片假名で寫すとなれば三字は二度の働きをしなければ完結しない。理論上はかつては存在したはずの空隙を獨自の假名を工夫して補はんとした學者も近代にはある。假名が缺落した音節もかつて日本語の一部をなしてゐたと信ずるには十分理由のあることを示すつもりであるが、しかし二種の假名が成立した當時はをはりのン（これは後代の付加）を別にすればすでに四十七であつたことはほぼ確實であり、あとで述べるやうにこのうち三つは口語日本語から消滅したのである。

日本語音節文字に對當する記號の満足できる一組に到るには三つの公理を認めねばならない。第一に假名ごとに異なる記號を選ばねばならず、一つの記號はある一つの假名を表すこととし、かくして、翻字された語はもとの假名にあやまりなく復元可能であるといふこと。

第二に、もし假名が構想されたときにあつて、漢字でなく羅馬文字によらねばならなかつたとしたら、日本人が採用したであらうやうな對當記號を用ゐるべきだといふこと。そして、その時代の發音について不明な場合は現代の江戸

假名の轉寫に就きて

られてゐなかつたといふことだ。

ナ	ナ	ナ	ナ	ナ
キ	ホ	ヨ	テ	マ
幾	保	與	天	万
示	ネ	ヲ	レ	ハ
子	子	ノ	ム	ス
禰	禰	乃	无	凡
示	刀	尸	子	才
レ	ミ	ミ	イ	ス
礼	身	民	伊	寸
	七	乙	禾	太
	廿	匕	𠂇	夕
	左	比	和	太

いづれにしても、さしあたつて重要なことは、いづれかのときに、恐らくさほど時間をおかない引き續いてのことだと思ふが、日本人の口にする全ての音が四十七の記號で書き表せさうだといふことに、この問題について頭を悩ませたあげくに氣がついた人があつたといふことで、付随的もしくは條件的な音の差を示す必要があれば濁點の類を付して區別するわけだ。そして片假名と平假名とで書きあらはせることになつた。これらの記號の音價についてこの片假名を用ゐて述べることにする。

四十七音の最も科學的な配列は五十連音韻圖といふ名で知られるもので、すなはち音節及び韻母よりなる五十音を

および京都の發音を採用するといふこと。

第三に 一つの假名を轉寫する場合に絶対必要な數以上のアルファベットを用ゐないこと。

我々が使用する羅馬文字の音價についても少し述べねばなるまい。もし歐洲の或る言語をとつて母音字も子音字もその言語の通りにできれば一番便利だらうことは明らかだ。翻字式日本語のアルファベットはかく選ばれた言語式に發音すると言へばすむ。しかし、不幸なことにさうはできない。筆者のみるところ西語の母音は日本語のそれともつとも近似したものであるが、西語の子音は日本語の子音とすべてが一致するわけでない。母音字の場合によく大陸的音價と呼ばれるものは今や一般に最も簡單にして科學的なものと認められてゐるが、これが、多少の違いはあるが、獨語伊語西語に共通のものだ。最も *a*, *e*, *i* それから他の三つの母音も獨語や伊語より短いことは認めねばならない。日本語のウを書く場合に佛語の *ou* や蘭語の *oo* を用ゐるとすれば均整を缺くだらうし、その上オウと書くのに *oui* とか

ooeとか書かねばならない。佛語や蘭語の母音表記は十分であつて役に立たないし、英語では日本語の代表的な母音はほとんどのところ方言にあるに過ぎない。子音に關しては、大陸式と異なる場合、英語式が最上だ。f, h, e, b, d

並べたものだ。これが書物に現れたのは、假名の成立よりかなり後の、千百八十五年の管絃音義が最初だ。和名抄十卷本は最古の寫本が千五百四十六年であるが、これには別の配列が出てゐる。これを四十七の片假名で寫すとすれば三字は二度の働きをしなければ完結しない。理論上はかつては存在したはずの空隙を獨自の假名を工夫して補はんとした學者も近代にはある。假名が缺落した音節もかつて日本語の一部をなしてゐたと信ずるには十分理由のあることを示すつもりであるが、しかし二種の假名が成立した當時はをはりのン（これは後代の付加）を別にすればすでに四十七であつたことはほぼ確實であり、あとで述べるやうにこのうち三つは口語日本語から消滅したのである。

日本語音節文字に對當する記號の満足できる一組に到るには三つの公理を認めねばならない。第一に假名ごとに異なる記號を選ばねばならず、一つの記號はある一つの假名を表すこととし、かくして、翻字された語はもとの假名にあやまりなく復元可能であるといふこと。

第二に、もし假名が構想されたときにあつて、漢字でなく羅馬文字によらねばならなかつたとしたら、日本人が採用したであらうやうな對當記號を用ゐるべきだといふこと。そして、その時代の發音について不明な場合は現代の江戸

假名の轉寫に就きて

られてゐなかつたといふことだ。

ナ	ナ	ナ	ナ	ナ
キ	ホ	ヨ	テ	マ
幾	保	與	天	万
示	ネ	ヲ	レ	ハ
子	子	ノ	ム	ス
禰	禰	乃	无	凡
示	刀	尸	子	才
レ	ミ	ミ	イ	ス
礼	身	民	伊	寸
	七	乙	禾	太
	廿	匕	𠂇	夕
	左	比	和	太

いづれにしても、さしあたつて重要なことは、いづれかのときに、恐らくさほど時間をおかない引き續いてのことだと思ふが、日本人の口にする全ての音が四十七の記號で書き表せさうだといふことに、この問題について頭を悩ませたあげくに氣がついた人があつたといふことで、付随的もしくは條件的な音の差を示す必要があれば濁點の類を付して區別するわけだ。そして片假名と平假名とで書きあらはせることになつた。これらの記號の音價についてこの片假名を用ゐて述べることにする。

四十七音の最も科學的な配列は五十連音韻圖といふ名で知られるもので、すなはち音節及び韻母よりなる五十音を

および京都の發音を採用するといふこと。

第三に 一つの假名を轉寫する場合に絶対必要な數以上のアルファベットを用ゐないこと。

我々が使用する羅馬文字の音價についても少し述べねばなるまい。もし歐洲の或る言語をとつて母音字も子音字もその言語の通りにできれば一番便利だらうことは明らかだ。翻字式日本語のアルファベットはかく選ばれた言語式に發音すると言へばすむ。しかし、不幸なことにさうはできない。筆者のみるところ西語の母音は日本語のそれともつとも近似したものであるが、西語の子音は日本語の子音とすべてが一致するわけでない。母音字の場合によく大陸的音價と呼ばれるものは今や一般に最も簡單にして科學的なものと認められてゐるが、これが、多少の違いはあるが、獨語伊語西語に共通のものだ。最も *a*, *e*, *i* それから他の三つの母音も獨語や伊語より短いことは認めねばならない。日本語のウを書く場合に佛語の *ou* や蘭語の *oo* を用ゐるとすれば均整を缺くだらうし、その上オウと書くのに *oui* とか

ooeとか書かねばならない。佛語や蘭語の母音表記は十分であつて役に立たないし、英語では日本語の代表的な母音はほとんどのところ方言にあるに過ぎない。子音に關しては、大陸式と異なる場合、英語式が最上だ。f, h, e, b, d

假名の轉寫に就きて

t, k, m, n, r, s に關しては問題がない。残るのは伊語で e や i の前では o で、その他の場合なら e で表す音だ。伊語の方式は一定してないといふ理由で直ちに却下されるだらう。獨語なら *sch* と四字必要で佛語なら *sch* でどちらも多くすぎる。英語西語の *ch* が最も簡單だ。伊人が *sch* と書き、獨人が *sch* と書き表す音に對して英語の *sch* は簡單。これに拮抗するのは佛語の *ch* ぐらゐ。しかし *ch* は別の目的のために採用したのでこゝでつかふことはできない。n の音價は蘭語英語佛語で共通。そしてそれ以外の言語で日本語の翻字に對して何か言へさうなのは獨語と伊語だけであるが、彼らは少數派だから、n を s の濁音にしたからといって、外國人が誤讀する可能性は s を表すとする場合より低い。次に、*sch* がちゃんとあるのは蘭語英語獨語だけだ。これは伊語では母音字 *sch* で表されるが *sch* は我々には別の用途がある。また佛語の *sch* は不恰好だ。しかし、英語蘭語の *sch* の用法は（全く同一ではないけれど）獨語發音より多數といへる程度には十分に似てをり、そもそも獨語の音は日本語に全くないものだ。k の濁音については英語 (j と e の直前では違ふ音になる語がある)、伊語 (a ou の直前)、獨語 (語や音節の開始位置) の *sch* それから佛語や伊語 (a ou の直前) の *sch* から選ぶことができるが、後

十になる。

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
wa	ra	ya	ma	ha	na	ta	sa	ka	a
キ	リ	イ	ニ	チ	シ	キ	イ		
ki	ri	i	ni	chi	shi	ki	i		
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
u	r	y	m	f	n	t	s	k	u
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
e	re	e	me	he	ne	te	se	ke	e
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
wo	ro	yo	mo	ho	no	to	so	ko	o

この圖ではイウエが二度の役をつとめてゐる。そのことについて論じるのは後にして、その音價や羅馬字表記について問題のなかつた行から始めることにする。

かくして、カ、キ、ク、ケ、コはだれもが ka, ki, ku, ke, ko と書くし、ナ、ニ、ヌ、ネ、ノは na, ni, nu, ne, no だ、マ、ミ、ム、メ、モは ma, mi, mu, me, mo だ。ラ、リ、ル、レ、ロの場合に歐洲の言語の r より i に近い音を感じる人もある。しかし、この行の父音の發音が日本のどこかで i に似てゐるとしても、いろいろな地方において日本語が話されるのを耳にする機會があつた外國人の一致した證言は直接間接を問はずで表されるところの音に近いものであるといふことで、ra, ri, ru, re, ro と書くことがこれまでの慣用にも適うことははっきりしてゐる。この

6 實際は二語である十五や四五も例外となる。

假名の轉寫に就きて

者は不恰好であり *sch* の方が簡單でよい。残る子音は *sch* といふ音節の父音すなはち *sch* の有聲音だ。佛語ではこの音を表すことができない (*sch* を除く)。伊語なら *sch* が可能だが、これは別の用途、すなはち *sch* の濁音に必要だ。獨人なら *sch* と書かねばならないがこれは認められない。シの父音に對して *sch* を認めなかつたのと同じやうにやや無理な表記だからだ。蘭語にはこの發音はない。そこで英語の *sch* が簡單といふ點で他の候補を抑える。子音はかくして簡單にいへば英語の音價といふことになる。疑ひもなく、*sch* でなく *sch* に何か符號を付した記號を用ゐ、*sch* でなく、イタリック體の *sch* 或はカレットを冠した *sch* を用ゐ、*sch* でなく何か外の特別な記號を用ゐる方が科學的であるやうに見えるだらうが、印刷所でつかへる手段、活字をつくる手間、またアクセント符號や讀分け符號を無視する一般的傾向を考慮すればこゝで述べる妥協の方が實際的だ。

音節と韻母の表の最初の行は次のやうになる。

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
wa	ra	ya	ma	ha	na	ta	sa	ka	a

片假名は右横書。a の下に残りの母音が並び、外の假名の場合も父音と母音の組合せが並び。しかし、かうすると五

アルファベットの精確な發音及び歐洲の種々の言語によるその違ひは本稿の論ずるところではなく、日本語の發音ではなく正書法が問題なのだ。

日本語における軟音のつまり有聲喉音は二ヶの點もしくは圈點を硬音の喉音に付して表す。

ゴ ゲ ギ

九州ではこれらの音は語の如何なる部分にあらうと同じやうに *sch* と發音されるが、京都及び昔の都の東に位置する地方でさう發音されるのは語頭においてのみであつて、語中では鼻音になる。この一般則に外れるのは、通常前の語の一部のやうに發音される助詞の「が」や「*ga*」⁶「*ga*」の場合であつて鼻音となる。他方 *gata-gata* *goro-goro* のやうに *sch* で始まる語根を單に繰返す場合は鼻音化しない。このやうな繰返しはハイフンで結ばず、二語として書くべきではないかといふ疑問がわくかもしれないが、この軟音の喉音を、さう發音される場合は *sch* と書き、鼻音化されるときは *ng* と書けばよいとすぐに思ふひともあるだらう。しかし *ng* と書くとき英語の人は *ng* と發音しかねない。たとへばカゴを *kango* と書くとき *dingy* (小舟), *jingo*,

lingo, mango, fandango, Congo, Rangoon, shingle, jingle, dangle, Mongol, Fingal 等々にある通りそれが英語の流儀なので、大抵の人は kang-go と發音するだらう。伊太利亞人も西班牙人もこの綴りなら nage と發音するだらう。從つて全ての場合に *ng* と書き、上述の場合、一定の例外的場合を除いて、鼻音化するという規則をあらかじめ設けておくのがよいやうに思はれる。九州では此の規則は無視されるのであるが、しかし、そのために住民が誤解するおそれはない。

次に考へてみるのは齒擦音サシスセソの行だ。筆者の知る限り、第一假名と最後の三つの假名を *ss* *ssu* *sshe* *ssu* といふ點で全ての日本語文法學者が一致してゐる。しかし、シに如何なる記號を當てるべきかとなると意見が異なる。その行の統一性から、もしくは元來の昔の音がさうであつたはずだから *ss* とすべきだとする人々がある。また、主として、さう發音する肥前方言で學んだ先人の表記に盲從してさう書く人々もある。しかし、さうなるとセは肥前方言ではさうであつたやうだから、*she* としなければならなくなるはしないか。しかし、江戸や京都、それからその他ほとんどの地域でシは *shi* と發音されるのだから、さう書く方が都合がよいはずだし、またさう書いたところで、そ

れが同じ齒擦摩擦音であるといふ事實を曖昧にすることはまったくないので、ソセスサと同じ行に屬すると記憶するのも容易なことだ。セを *she* と發音する地方があることは、この行の父音は元來は幾分曖昧であつて *s* と *sh* との中間にあつたのが時がたつにつれて子音をくつきりと發音する習慣が生じ、地方によつてある段では別の段では *ss* が好まれた。それで二つの都及び大半の地域では *ss* *ssu* *sshe* *ssu* であり、西の方の肥前やその他の幾つかの地方、また本會紀要第三號百四十五頁のチャールズHダラス氏の説によれば米澤でも *sa si su she so* なのだ。元來の中間的な父音を羅馬文字で表すには讀みわけ符號の助けを借りなければ不可能だらうが、それは常に避けねばならないことなので、此の場合の最上の道は最も教養ある人々の實際に用ゐる標準的發音を採用することだ。

サシスセソに濁點を付すことによつてザジズゼゾを得ることが出来る。この中の第一第四第五の表記について研究者の間で意見の違ひはほとんどなく、これを *zane no* とすることに反對する人は私の知る限り無い。もしシを *ss* と書くのであれば相似の理からしてジは *ssu* とすべきだらうが、しかし實際のところさう發音する地域は比較的になく、南九州に限られてゐると思ふ。この國に來た我々の

ほとんどが「を當ててきたのはほとんどすべてのところの發音が英語の「の發音に似てゐたからだ。アストン氏も日本口語文典及び日本文語文典の各版に於て慣用に從つた。日本文語文典の第二版に於て、この「を、それとまったく同一であるところのヂの父音すなはち *child* や *church* の *ch* の軟音つまり有聲音と區別するべく後者を *chi* と書いたが、これは明らかにチが齒音の行に屬すと考へたからであつて、*ch* を導入して付け足したのも其の性質を誤解させることはまったくないものだ。研究者はできるだけ一般的な方法を探ることが望ましいのは知れたことであるが、筆者なら「はヂの父音のためにとつておいて、ここでは *ss* をつかふところだ。この問題については齒莖音の次に齒音の行を論ずるところで再度取り上げることとする。

ズをどう書くかは難しい問題だ。疑ひも無く江戸の人々は通常ズをヅと混同してゐるのであるが、しかし、幾つかの語に於てはズを正しく、すなはち *zu* と發音してゐるふしがある。ズといふべきところをヅといふといふ習慣は、この住民にあまねくみられるわけではないので、丁度我々が語頭にアクセントがあつてヒではじまる語の場合にシと言ひまちがへるのは中流階級以下の人々取り分け婦人に多いことに氣付くやうに、實際のところ教養人でない人々の

間だけのことなのかもしれない。しかし、これはある地方の標準發音の一つと認めるべきものではない。毎日この間違を犯す多數の人がそのことを十分自覺してゐて、しばしば間違をなほさうとするあまり、間違つてないところで面白い間違ひをするのは、丁度教育のない英國人が間違を犯すまいとするあまり「の場所を間違ふのと似てゐる。ズをヅと發音することがすべての階層で教養人と無學者であると問はずにあまねく行はれてゐるとしても筆者は *ss* と書くべきだと主張したい。なぜなら、かう綴る方が對應する日本語文字を示す點で有利であり容易であるからだだが、もし必要なら、此の場合は *zsu* と發音するといふ規則を設けてもよいとさへ思ふのは、*ss* の方が上品な發音であり、日本の假名遣の學者が正しい發音だと認めるものであるからだ。

さて齒音の行タチツテトの番だ。齒莖音の場合と同様、意見の違ひのまったく起つたことのないものが幾つかある。すなはちタテトで、だれもが *tate to* と書いた。残りの二者のうちチは東日本における研究者はみな *chi* と書き、長崎で日本語を學んだ者や長崎で學んだ歐洲の人間に手ほどきを受けた故ホフマン博士のやうな人々は *ss* と書いた。シを *ss* と發音する方言の場合はチが *chi* と發音されるの

は豫想できることだ、なぜならいづれの場合もチはシに子音「*ch*」の半分を冠した音だからだ。英國人ならおのづと發音するやうに「*ch*」または「*sh*」と發音しようとするれば、「*ch*」を發音しきつてないことははつきりする。英語の「*ch*」は「*t*」と「*sh*」との二つの子音より成るもので、一個の單音ではないと主張する人々に對する返事のなかでマックス・ミュラー教授が「*ch*」は半分の「*t*」と半分の「*sh*」より成るといふことはできるが半分の「*t*」と半分の「*sh*」なら一個の子音にしかならない」と述べてゐる通りだ。調音器官は「*ch*」を發音しようとする、しかしその試みは挫折する、發音しきる前に變容するのだ。ツに關しては在日と在歐とを問はず現在までのところ、ほとんどすべての學者が「*ch*」と書いてきてゐて例外は極めて少數だ。「*ch*」が「*ts*」と云ふのではないと同様に父音が「*ts*」だからと云ふわけでなく、歐洲の人間が日本語の音をさう發音しようとするとき「*ts*」が求める音に一番近いやうに思はれるからだ。マックス・ミュラー教授が子音「*ch*」について述べたことは「*ts*」にもほとんどそのまま當てはまるので、つまり、半分の「*t*」と半分の「*sh*」より成るわけだ。しかし理論的統一性への希求のために學者の中には、とくにフイレンツエ高等學院の學者の中には、チツを「*ts*」と書

間的な、我々のアルファベットでは適確に示すことのできない音が言はば純化したものといふことだ。この行全體の古代の音がどうであつたかを確かに知ることはできない、元來の性質について確信できたとしても、それを示す方法がないのだから、われわれの力でできる、江戸と京都の標準的方言の現代實際に行はれる發音を示す方が實際的だと思ふ。

日本語における軟齒音はニゴリを打ってダヂヅデドで表される。ここでもまた第一と終りの二つの表し方に關しては研究者は一致してゐて、あまねく、*da de do* と表記される。硬音もしくは無聲音のチおよびツを *ti* および *tu* と表す人々は當然對應する軟音もしくは有聲音の音節は *di* および *du* と書く。日本で學んだ歐洲の間人は大多數が *gi* は *di* と書いてゐるが、アストン氏は例外で、すでに見てきたやうに、日本文語文典の第二版では *gi* と書くジと區別して *zi* と書く。この種の讀みわけ符號がある方がよいことはあきらかだ。翻字された語やテキストから元の假名を復元しようとするればイ段における軟齒音と軟齒擦音とを同じやうに表記することほど研究者をなやますもの

く人も若干あつた。古代の發音がさうであつたといふことを恐らく根據にすること彼らによれば *chi* や *tsu* は近代の劣化だ。この書き方を採用した日本人學者もあつた。歐洲の文字のなかにところどころ日本語を書くときに不規則な事實を犠牲にして明らかに理論的統一性を優先させたのだ。エドキンズ博士は漢字學入門の百八十一頁でチは最初 *ti* であつたのが後に *chi* となつたと主張、それを證明しようとして漢字「丁」*ting* が日本語表記でチヤウ *chiyan* となつたことを舉げる。しかし、日本語表記が字音を正確に表してゐたと想定する理由はない。同じやうに、現代の日本人が英語の定冠詞 *the* を假名で書かうとしてズイ (*zu*) とかズキ (*zumi*) としたところで、ズの現在の音が *ti* であることにはならない。もつとも簡單な説明は古代日本人が有した *ti* に最も近いものがチであつたといふことだが、しかし二つがかつて全く同一であつたといふことを示すものは何もない。*tsu* と *chi* が *tu* と *ti* の劣化したものだと思定する如何なる證據も存在しない。もつとありさうなことは、もしこの行の五つの音節に單一の父音があつたとすれば、それは現代語にみられる二つの子音の中間的なものであつて、*ti* のところは、かつて存在した中

はない。英語における「」の發音は有聲音であり、對應する無聲音は *ch* と書く。もし *ch* で表すならば、*ch* は *ch* で表すのが最も然るべきではないか。もつとも齒擦音のジがほとんど國中で *ch* と發音されることも事實ではあるが、しかしこれが正しいものでないことも明らかだ。正しい音は *ch* か *ch* か、少くとも兩者の間にあるものであつて、子音に關する限り英語音にもとづくとする轉寫法では、*ch* もしくは *ch* の劣化したものを表すのに「」を用ゐるべきではなく、*ch* に對應する有聲音を表すといふ本來の用途に限るべきだ。マックス・ミューラー教授の生理學的アルファベツト⁸およびサンسكريットの轉寫における「」の用法もまったく同様であることは、*ch* は *ch* とすべきだとする筆者の案を支持するものだと考へる。同時にまた、この點について結論するにあたり、アストン氏の方法がつよく推奨してゐることもみておくべきだ。それは二つの假名を完全に區別する一方、現在もつとも行はれてゐる發音にしたがつて讀むことをも同時に可能にするといふことだ。

羅馬文字の子音では精確に表すには元來の父音が曖昧すぎる行の第三はハヒフヘホだ。これらの記號で表される音

が或る環境では容易に硬軟二つの唇音、パビブペポとバビブペポに成ることから、これを唇音とすることは當然であるやうに思はれる。西日本では肥前、北では奥州の發音は實際 *fa fu fe fo*¹⁰ に限りなく近いものだ。十六世紀における初期の基督教宣教師が一番親しんだ方言もさうであつたやうだし、日本語についても似た最初の近代の歐洲の人は主として長崎で知識を得たので、當然ながら父音として「フ」を用いた。彼らの方法は來日することもなく江戸や京都の教養人の發音を耳にする機會もないままに日本語を研究する歐洲の人々の習ふところとなつた。他方、日本についての研究を東日本ではじめた人々、特に聖職者でもある S R ブラウン博士や J C ヘボン博士はこの五つの假名を實際に耳にする音で表さうとつとめ達成可能な範圍で一番近似するものとして *ha hi fu he ho* とした。h が *spiritus asper* (激しい呼氣) を表し、唇音より喉音 (獨語 *ch*) に近いといふ事實にもかかはらず、これを用ゐることは、鈴木音次郎¹¹ の『語學捷徑』の次の記述にも適ふやうに思はれる。

「古今萬國をいへばハヒフヘホなり。其の證は口を開き喉より眞すぐに息を出せば軽くハ——と鳴る。息のおの

¹⁰ ダラス氏、本會紀要第二卷百四十五頁

¹¹ 別名源重胤。

づから口中へあまねくふれひづく聲なり。又唇を開き寬げ齒を合せて息を出せば自然おのづからかるくヒ——と鳴る。息の齒にふれ口中へひづくこゑなり。それに反して唇を合せ窄め齒を開きて息を出せば軽くフ——と鳴る。息のおのづから唇へふれひづくこゑなり。またさらに舌を下腭かみぐちへおしつけしひて息をいだせばおのづから軽くヘ——と鳴る。息の内腭より下腭へ觸れひづくこゑなり。これに反して口びるを窄め口中をふくらめて上腭へむけて息を出せばおのづから軽くホ——と鳴る。息の上腭へふれ口中へひづくこゑなり。是を音になほしてたしかに言へば、喉音のハヒフヘホなり。又今すこしたしかにいへば、半喉半音にして半唇音だ。」

抜粋部分からはつきりとわかることは、この日本人學者の考へでは、この行全體が唇音の性質を持ちながら、ハヒヘホの四つは主として呼氣が口内の壁に響いて生じるものであり、一方、フは唇に空氣があたることによるといふことだ。ハヒヘホの父音がいづれの場合に於てもまったく同一だと考へる人はないだらう。ヒの調音の説明は標準語の其の音を生じるやう精確に計算されたものだが、それはハ

の父音とはかなり異り、ヘの父音とはさ程でなく、ホの父音とは似てゐない。しかし四音に通じる性質は我々のアル

フアベットのどの音よりも「」に近いのだから、ほとんどすべての在日の學者が受入れてきた「」の方が、いくつかの方言における此の音に對して用ゐられてきた「」より好いやうに思ふ。かう考へるならハヒヘホは *ha hi he ho* と書くことになる。しかし、フの場合に唇音であることは日本人學者の示す證據ではつきりしてをり、上述の學者連もまた「」としてきた。アストン氏が此の父音と我々の「」とは異り、下唇が上の齒に觸れることはなく、「呼氣を強く伴つた *vu* だ」と指摘するのは正しい。自分の耳が教へるところもさうだと思ふけれど、しかしまた、*h* より「」にはるかに近いと思ふ。これは日本人に英語の *who* という語を發音させてみるか、あるいは日本語のフではじまる語を幾つも選び、フのところを *vu* また *hu* に交互に取り替へて繰り返し聽かせみて、どちらの方がよいとおもふかを訊いてみると簡単に解ることだ。「*vu*」の方がよいと答へるはずだ。

ハ行のハヒフヘホに濁點がつけば *ba bi bu be bo* となるが、これは日本中どこでも聽かれる音に一致してゐて、この表記は、筆者の知る限り外國人の間でも違ひはない。

半濁點つまり圈點がつけばつねに *pa pi pu pe po* と表記される。

残るは三つの行、すなはち純然たる母音の行、*yu* で始まる行、それに *ye* で始まる行だ。他の行は全て五つの假名が揃つてゐたので、こゝでも當然同じはずで、*ai ueo ya yi yu ye yo wa wi wu we wo* があるとと思ふだらうが、事實は理論的に十五のところの十二の假名しかない。語源的に考へるなら、かつて *yu* があつたことはあきらかだ。たとへば動詞イル「射」の語幹は *yu-ni* 「弓」の語根及び *ya* 「矢」と同一であり、*yume* 「夢」の古形イメは *ime* という音になる前は *yime* であつたに違ひなく、*kuyuru* 「悔」の語幹は *kuyi* であつたし、*oyuru* 「老」のそれは *oi* であつた。語頭でなく漢語起源の複合語の語中でなら今日でもこの音を聴くことができる。たとへば「官員」「婚姻」を *kan-yin* *kon-yin* と發音する人は多い。同様にウが單純な母音 *u* であり、また原始的 *wu* でもあるといふことを示すこともできる。*utsutsu* 「現」は現に萬葉集第十七卷第二十一頁では *wotsutsu* であり、「鬼」は第十四卷第二二十六頁裏では *wosagi* で、「嘘」は第十四卷第二十三頁裏では *woso* で、第四卷第二第三頁では *wosoro* で、通常ウンと呼ばれ

¹² 『萬葉集略解』参照。

る「獺」を和名抄は第十八卷第十七頁裏で *woso* としてゐる。*Arctylis ovata* は和名抄では *wokera* となつてゐるが、古い歌では *ukera* といふ形だ。このどちらの形が古いのかを確實にいふことはできないが、古代の *u* が近代では *o* になつてゐる頻度からすると、同じことで起きたであらうと推測して *wu* が *wo* になつたとしてよいだらう。語頭の *u* が *wo* になることはありえなかつたらうから、*wo* の前身は *wu* だつたはずだ。¹³

エをどう表記すべきかに關して如何なる意見を持たうとも、終止形が *miyuru* 「見」*oboyuru* 「覺」*moyuru* 「炎」自動詞、*koyuru* 「越」*hayuru* 「生」自動詞、*tayuru* 「絶」自動詞、*nayuru* 「萎」自動詞、*iyuru* 「癒」自動詞、*fuyuru* 「殖」自動詞、*sayuru* 「芽」自動詞、*kiyuru* 「消」自動詞、*hiyuru* 「冷」自動詞、*nyu* にをはる動詞の語幹が *mye-obo-ye-moye-koye-* 等々のやうに *ye* にをはつてゐただらうことは疑ふことが出来ない。今日でも、此の國の大半で語頭におけるエは *ye* と發音されてゐて、筆者が現在知つ

¹³ 例は敷田年治『音韻啓蒙』第一卷七頁より。

¹⁴ すなはち單獨で發音される語の頭、文にあつては直前の語の語末の母音もしくは撥音の影響を受ける。

¹⁵ アイウエオは、それが複合語でなければ若しくは *mono-usu* 「鬱」、*yakiba* 「刃」*yakiba* の劣化のやうに、かつて存在してゐた子音が失はれた場合でなければ、語の中心に現れることはなく、そして、そのやうな場合に隙間が生じることは半母音の挿入（これは通常書かれることはない）によつて避けられるか、または二ヶの母音を二重母音にするか、一つの長母音にすることによつて避けられるのである。

¹⁶ 字音假字用格 p.7.

ワナナクとキナナク「嘶」が等しいといふことはヲキワが同じ行に屬すといふことを證明するもので、ワが *wa* で、キが *ki* であるならヲが *wo* でなければならないといふことに異論を唱へた者はない。更に、オの元となつた於の元來の發音が *o* であつたこと、またヲの元となつた乎の發音が *wo* であつたことを示すことも可能だ。

片假名のエは漢字の江¹⁷に由來したといふことと、對當する古代日本語の發音が *o* であつたので、この音を表すために略體が用ゐられたのだといふことが最近まで一般に信じられてきた。和名抄によれば江は和名衣だから、日本語の發音は衣と等しいといふことだ。従つて和名抄が編まれた當時において江と衣が假字としてまつた等しかったことを疑ふことは難しく、兩方とも同じ綴りにしなければならぬ。ここで、假名四十七文字が選定され、そのため *o* かのどちらかが失はれたのは此の辭書の編纂の前であつたのかといふ問題が生じる。もしさうであるなら、引用した箇所によつては何もきまらない。書かれた日本語として現存する最古の見本である古事記では、假名でエと書かれるべきものが愛延江枝などで書かれてゐる。對應する支那語

てゐる限り、語頭で *o* と發音するのは江戸と京都の方言だけだ。これらの方言であつても、開音節や撥音 *o* に先立たれるときには大抵かすかな *u* を伴つて發音される。にもかかはらず、賀茂眞淵本居宣長鈴木音次郎など初期の文法學者や語源學者及びその流れを汲む人々はすべてエは純然たる母音行に屬するとみてアイウヲもしくはオと同じ行に置いたのである。

オといふ假名については、かつてはワ行に屬してゐてア行に屬するのはヲだと考へられてゐたことに注意しておくのがよいだらう。注目すべきは賀茂眞淵も和訓栞の著者もさう考へてゐたことだ。實際、二つとも現在は語頭¹⁴に於て *o* と發音され、一方、ヲは目的格を示すものとして、または語¹⁵の中心（オの後、ときにはイの後の場合を除いて）では英語の *wo* にきはめて近い音で發音されるが、呼吸は弱い。しかしながら、オではなくヲがワ行に屬するとする見方にはもつと強い證據がある。本居宣長が言ふやうに、ヲとキル「存在」が、タワヤメとタヲヤメ「手弱女」が、

音によれば、この四字のうち第一は元來 *o* 第二は *yo* と發音されてゐたはずであるが、江と枝はともに訓假字なので *o* なのか *ye* なのか見ただけでは判らない。上にあげた學者より後の學者はエは江ではなく延に由來するとする。もしさうであれば、延は明らかに早い時期において父音 *u* を伴つてゐたのであるから、假名文字エは *yo* であつたに違ひない。大石千引の言元梯はエで始まる語は「得る」一語を例外としてすべてヤ行に置いた。その中には江で始まる語も當然含まれるから、もし彼が正しいとするなら、假名文字エは江に由來しやうともまさしく *ye* であつたわけだ。本居宣長と鈴木音次郎はエの音價を *o* とする説を主張したもつとも著名なるものであるが、後者は *yo* の假名として、衣の下半分を取つた *o* を提唱、彼はこれでヤ行に屬する音を表すことを考へたのだ。他方、漢吳音圖の太田方、優れた假名文字の手引たる綴字篇の片山淳吉、音韻啓蒙の敷田年治、文法や語源についての現存する權威の一人たる堀秀成も衣の正しい音は *o* だとする。この意見は康熙字典の確証するところで、それには三種の先行韻書に基づいて衣は於希の切だとある。片山と堀はそれで *o* を *o* で示すこ

¹⁷ 支那では此の字は川を意味するので日本語對當語も其の意味を持つと思はれてきたが、しかしこれは正しくないやうだ。和名抄は唐韻を引いて、江が海と定義されてゐるとする。海の字の意味するところははっきりしてゐる。

とを提唱するが、これは衣の字の上半分を採つたものだ。他方、敷田はエは^oを表してゐてそれが正しいのだ考へたのか *ye* は延の字をいい具合に略した^oを持ち出す。しかしながらこれらの新しい文字は日本語表記のためのものではなく、五十音圖の隙を埋めるといふそれだけのために發明されたもので、我々にとって實際的價值を有するものではない。以上の議論によつて問題をとりまく不確かさと高名な學者の間における意見の隔たりの極端さがわかるだらう。筆者は結局のところエおよび對應する平假名を含めてだが、その正しい表記は *ye* だとする人々に組したい。第一に、二つの都で語頭で普通の發音が ^e であるとはいへ、西部や北部であまねく耳にするのは *ye* であり、また都雅な方言からはとくに消滅した語形や發音がしばしば邊鄙の方言に保たれてゐることはよく知られてゐることだ。過去の傾向が常に子音を抑へるものであつて、*usagi* 兎、*uso* 嘘、*uso* 獺 (これらは元來は *wusagi* *wuso* であつた) や、また疑ひもなくその他の語に於ても *wu* が *u* になつてゐること、*u* (^u) の父音 ^u があまねく脱落したこと、*u* がオと區別がないこと、二つの假名が成立した當時から語頭に

18 冠辭考第二卷三十頁。
19 音韻啓蒙第二卷二十八頁。

おける ^u が ^o と混同されてきたことなどをみれば、少なくとも元來の ^o が父音を獲得して *ye* となることはきはめてありさうにないことだ。換言すれば、いづれかの時期に於て ^o がひろく行はれてゐたとすれば、それが國の半ば以上の地域で ^u にとつて代はることができたと信ずることは難しいといふことだ。従つてもつとも無理のない結論は伊呂波を作つたとされる人が四十七の平假名を選んで日本語の清音のすべてを書き表すに十分だと考へたその當時に行はれてゐた發音は *ye* で表されるものだといふことだ。其の上、語中の二つの母音に隙間があることは日本語の習慣に反し、*oboe moe koe hae* 等々は不可能だといふのがすべての日本人學者の認めるところ。これらの見解に従へば、これらの語幹の本當の發音は *oboye moye koye haye* 等々でなければならぬ。枕詞の *uchiyosuru* も證據だ。別の形は *uchi* *江* *suru* だ。こゝで江は *ye* と讀まねばならないことはあきらかだ。何となれば *yo* は ^e と交替できず、交替できるのは父音 ^u を持つ假名だけだからだ。母音が語頭以外の如何なる場所にせよ直前に子音がないやうにみえる場合については敷田に十分な説明がある。19 以上の理由

で、エ及び其の對應する平假名はどれでも *ye* とするのがよいやうに思はれる。結果筆者の提唱する表記は次のやうになる。

オ ウ イ ア
o u i a
ヨ エ ユ ヤ
yo ye yu ya

残つた十二のうちの四つの音はワ行のものだ。その父音を表すには ^u が一番だけれど、英國人が普通發音するよりだいぶやわらかく又それほどにはつきりしたものではない。現代、少なくとも京都及び江戸の標準語に於ては、その中三つ即ち *u* *e* *y* は其の父音を失ひ *ie* *o* とまったく同様に發音される。エを *ye* と發音する方言ではエの發音も同様だ。四番目のワは和語に於ては父音を未だ残してゐるが、しかし漢語の場合、ワウ (王) などではアとまったく同じ音だ。これらの事實にかかはらず假名の成立時にはまだこの消滅は起つてゐなかつたことを疑ふことはできない。

イウエ (これらは消滅した *ye* *we* *e* をも表す) の場合からして假名の構想者は當時の實際の發音に導かれてゐて、語源論の考慮にまったく影響されることがなかつたのはあき

假名の轉寫に就きて

らかだ。また表すべき音が一組しかなかったとすれば、わざわざ *yo* とオ、*u* とイ、エとエを採用することもなかつただらう。父音の喪失はきはめてはやく、恐らく十二世紀には起きてゐたはずで、オ *u*、イ *u* は混同されて書かれるやうになつてゐる。しかし古代の文書では區別があつた。今日、發音では區別がないにもかかわらず、近年の語源研究者の努力により、和語漢語の兩方に於て正しい假名遣が復活したのだから、どちらかわからなくなつてゐるやうに *u* *e* *y* は *wi* *we* *wo* と書くのがよいだらう。 *wiru* (居) と *iru* (射)、*woru* (居) と *oru* (織) はまったく同じやうに發音される、しかし表記する場合はこの簡単な方法で口頭の場合に存在する曖昧さを避けることが有利なことは明白だ。なんととなれば口頭の場合は質問して疑問を除くことができるが、文書は文字面にある以上の説明を與えることはできないからだ。

エとエの場合には難しい問題があつて今のところ解決法がない。西日本及び北日本にはエ (*we*) で始まるのにエで始まると書かれてゐる如くに、すなはち、その地方の慣例に従つて *ye* と發音される和語が少数ある。^o が父音 ^u を獲得するのは難しいと述べたが、しかし、もし *we* が *ye* になるさいに東日本でのやうに單に ^u を落としただけだ

とすれば、それこそが起つたに違ひないことなのだ。ㄹが直接ㄲと交替したと説明されるべきなのかもしれないが、そのやうな説を支持する如何なる證據も知らないことを白状しなければならぬ。eru (得) が yeru となったといふ孤例は難しくはない。語頭が ye の例が無数にあればたつた一個の。の例はまぎれてしまふと考へることができらるだ。

最後にン(平假名では「ん」)がある。これは音節末もしくは語末にしか現れない。本居宣長は『漢字三音考』で「ん」は「毛」の草體もしくは平假名「に」に由來したのではないかとし、『假字考』の著者岡田眞澄は「ん」は「无」に由來するとする説だ。他方、新井白石は「ん」もンも梵字のアナシカと同じだと見てゐて、岡田も片假名に關しては新井の説に傾いてゐる。もし形が似てゐるといふことが決め手であるなら「无」を擧げるただ一人の説より此の説を採るべき理由が大きいことを認めねばなるまい。いづれにしても此の二つは他の二種の假名字よりはるかに後代のものだ。萬葉集では、後代であればㄹがあるべきところゝは mu としか讀めない字ばかりであるが、勿論、現代の翻字にあるンや「ん」は當時の發音をいみするものではない。また、これが漢語の和譯が確立したあとの發明であ

ることゝもあきらかだ。といふのも、もし漢語が假名で表記されるやうになつたときに存在してゐたならば、聲母 ㄹ はもつとも近い音だからこれが當然用ゐられたはずだからだ。しかしながら實際は母音 ㄴ (ウ) がこのために用ゐられ、chang 長、tang 堂、tong 東はチャウ、タウ、トウと書かれてゐる。これが當時の日本人にとつて手持の假名でできるもつとも近似した表記であつた。現代日本語の發音に於てもㄴには軽い鼻音の響きが聴こえるときがあるほどだ。今日ンに終るやうに書かれる漢語は往時はム mu で終つてゐたのだ。

古代における未來の助動詞ム(mu)が後代にン(ㄴ)になつたことから、ンの起源はあらゆる場合に於てムであると性急に結論されさうだが、しかし、それが正しくないことは容易に示すことができる。nukide が nuki-de 「拔出」から、kanganni が kaganni 「鑑」から、-zūba が -zuba 「でなければ」からのやうに、單に後續の子音を強めるためにしばしば起ることがあり、また固有名詞でも本來のものなら Bugo (豊後) Bigo (備後) が Bungo や Bingo だ。mi の轉訛によるのもよく普通だ。ason は asomi 「朝臣」から、kindachi は kimi-tachi 「公達」から、kan-zashi は kan-i-sashi 「簪」からだし、連用形語尾の mi は、tanōde

が tanomite 「頼」から、yōnde が yomite 「讀」からだ。mo も ㄴ になる。neñgoro は nemogoro 「懇」からだ。ㄴ は nañzo が nanizo 「何」から、ikan が ika-mi 「如何」から、ri は (kudai no gotoku 「件」の如く) kudai が kudari から、ohannu が oharinu 「終」から。ru は、aumeri が arumeri 「在」から。ha は waraube が warahabe 「童」から。hi は moñdo が mōhi-tori 「主水」から、kurañdo が kura-hito 「藏人」から、akindo が aki-hito 「商人」から、それから、活用語尾の bi は、oyōnde が oyobite 「及」から、toñde が tobite 「飛」からだ。ho は hotoñdo が hotoboto からだ。しかしながら、mu の轉訛によるンは他の源に由來するものよりはるかに多い。

從來歐米の學者は全てとはいはずともほとんどが「ん」やンをㄹで表記してゐた。もし、語末にしか起らないのであればこれに反對する理由はほとんどない。但し、それは、もし讀者が此のㄹが母音もしくは w h f などが後續したときには佛語の鼻音ㄴのやうに發音するのだといふことを常に覺えてゐるのであればといふ條件がつく。人々に此のことをあらゆる場合に想起せしめようとするこの困

難を效果的に避けるには何等かの符號をㄴに付せばよい。讀者はこれによつて少くとも通常のㄴとは異るとの示唆を受けるだらう。これを達成するもつとも簡便な方法はㄴを用ゐることだ。これはもつとも普通の活字フォントにあるものだが、これ以外のものを使用することを選べば特別に鑄造せしめねばならぬだらう。

結局のところ、讀者は語末のㄴは佛語における場合の如く發音するといふことを容易に身につけるだらうから特別な記號は必要ないといふこともできやうが、其れに對する答は漢語起源の語で中間にンを持ち次に母音が續くものが多數あつて、もしンの翻字が單なるㄴであるならば豫め其の語を知つてゐるでなければ其處のところどう發音すべきかを知ることが不可能であるといふことだ。たとへば「懇意」「原因」「天恩」「延引」「婚姻」「安穩」が koni genin tenon ein konin anon と書かれたならば初見で正しく發音できるものだらうか。大抵はこれらの語をㄴが後續の母音に屬するやうに眞中でわけて ko-ni ge-nin te-non ye-nin ko-nin a-non と讀むことだらう。そして、このうち少くとも二番目の場合は同じ組合せ genin が「下人」を表すにも

20 マックス・ミュラー教授の生理學的アルファベットにある下部に點を付したㄹが此の音を表すには最適なのかもしれない。言語學講義第二卷百五十二頁參照

用ゐられるだらうことから讀むときに意味の兩義性が生じる。これは *ro* で *ro* を表す場合の間違つた發音、それによる聴き手の誤解を勘定に入れないやうに *kon-i-gen-in* *yen-in* 等々のやうにハイフンを利用する解決案もあるが、この難點は大抵の場合これらの語は通常の意味における複合語ではないにもかかはらず間違つた印象を與えかねないことであり、また本來の用途に用ゐるのがあまり適當でなくなつてしまふ。此の音を表すには *ro* を少し變へたのを用ゐるのがあきらかに適切だ。選ぶなら我々が交渉をもつ東日本の印刷所に一番ありさうなものにすべきだらう。唇音 (*h* と *f* は除く) のまへでは *h* と發音され、齒音のまへでは *ro* となるといふ事實もこの問題には關係ない。これは表音的であれ假名に對應する方法であれ如何なる羅馬字方式を採らうとも身につけねばならない發音規則に含まれることで、それらを身につけない限り文を正しく讀むことは出来ない。

上述の考察から假名字母を翻字する合理的にして簡便な方法は次のやうになるだらう。

イロハニホヘトチリヌルヲワカ
i ro ha ni ho he to chi ri nu ru wo wa ka

に日本語の假名にしたがつて語を轉寫してみるのが當然。假名遣とはなんであるかを知るだけのためにもそれは必要なことだ。中世、戰國時代にあつては文字の嗜みを培ふ餘裕はなく、正書法は無視され誰もが自分の耳に従つて假名を用ゐるかエリザベス時代の英國人がしたのと同じやうに私的な特定の師に従つたのである。正しい假名遣について知らないことが大勢であつた一つの原因は主として漢字で書く、もしくはそれに由來する文體で書くといふ習慣で、假名の正當な使ひかたを知ることとはほとんど必要なかったのだ。にもかかはらず、この知識の源となるものは初期の歌集や散文小説に存在してゐたし、二百年のあいだに日本人學者の努力で文學に屬する全ての語の正書法がだんだんと決まつてきた。まだ疑問の残つてゐるのはごくわづかの例外だ。彼らの調査の結果は谷川士清の『和訓栞』に纏められてゐて、これが和語及び若干の漢語音の假名遣の際に従ふべき手引だ。字音それから當然ながら支那からの借用語の假名遣については本居宣長の『字音假字用格』にある目錄類が一般にみとめられた權威だ。これは鈴木音次郎の『詞捷徑』にも、それから『歌學集腋』にも收められてゐる。これらの書物があれば、書物で出合ふあらゆる日本の語を

ヨタレソツネナラムウキノオク
yo ta re so tsu ne na ra mu u wi no o ku
ヤマケフコエテアサキユメシシ
ya ma ke fu ko e te a sa ki yu me ni shi
エヒモセスン
we hi mo se su n

または

アカガサザタナハババマヤラワ
a ka ga sa za ta na ha pa ba ma ya ra wa
イキギシジチニヒビビシ○リキ
i ki gi shi ji chi ni hi bi bi shi o ri ki
ウクグズヅヌフブムユル○
u ku gu su zu tsu dzu nu fu pu bu mu yu ru o
○ケゲセゼテデネヘベメエレエ
o ke ge se ze te de ne he pe be me ye re we
オコゴソゾトドノホポボモヨロヲ
o ko go so zo to do no ho po bo mo yo ro wa

假名字母の表記法がかく決まつたからは、希臘語露西亞語獨逸語を羅馬文字で轉寫するときに丁度我々がやるやう

和語でも漢語でも、また耳にする口語の百のうち九十九までも表記するのになんの困難もない。口語と文語との違ひは主として文法的形式と語の意味にあり、また後者は漢語に乏しいといふだけだからだ。

この假名一字一字を轉寫していく方法をこれまで一般に用ゐられてきた表音的羅馬字方式に對して正書法方式と呼ぶこととしたい。異なる文法形式間の關係をよりはつきりと示すといふこと、語のもつとも早い時期の發音を目にみえるやうにするので語源研究に資するところ大であるといふこと、さうでなければ關係は容易にみえてこないだらうし、また現代發音にもとづく表音的表記はこの關係をばやけさせるだけだといふことからして、言語學的的目的からするとこの優位性は非常に大きい。たとへば、繩と綱といふ語を表音的に *nawa no* と書くなら、見かけ上は語頭の *n* 以外に共通點はないことになるが、もし正書法方式で *naha nafi* とかくなら、*a* の前の *n* は *n* の前で *n* であるといふことを覚えてゐるだけで、一が他方に由來することをみてとることができのだ。したがつて又、この方式によるならば *awo* (緑、青) と染料を採る植物 *awi* (藍) とが關係してゐることを一目で了解することが可能だ。正書法的表記

21 歌集は除く。歌は漢語を認めない。

はまた日本語と他のアルタイ語族との關係を辿らんとする比較言語學の研究者なら是非用ゐるべきものだ、この語族の言語を話す人種がわかれたのは歴史時代の始まるはるか以前のことで、到達できる最も早い時期の形は比較にとつて最高に役立つものとなるだらう。表音的綴りによれば間違ひが起るだらう。最近印刷されてしられた例は肥沃な園まれた平野を意味する *taira* という語は韃靼語の *daira* (川、川一平野) と語源を同じくするのではないかといふ説だ。 *taira* を正書法方式でつづれば *ta-hira* であつて、第一音節は多くの語に共通の前綴りで恐らく *te* (手) のことであり、 *hira* が此の語の本質的部分であるが、平といふいみだ。さてかうなると *daira* と *hira* との間には似たところがありさうにないのは確かだ。

正書法方式は語源學に役立つので、この採用は調査の大半が語源學的研究に基づく上代史び神話の學徒にとつても望ましい。古典文學の辭書類もこの方式に基づかねばならない。何となれば現代の發音を示されても八九世紀以前に用ゐられてゐた語を日本で研究する者にとつては何の價值もなく、歐州で研究する者にとつては困惑をますだけだ。假名遣に關して和語と漢語に違ひを設ける如何なる理由もあるとは思へない。古典の散文、また多數の現代の書物に

京官話だけであつたとしても、それらに對する恆常的關係を調べあげることが廣範圍にわたる仕事だが、ここにあげた少數の例だけでも、假名表記がそのやうな研究を裨益するところ多大なものがあることを示すに十分であらう。他方、現代日本語の發音、とくに東の都の發音は單に人を誤らせるだけだ。漢語由來の語の假名を覺えるのに和語の場合ほどやつかいなものはなく、教育ある人間でも今日の正書法で間違を犯さないひとは少ない。他方西日本においては小さい子供でも東日本では混同される *kuwatsu* と *katsu* を、 *kuwan* と *kan* を、 *kuwaku* と *kaku* を發音しわけられないことはない。

日常用ゐる場合でも有利な點がまだある。アクセント付の母音字をつかはないことで、米蘭英佛獨伊で用ゐないのはたゞ *ro* の一字であるが、これは *o* と其れとははなはだ異なる別の音との混同を避けるために絶對必要なものだ。一方、表音方式の場合は、これまで工夫されたどの方式でも長短の *o* に短音の *o* それに恐らく長音の *o* のほかに五語に一語は *o* に長音符が必要だ。實際にやってみると、これらのアクセントをわざわざ用ゐる人はほとんどなく、結果として發音通りに綴られる語はなく、また、綴られた通りに發音すれば通じないといふことになった。もつ

假名の轉寫に就きて

於てしばしば漢語が假名で書かれて、意味を示す漢字がない場合がある。假名の組合せが和語なのか漢語なのか研究者はどうやってみただけで知ることができやう。たとへばキヨは漢語の居かもしれない、あるいは和語キヨシの語幹かもしれない。しかし若し辭書で和語は正書法方式で、漢語は表音方式といふことになれば、讀者はまづ語の國籍の見當をつけねばならないが、確率論からして、平均十回に五回は間違ふだらうし、檢索の勞は五十パーセント増になつてしまふ。更に、和語と漢語要素よりなる單語の場合はどう綴るのか。一部を表音方式で他の部分を正書法方式でなといふことをいふ人は確かに一人もないだらう。漢語を正書法方式で綴ることにはまだ利點がある。それが和語の場合に採用されたとしてのことだが、漢語起源の語を假名の通りに綴ると十四五世紀前の支那語の標準發音を決めるのに大きく役立ち、それから北京官話の發音がわかる場合が多數あるので、現代の支那の各種方言を知る上で非常に有用な點だ。かくして、日本語の韻母 *au* は北京官話の *ao* であり、日本語の *shiyau* はほとんど常に北京官話の *shang* である、他方、*ou* は *ung* に對應する。日本語の韻母 *wau* は支那語の *wang* を表し、*ai* は *au* を、*uwan* は *wan* を表してゐる。漢語の日本語綴りが各種の現代方言の、或は北

とも適切な例は *oho* (大) で始まる地名の場合で、これは長音の *o* で發音されるので、表音方式では長音符かもしれないシルコンフレックスを冠した *o* で表す。しかし、そのやうな字母のあるフォントは少ないので特注しなければならぬし、また書くときにアクセントを付す人も少ない。かくして日本第二の都市の名は *Osaka* と綴られ、日本における初期基督教の歴史において有名な長崎に近い町の名は *Omura* で、九州の一地方の名は *Osumi* となつた。これらはすべて本當は長音の *o* なのだ。さらに、一方が長音の、他方が短い *o* を有する島や姓の場合にどちらも *Oshima* とか *Oyama* と書くしまつた。もし、提案された便法通りに長音の *o* は二重の *oo* で表すなら *good* や *brood* の *oo* のやうに讀まれる危険がある。少くとも英語を話す人々の場合はさうだ。發音規則をさだめて覺えてもらふべきではあるけれど、さういふことをするのであれば、わざわざ我々が新規に發明したことについての規則でなく假名遣についての規則を覺えてもらへばよいではないか。従つて、かかる場合において、二十年ばかり以前の人たちがさうしたやうに、假名遣通りに *Ohosaka* … と綴るべきだと思ふのだ。これはアクセント符號を刈り取られた表音式表記に對して正書法式表記の有する多くの利點の一つにすぎない。日本

人が漢字假名交じりでの表記に替へてアルファベットで書くことにすれば、外國人は規範を有することになるから、それに従つて書かざるを得なくなり、兩方式のどちらかといふ問題は永遠に解決するだらう。これは日本人の利益のために強く望まれるところであるが、今のところ、この改革がなされさうにはない。新聞の論調、公的布告、告示、法律等に見られる時代の傾向はすべて反對を向いてゐる。深奥な資料から表意文字の繪畫的助けなしには理解不能の漢語をきはめて勤勉に探し出し新規に組合はせたものが日ごとに巨大なる語彙に付加されて遠からず大部分は全知全能の者以外には誰にも理解不能になるのではあるまいかと思はれるほどだ。しかしながら筆者が頁を費やして試みてきたのは、達成可能なものとも實際的な羅馬字方式の組立てである。これは發音や意味の混同を生ぜず、英語佛語蘭語を發音できるために身につけなければならない規則にくらべてはるかに少ない規則を獲得するだけで日本語の發音を容易なものとするだらう。

譯者あとがき
本稿は日本アジア協會紀要第七卷（明治十一年）に發表された Ernest Satow の On the Transliteration of the Japanese Syllabary の譯である。
「エ及び其の對應する平假名はどれでも」といふところ、原文は the corresponding hiragana signs となつてゐる。これは局所的に見ると不可解な複數形だ。ア行のエとワ行のエと音の上で違ひはない。もしあつたとすればヤ行にもあつたはずではないか。サトウはヤ行とア行のエ段の假名を區別するために提唱された字形をいくつか紹介してゐるが、そこは空白のままにした。御興味のある方は片山淳吉の綴字篇や鈴木音次郎の語學捷徑に當られたし。もつともかういふものを所藏してゐるところは驚くほど少ない。Satow の論文集でみるのが簡單かもしれない。
日本語の音節構造は子音プラス母音であるが、それを切り離して言へば、initial consonant と final だ。initial consonant に父音を當て、final に韻母を當てた。單に initial だけでも「父音の」と譯した。ちぐはぐながら consonant だけの場合は子音とした。

清音濁音といふことと有聲音無聲音といふこともそのまま對應させられないのは母音を伴ふ音節で無聲音といふこと

をいふことができないからである。原文で hard とか surd かいふのは硬音もしくは無聲音、ときに清音と譯し、soft とか sonant とかあるのは軟音もしくは有聲音、ときに濁音と譯した。西歐音聲學で普通にいふ硬音軟音とは異なる。

對當語といふのは equivalent の譯。辭書學で translation equivalent の譯語として見たことがあるが、あまり用ゐられてはゐない。對應語とする人もあるけれど、わかり易さからすれば譯語といつてもよいところ。equivalent は化學でなら當量、その嚴密さにこたはつた。

サトウ論文、抜刷でみると別丁で三葉。畫像で取り入れたのはその一部。「兩家のヲコト點と、清家方式で點をつけた孝經の一部をファクシミリで示す」といふ箇所は譯出しただけで畫像としては示さなかつた。

外に參考文獻が縦組で四行。

磨光韻鏡 韻鏡袖中祕傳鈔 漢吳音圖 漢字三音考 諸家點圖
遠古登點譜 好古日録 萬葉用字格 和字大觀鈔
古事記傳 字音假名遣 音韻假字用例 假字考 假字類纂
言元梯 詞捷徑 歌學集腋 音韻啓蒙 小學綴字篇

この參考文獻の示し方にあきらかなやうにサトウの日本語といふ資料に對する態度は子山羊の手袋で扱ふとはかういふことかと思ふほどだ。英文の中でも右横書で書かうと

假名の轉寫に就きて

する。但しこれはタ行まででタ行を論じるあたりから左横書に變つてゐる。この間に少し時間があつたと思はれる。

ローマ字の系譜

定年後提唱した擴張ヘボン式は翻字式として最初のものだと思つてゐたところ震災後に朝河貫一博士の入來文書があることを知つた。八十年も何故埋もれてゐたのか不思議であつたが更に五十年も遡つたので驚いた。博士の場合はまだ長音なるものを認めてゐるので翻字式としては徹底してゐない。博士もサトウ論文を知らなかつたのだと思ふ。サトウ方式と擴張ヘボン式の違ひは表でみたかぎり違ひ氣がつく人はないのではないかと思ふ。ア行のエ段が空白でヤ行のエ段に ye とあることだ。

それから撥音をロとするか、またはロとㇿをつかひ、必要に応じて區切り符號をつかふとするかといふこと。サトウはロとすれば區切り符號は不要だとするが、「官員」「婚姻」のところで kan-yin kou-yin とハイフンを使用してゐるのであるから、その効果はさほど無いことははっきりしてゐる。今は ASCII にあるものでまかなへることが重要。サトウも今ならロのことは言はなかつたに違ひない。サトウの場合は拗音を考へずに濟んだ。假名字母の成立

のときに拗音は音聲としてはあつたはずだ。ただ其れをヤ行やア行の假名を小書きにして示すことはなかったのだと思ふ。そのままローマ字に寫すのは読み手の負擔が増える。これもサトウ方式の難點だったと思ふ。譯稿で拗促音を小書にしたことを諒とされたい。

表音文字の音のことをサトウは value と power とも言ふ。ハ行の power は潜性的なものだ。擴張ヘボン式では逆アポスロフイとして、語頭のときに息となるとして *h* とした。これで非常に読みやすくなる。もちろん、もとの假名に復元することになんの不自由もない。

以上、サトウ方式との違ひについて觸れた。以下通行のヘボン式について記す。

- 東京大學教養學部英語部會推獎方式。撥音は *b p m* の前で *h* とする。長音を認めて疊込みマクロンを付す。
- 米國國會圖書館方式。撥音は *z* で通す。長音を認めて疊込みマクロンを付す。
- 旅券方式。撥音は *z* で通す。長音を認めて疊込むがマクロンで區別することはしない。ただし、才段の場合に限り *oh* としてもよい。
- 國土地理院方式。撥音は *z* で通す。長音を認めて疊込むがマクロンで區別することはしない。

後書

本會創立の立役者だった福田恆存の、生誕百年といふことで昨年は幾つかの記念行事が行はれましたが、その一端として昨秋、歿後に一番早く『福田恆存論』を上梓された金子光彦さんに講演をしてもらひました。三島由紀夫と對比しながら、犀利な論理を展開する福田恆存をよく穿つた講演でした。

桑原草子先生は、獨逸語の冠詞についての話でしたが、日本語で未だ決着のついてゐない助詞の「は」や「が」の問題、その他が類推され、語學に關心のある方にはかなり興味の持てる講演でした。

本號では、資料が二つ扱はれてゐます。そもそも本會會誌『國語國字』はその創刊號から國語問題に對する資料を載せてをり、第一號には森鷗外の「假名遣に關する意見」、第二號には山田孝雄の「文部省の假名遣改定案を論ず」、第四號には芥川龍之介の「文部省の假名遣改定案について」の全文が見られます。『國語國字』はDVDに收めてあるので有料でお頒けできますし、ホウムページでも見られるやうにしてゐます。

資料の一つは、明治維新の激動の時代に日本で始めは通

● 文化廳の外國人のためのハンドブックの方式。撥音は *z* で通す。長音を認めるが疊込むのではなく同じ母音字を重ねて示す。

長音について持つて廻つた云ひ方をした。擴張ヘボン式では *au* や *eu* は音便で *autumn* や *Europe* の場合のやうに發音すると規定。要するに二つの母音字が異つてゐて、それが一つの音のやうになる場合だとする。氷の場合は *ko'on* だから、これは *o* の繰返しであつて長音ではない。一つ例を挙げよう。「往往」は歴史的假名遣の轉寫では *wauwan* であるが、*ai* は語中のハ行音と同様ア段でのみ兩唇半母音となるもので *au* の場合は發音されない。つまりこのままの問題はないわけだ。他の方式では難しい。

撥音は *z* で通すといふことはヘボン式からの逸脱で研究社大和英辭典第三版に始まる。和英辭典はみなローマ字で見出しをたててゐたがローマ字では引きにくいといふ聲がでてきた。さういふ時期に、ローマ字をひきやすくする便法としてあみだされたのが撥音を *z* で通すといふことだったのでべつに日本人の撥音が齒莖音一本槍になつたといふことではない。だから、日本語教育であれば、兩唇音の前の *z* は *z* のやうに發音するといふ注記が必要になるはずだ。

譯として活躍し、日本人女性との間で子供も設けた親日外交官アーネスト・サトウの、假名をローマ字にする際の「正書法方式」についての論文を載せました。本居宣長など多くの國學者達の文章にも目を通し、九州から東北に至る日本人の發音の實態をも斟酌し、鼻濁音をも意識した提案です。なんと現在の日本には日本語のローマ字表記法が十種類以上もあつて混亂を極めてゐます。その正書法を確立せんとする時にこのサトウ論文は、大いに裨益するものと斷じられますし、同時に、正假名遣の正統性を立證することにも役立ちませう。改良ヘボン式ローマ字表記を標榜する本會理事上西俊雄氏が見つけ、翻譯したものです。

餘談ですが、英國公使パークスが徳川慶喜と會見した折、慶喜が「粗末な物だが」と贈物を渡したので、サトウがそれを字句通りに譯したため、パークスが粗末な物を贈物にするわけは無い、誤譯ではないかと疑つたので、慶喜は傍でやきもき、「日本人は謙遜してさう云ふのだ」とサトウが辨明して誤解がとけたとか。蔭で大政奉還へと導いたとされる慧眼外交官サトウの一挿話です。

事務局長 谷田貝常夫

◇ 正統表記のための 実用工具紹介 ◇

「國語國字」通巻DVD 本會會報創刊號（昭和三十五年）より第一八五號（平成十七年）迄の全頁をDVD一枚に
電子畫像掲載 國語問題協議會發行

「今昔文字鏡」 單漢字16万字版 ver.4.52 CD-ROM

UnicodeのCJKV漢字はもちろん、大漢和辭典收録の約五萬字、甲骨文字から梵字、大陸の簡體字まで、多種多様な文字を收録。廣大な漢字世界を體系づけ、檢索、印字等その用途は無限！

發賣 株式會社式 エーアイ・ネット

平成疑問假名遣（平成十七年版） 字音はもちろん動植物・地名人名、専門用語まで、注意すべき言葉を普く網羅。

最新の改訂は <http://homepage3.nifty.com/gimon/> 参照。

國語問題協議會發行

正統國語ソフト「契沖」 ver.19.1 歴史的假名遣、正漢字をパソコンで完全表現！

字音假名遣による同音異義語の打分けにも對應。

有限會社申申閣 (<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~keichu/>)
創業二十周年感謝セール 特價一四、八〇〇圓

インターネット URL

國語問題協議會

傳言板

<http://kokugomondai.kyo.sakura.ne.jp/>
<http://d.hatena.ne.jp/kokugokyo/>

關連電網

文語の苑

<http://www.008.upp.so-net.ne.jp/bungsono/>

文字鏡研究會

<http://www.mojikyo.org/>

横濱五十番館

<http://literature.jp/>

(有)申申閣（「契沖」）

<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~keichu/>

平成疑問假名遣（高崎一郎）

<http://homepage3.nifty.com/gimon/>

日本漢字教育振興協會

<http://www.kanji-kyoiku.com/>

高池法律事務所

<http://www.takaie.com/>

地獄の箴言

<http://kimura39.txt-nifty.com/>

言葉の救はれ―福田恆存論（前田嘉則）

<http://logos.blogzine.jp/1/>

現代國語への處方箋

http://www.geocities.jp/kokugo_shohousen/